沫の加くふるは冬の沫雪と云ふのみ

○冬でもりは霜雪にうもるゝをのみ云なり思へることせばし冬は閉蔵とてよろづニヨドンデアツタ木ノ葉ガ今流レテクルヂヤ。

故郷と吉野の山し近けれ〻ひと日も深雪ふらぬ日はなし

○此吉野ノ里ハ高山ガ近イニヨツテ。ケガナ一日モ雪ノフラヌ日ト云フハナイ。

我やどは雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

○コチノ庭ハ。イチメンニ雪ガツモツタマヽデ道モナイ。フミ分テ尋子テクル人ガナイヂヤニヨツテ。通ツテクル人ガアラウナラセメテ道ハシレテアラウニ。

冬のうたとてよめる　紀ノ貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲ける

○冬ガレテマダメモデヌ草モ木モ。雪ガフレバ。春ニハサタナシノ花ガ咲タワイ。ソウタイ花ハ春ニナツテ咲クモノヂヤニ。

しがの山こゑにてよめる　きのあさみね

のものみな内にこもるを云なり

白雪のところもわかずふりしけばいはほにも咲花とこそ見れ

○雪ガトコト云フナシニ。タヒラ一メンニツモツタレバ。木デハナウテ花ノ咲マイ岩ヘモサ花ガ咲タト見エル。

（千秋云。志賀の山でゐハ。花の名どころなれバ。春の花のことを思ひて。よめるならんか）

ならの京にまかれりけるときにやどれりけるところにてよめる　坂上これのり

みよし野の山のしら雪つもるらじ故郷寒くなりまさるなり

○今夜ハ吉野山ノ雪ガイカウツモルサウナ。ソレデ此ヘンマデガ此ノヤウニダン〳〵サムサガマサルヂヤ。

○このつもるらしと云ひなりまさるなりと云は雪のやゝふかきほどの意なれど次もつもるらしといひなりまさると云なり

寛平ノ御時きさいのみやの歌合のうた　ふぢはらのおきかせ

浦ちかくふりくる雪はしらなみの末のまつ山こすかとぞ見る

○カノ奥州ノ末ノ松山ト云所ハ古歌ニ涙モコエナントヨンデ。アツテ名ノ高イコトデヤガ、今カウ海邊近イ所ヘ雪ガフツテクルケシキハ白イ涙ガマコトニソノ末ノ松山ヲサコエルノカト見エル。

餘材此の初句を末の松山のあたりの。浦と見たるにやひがことなり。この浦いづくにまれ。海の浦なり。

壬生忠岑

みよし野の山のしら雪ふみ分て入にし人のおとづれもせぬ

○吉野山ヘ深イ雪ヲフミ分テコモツタ人ガ。ソノ後一向ニオトヅレモナイガ。雪ガ段々フカウナツテ便リモシラレヌ。カ。イヨ〳〵無事ナガ寒氣ノフヨイトコロナレバ、モシワヅラハレナドハセヌカアンシラルトワイ

白雪のふりてつもれる山里むすむ人さへや思さびゆらん

○ふみ分て入にしと云はいにしとさきの事をいふ云とみゆるをこのうたは猶其入にし冬の内によめるとゝみばいとゝあはれなるべし

○源氏手なら

ひの巻に小野にすみわびたる所に雪ふかくふりつみ人めたえたるさびしろぞ思ひやりたる方なかりけるとかけるにもおもひ合すべし

○わとはかもなくのわとはふみたるわとはなりはかは量許等の字を用ひてそこことはかり定ることなきをいふなり

○雪ノフツテ段々フカウツモツタ山里ハ。サゾヤ寒ウハアラウシ。サビシウアラウシサウ云所デハ。住デ居ル人マデガ。心ノキユイルヤウニ思フデガナアラウ。雪ハシマイユ消ルモノデヤガ。ソノ雪ノヤウニサ心マデガ。

雪のふるを見てよめる　凡河内ノみつね

雪ふりて人も通はぬ道なれや跡はかもなく思ひきゆらん

○雪フリニカウシテ居ル我心ハ。タトヘバ此ノヤウニ雪ガフツテ。人ドホリモダエテ。四足跡モナウナツテソコト云筋モシレヌヤウニ消テシマウ道ノヤウナ物デヤヤラ。カウシテ居ル心ガキエルヤウナ。

（千秋云。三の句の。なれやと結句のらんとのあつかひ。この譯をよく味ひてしるべし）

雪のふりけるをよみける　清原ノふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたも春にやあるらん

○マダ冬ナガラ空カラアノヤウニ花ノ散テクルハ。アノ雪ノアチラハモウ幸ヂヤカシラヌ。

雪の木にふりかゝれりけるをよめる　つらゆき

冬ごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける

○今マハ冬ガレデマダメモデヌアノ木ナレバ。思ヒガケモナイニ。枝ノアヒダカラ。花ノチルト見エルホドニサ。雪ガフルワイ。

やまとの國にまかれりける時に雪のふりけるを見てよめる　坂上これのり

朝ぼらけ有明の月と見るまでヨシノの里にふれる白雪

○カウ夜ノグワラリットアケタ時ニ見レバチウド有明ノ月ノ殘ッタ影ト見エルホドニ吉野ノ里ヘ雪ガフッタ。

（千秋云。朝ぼらけのぼらけは則明のつゞまりたるなり。集中戀三にしてふ言なりてこゝろ得れをこゝろ得たがひてこの歌をうす雪ぞなどゝ云はきゝの歌のついでをもしらぬ人のわざなり上下の歌ともふかき雪をよめるをもへ

○まではものをはかるに此までかしてまでとはかりきはむる言にてばかりと云にこゝは月同じこゝは月と見るばかりてふ言なりてこゝろ得たがひてこの歌をうす雪ぞなどゝ云はきゝの歌のついでをもしらぬ人のわざなり上下の歌ともふかき雪をよめるをもへ

○あまぎるは萬葉に天霧合（あまきらひ）ゆきはふりつゝなどよみて天ぐもりわひてふをいふなるをつゞめてあまぎらしともあまぎらひともいふなり霧はもとくもることなり秋榜なといふは歌ことばのたくみのゝめのはがら〳〵と明ゆけばと云々是なり）

題しらず　よみ人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞立なばみゆきまれにこそ見め

○此ノ雪ハマダキエヌウヘヽモ又ツヾイテフリカサナレ。オツヽケ春ガキテ霞ノタツ時分ニナツタナラ。マレニコソフリモセウケレ。度々ハ見ラレマイホドニ。

梅花それとも見えず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば　清

○（三）あまぎる　雪ガオシナメテドコモカモフツタンバ。梅ノ花ガ梅ノ花ト見エヌ。同ジ白サヂヤニヨッテ。

此歌はある人のいはくかきの本の人まろが歌なり。

梅の花に雪のふれるをよめる　小野たかむらの朝臣

にて古言にあらず

○はしは詞のかきさまをよくみよことばとは秋にも色ことゝにとこゝに云を新撰萬葉には色殊々丹と書に同しく別々の意なりしかれはすみてよひべきを下をにごるは言便なり

花の色と雪にまどりて見えずとも香をたに匂へ人のしるべく

○花ノ色ハ雪ニマジッテ。ソレト分レテ見エズ候。人ガ梅ノ花ヂヤトシルヤウニセメテ香ナリトモ。ハッキリトシレルヤウニ。ニホヘ。

雪の中の梅ノ花をよめる　きのつらゆき　清

梅の香のふりおける雪にまがひせばたれかとゝ分てをらまし

○梅ノ花ハ色ハ白ウテ。雪ニマガウガ。モシ香マデガ。色ノヤウニツモッタ雪ニマガウナラバ。誰レガ雪ト梅花トチョウベツ〳〵ニ見分テ折ソイ。タレモエ見分ケハスマイ。香ガマガハヂバコソ。

雪のふりけるを見てよめる　紀とものり

雪ふれば木ごとに花ぞ咲にける いづれを梅とわきてをらまし

○雪ガフレバ何ンナ木モミナ花ノサイタヤウナワイ。ドレヲ梅ヂヤト見分

○疎るに枯るをよせたり

テ。チラウゾドウモ見分ケニクイ。ヨソヘイタヒト

物へまかりける人をまちてしはすのつもごりによめる　みつね

わがまたぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

○コチガマチモセヌ來年ノ年ハモウ近ウキタレドモ。今ジブンノ草ノヤウニカレテヨソヘインダ人ハ。コチガコレホド待ツノニ。マダカヘッテコヌノミナラズ。子カラオトヅレモセヌ。カレルト云ハヨソヘイテヨリツカヌヿヂヤゾイ。

としのはてによめる　ありとものもとかた

あらたまの年の終になるごとに雪もわが身もふりまさりける

○(一)年ノ終リニナルタビゴトニ雪モフリマサルガ。コチガ身モ段々フルサガマッテサ。次第ニ年ガヨッテイク。アヽコマッタモノヂヤ。

○論語に歳寒然後知松柏之後凋と云を用ゐてよめるなるべし

○飛鳥川はあすと云かけてながるとつゞけたるは常のことなれどかくうるはしくいひながされたるはまれなり

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

雪ふりて年の暮ぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ　よみ人しらず

○今マデ露ヤ霜ヤ時雨ガフツテモ。松ハ色ガカハラナンダカ。ソレデモマダ此ウヘ。雪ガフツタラバ。モシ色ガカハルデモアラウカト思フタカ。今此ヤウニ雪ガフツテモ。ヤツハリ色ハカハラズニ。モウ年ガクレタカラハ。サテハ。トウ〳〵シゥ色ノカハラヌ松ヂヤト云フモコヽデコソ見エタモノナレ。

昨日といひけふとくらしつあすか川流れて早き月日なりけり　としのはてによめる　とるみちのつらさ

○昨日今日明日ト云テ一日〳〵トクラシテ。ツイモウ年ノタレニナツタヂヤ。アスカ川ノ水ノ早ウ流レテユクヤウニ。アヽサテ〳〵早ウタツ月日ヂヤワイ。

○ますかゝみはもと眞澄日の鏡てふ詞をはぶきていへり出雲の國造が賀詞に麻曾日の大御鏡とあまてらせる日をいへり是古言なり

○賀歌はいはひうたとよむべし

○千代とは百を十合せたるのみに心得べからずかぎりなき

歌奉れとおほせられし時によみて奉れる　きのつらゆき

行年のをしくもあるかなます鏡見る影さへに暮ぬと思へば

○年ノツモルニシタガウテ。次第ニ鏡デ見ル影マデガ。ツムリガ眞ツ白ニナツテ面ハシワガヨツテ。此ノヤウニオイグレテイクト思ヘバ。サテ〳〵暮テユク年ガマアチシウ思ハルヽカナ。

○賀歌

題しらず　よみ人しらず

我君は千世に八千世にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで

なきを云によろづ代といふも同じ千万とも無數とのいひなしあり

○數かぎりなき砂もて君が命に譬ふなり

○しほのは能登の國にあり ざしての磯はまうけてよめるか

○コマカイ石ガ。大キナ岩ホニナッテ苔ノハエルマデ。千年モ万年モ御祭昌デオイデナサレコチノ君ハ。清清

わたつ海の濱のさゝをかぞへつゝ君が千年のあり數にせん

○海ノ濱ノ砂ノ數ヲダン〳〵ニカゾヘテ君ノ御長壽ノ御年ノ數取リニセウ

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をは八千世とぞ鳴

○シホノ山ノサシデノ磯ニ住デヰル千鳥ノ鳴クヲキケバ君ノ御代ヲバヤチヨ〳〵トサ鳴キマス。

我よはひ君がやちよにとりそへてとゞめおきては思ひ出にせよ

○ワレラガ此ノ長命ナヨハヒヲ。ソコモトヘ進ゼウホトニコレカラソコモトノ八千世ノヨハヒノ上ヘ。此ワレラガ齢モトリソヘテ。ソコモトニトゞメオカレタラバ。後ニ思ヒダシグサニシテ。我ラガヿヲ思ヒダサッシヤレ。

○御歌とあれど古本御の字なし延五記とも ふなしの歌の體かなしらず御製にあらず遍昭のよめるならんか

○杖はもはら山坂をこゆるなれば千年を料をてゆるとせふを阪にとせたるなり拾遺にのよろづ世の坂ともよめり且杖といひで杖ことをいふなり舟とはで漕ともわ

打聞よろし。餘材わろし。

仁和御時僧正遍昭に七十の賀給ひける時の御歌

かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千世にあふよしもがな

○朕モドウシテナリ共ニ長命デ居テ。此ノ度ノトホリニ又イク度モ〳〵賀ヲイハウテ進ジテ。ソコノ八千歳ノ賀ニドウゾ逢ウヤウニシタイ〻カナ。

仁和のみかどのみこにおはしましける時に御をばの八十の賀にしろかねを杖につくれりけるを見て彼御をばにかはりてよめる　僧正遍昭

御をばは御祖母なるべし。おの假字を書べきなり。

ちはやぶる神のさりけんつくからに千年の坂もこえぬべらなり

たるともいふ類にていにしへの常なり

○ちりかひは（ちりぬるは）かれこれ散合すなりまくらをかはすなどいふにおなじ老らくは老るを延ているふなり

○貞辰皇子ハ清和天皇第七の皇子なり

○此ノ杖ハ一トホリノ物トハ見エヌ。大カタ神ノ御キリナサレタ杖デアラウ然レバ此ノ杖ヲツクカラシテハ。千年ノ坂マデモ。心ヤスウ越ラルヽデアラウト思ハル。

ぼり川のおほいまうちぎみの四十の賀九條の家に

てしける時によめる　在原ノ業平朝臣

櫻花ちりかひくもれおいらくのこんといふなる道まがふがに

○四十ニ御ナリナサレタレバ初老ト申シテ。コレカラ老ガコウトヱヂヤガドウゾコヌヤウニシタイモノナレバ。ソノ老メガ來ル道ヲフミマヨフヤウニ其ノ用意ニ櫻花ヨタントチリアウテソコラガ。闇ウ曇ルヤウニセイソシタランレデ道ガクラウテ來ル老ガフミマヨウテ來マイホドニ。がには萬葉に多き詞なり。疑ひのかにはあらず。

さだときのみこのをばのよそぢの賀を大井にてしける日よめる　きのこれをか

○龜の尾山龜山ともいふ大井河はこのふもとを落るなり

○この歌賀に似ずといのふ人わうすべて屏風のは給のさまのみをよみていふは心はよまず只給を本としてよむがいにしへなりわまりに賀にかゝはりてよむはわきたくみゆるものなり

此をばも御祖母にておはするべし。

龜のをの山のいしねをとめて落る瀧のしら玉ちよの數かも

○コノ大井ノ近所ナ龜ノチノ山ノ岩ノ子ニソウテオチル瀧ノ白玉ノ多イ數ハ御壽命ノ千年ノ數カヤレ。山ノ名サヘメデタイ龜山ナレヤ。

さだやすのみこのきさいの宮の五十の賀たてまつりける御屏風に櫻の花のちるしたに人の花見たるかたかけるをよめる　藤原興風

いたづらに過る月日はおもはへで花見てくらす春ぞすくなき

○ナンデナシニタヽ過テイク月日ハ。多イヤラスクナイヤラ。何ンデ思ハズニウカ〳〵トシテクラスガ。此ノヤウニ面白イ花ヲ見テクラス春ハサキツウ日數ガスクナウ思ハルヽ。

餘材に春のすくなきにおどろきて。思へば過にし月日は多かりけりといふ

○かざしは枝を折て冠の巾子の右か左にさすものなり

○ためしは樣の字と心得べし例の字は少したがへり

○偽なきことを神はあきらかにしろしめすらんといふことなるをこゝにわがきのためとを云をおもへば神も即同じ心におぼすらんといふ意とも聞ゆ

しめておほゆる意なるべしといへるはかなはず。

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける　きのつらゆき

春くれば宿にまづさく梅の花君が千年のかざしとぞ見る。

○春ガクレバ此ノ御庭ヘマヅ一番ニサク梅ノ花ヲ君ガ千年マデノ春ノ御カザシデヤトサ存ジマスル。

いにしへにありきあらずはしらねども千年のためし君に始めむ　素性法師

○千年モイキタ人ハ。昔モアツタカナカツタカハシラヌケレドモ。タトヒ今マデニハサウ云人ハナイニモセヨ千年イキルタメシヲ君カラ始メナサルデアラウ。

ふして思ひおきてかぞふる萬代は神ぞしるらんわが君のため

○吾君ノ御年ノ數ヲドウソ万年マデモト。願ヒマスルコトハ人ノ力ニコソ及バズ。神ガサ其通リニ御ハガラヒナサレウワサ。我君ノタメニ。

神ぞしるらんは萬葉に神しらさんなどある類にてしるとはからひおこなふをいふなりたゞ常にいふしるの意のみにあらず。

藤原三善か六十賀によみける　在原しげる

つるかめも千年の後としらなくにわかぬ心にまかせはてゝん

○鶴亀ハ千年ノヨハヒチタモツ物ナレド。ソレモソノ千年ノ後ハドウアルヤラシラヌガ。貴樣ハ千年ゴザツテモマダソレデハ十分ニハ存ゼ子バソノウヘモマダ存分ニ長ク久シウ御無事デオキマセウ。

此歌ハある人在原とさはるがともいふ。

○今の本にはつねなりとあり世を也に見わやまりて寫せしなるべしこれは文德實錄に所々見えたる人にて末に貞觀十九日從四位行丹波守良峯經世卒とし世る人なり

よしみねのつねおりがよそぢの賀にむすめにかはりよみ侍ける　そせいはうし

萬代をまつにて君をいとひつる千年の陰に住んおもへば

○君ハ万年ノ御壽命ヲ待ツナレバ。ソノマツト云名ノ松デサオイハヒ申シマスル。サウシテソノ千年モアル松ノカゲニ鶴ノスムヤウニワタシモ君ノ千年ノオカゲヲ蒙リテ共ニ長ウ居マセウト存ジマスレハサ。

餘材につるといふ辭に。鶴をもたせたりといへり。まことに下の句とば。鶴によれりと聞えたり。

○わか草にかきと云ふ心をもて老を若へらす意にとれり

ないしのかみの右大將藤原朝臣の四十ノ賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりける

歌

春日野にわかなつみつゝ萬代をいとふ心は神ぞしるらむ

○御賀ノタメニカウ春日野デ。若菜ヲツミ〳〵心ノ内デ御壽命ヲ万年マデトオイハヒ申ス心願ノホドハ。御先祖ノ此ノ春日ノ御神ガサ。御納受ナサレテ御守リナサルトデゴザラウ。

しるらんの意上にいへるが如し。

山高み雲ゐに見ゆるさくら花心のゆきてをらぬ日ぞなき

○高イ山デ雲ノアタリニ見エルアノ櫻ノ花ガキツウヨイ花ヂヤガ。山ガ高サニドウモアンコヘハエイカ子バ。アトドウゾ一枝折テキタイ物ヂヤト思ウ心ガ。毎日アノ山ヘイテアノ櫻ヲチラヌ日ハサナイ。

○常に見る繪のさまなれば

かくたくめり雲ゐはたゞ雲の事をいひまた遠きことをもいへりてとなり遠きてとな

○家隆卿の筆也と云本によりて名を擧ぐ六帖家の集等にも見へて躬經の歌也次々是にならふ

○ならなくにはならぬを延ていふなり

○此の歌六帖家集家隆卿本ともに友則の歌なるをわる說に貫之なりといへるはよりどころなし

夏

めづらしき聲ならなくに時鳥こゝらの年をあかずもあるかな

○イツノ年モ同ジ聲デナケバ。ナニモメヅラシイ聲デハナイニ。アノ郭公ハオホクノ年毎年聞テモサテモ〳〵マア聞アカヌコカナ。打聞てゝちの說わろし。

秋

○六帖には素性とあれど歌ざま必らず躬經にてしかも家集家隆卿の本にもいちしるしきなり
○六帖家集家隆卿の本にも忠みねの歌と見えたり

すみの江の松を秋風吹からにこゑ打そふるおきつしら浪

○住ノ江ノ松ヲ秋風ガサアトフクトソノマヽデ。オヽト浪ノ音ヲウチソヘル。

千鳥なくさほの川霧立ぬらし山の木葉も色まさりゆく

○佐保山ノ木ノ葉モ段々色カマサツテキタ。此トホリナレバ今マデニモウ〔一〕此佐保川ノ霞カタツタサウナ。（千秋云。露時雨のみならず霧にも木の葉は色づく物なる故に。かくよめり）

秋くれば色もかへらぬときは山よその紅葉を風ぞかしける

○秋ニナツテモ木ノ葉ノ色ノカハラヌト云。常磐山デヤニヨツテ此山ニハ紅葉ハナイニヨツノ山ノ紅葉ヲ風ガ吹テ來テサ。此ノ片ハ山ヘ借スワイル。

冬

しら雪のふりしく時はみよしの〻山下風に花ぞちりける

○家集拾遺家

隆卿本にも貫之なり末の句いかにもかの人の口つきなり
○延喜第二の皇子保明の太子なり

○文德實錄齊衡二年正月從

○此ノ吉野ノアタリヘドコモカモ白イ雪ガフツタ時ニハ。山ノ風デ花ガサ散ルワイ。

春宮のうまれ給へりける時にまゐりてよめる　典侍藤原よるかの朝臣

峰高き春日の山にいづる日のくもる時なくてらすべらなり

○春日神ノ御末ノ藤原氏ノ中デモ此上ヘモナイ御方ノ姫君ノ御腹ニデキマシナサツタ若君樣ナレバ。テウドソノ春日山ノ高ウウチハレテ曇所ノナイヤウニ御行末イツマデモ。クモリナウ天下ヲ御照シアソバスデアラウト存ジラレマス。

○離別歌

題しらず　在原ノ行平朝臣

四位下在原朝臣行平爲二因幡守一云〻この度の歌なり

○すがるは日本紀に螺蠃(くわら)とかきてすがるとよめり一に蜂(じがばち)は似我蜂とも云ふこの歌何ともしらねば萩原といふにつきてはすがるは鹿のことなりなどあたらぬ説をもいへり萩原はこのわかれ秋なり

立わかれいなゞの山の峯におふるまつとしきかば今かへりこむ

○今此方ハ京ヲ立テ別レテ因幡國ヘ下ルガ。其ノ國ノイナバ山ノ峰ニハエテ松ノ名ノトボリニ。ソナタガ此方ヲ待ツト聞タナラ。ヂキニ又カヘツテコウワサテ。

よみ人しらず

すがるなく秋の萩ちら朝たちて旅行く人をいつとか待む

○朝立テ旅ユク人ニ(一)萩ノ咲テアル此ノ秋ノ野デ今ワカレルガ。オカヘリチバイツト思ウテマタウゾ。ソレヤキツウ遠イ〻デアラウ。

打聞すがるなくの説うけがたし。

かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさむやは

○今カウ別レテ限リモナイ遠イ。雲ヨリアチラノ國ヘウシハイクヂヤガソレデモ此ノ故郷ノ人ノ事ハ常住忘レルマモナシニ思ウテ行ウヂヤニヨツテ。心ノ内ハドコマデモイツショニツレダツテイクモ同ジ〻ヂヤワサ。身コツカウシテ今別ルレ心ノ内デハ。貴様タチヲアトヘ殘シテオカウカイ。心デハツレダツテイクワサテ。

打聞結句の説いとわろし。餘材よろし。

をのゝちふるがみちのくのすけにまかりける時にたちのよめる

たちちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりは關なとがめそ

○ソナタノ身ノ守リヂヤト思ウテ。添ヘテヤル此ノ母ガ心ヤカリチバ行サキノ關所〳〵デモドウゾトメテ下サルナ。トホシテヤツテ下サレ。

さだときのみこの家にてふぢてらのきよふが近江のすけにまかりける時にうまのはなむけしけるよめる

きのとしさだ

けふわかれあすはあふみと思へども夜やふけぬらん袖の

れば夜をうからのけしきをもて歌のあやとなすなり

○たらちねは母といふへきを冠辭なりてゝにおやといへるは本は母の字なりけんをいかに心たがへてか後世ハはゝと云べきをおやといへるよりゝにもおやとなきき改めしなら

○今日別れてあすはあふと

いひかけたり

○かへる山は越前國敦賀郡にあり本は加比留山なるを歌のよせにてかへる山といへるなり春がすみはこの時の春にてもの立とのをもて冠辞にあやなんせしなるべし

○これも立といはら雲ん冠のみさて四の何六帖にはは立わかれなばと見ねたり

露けさ

○今日別レテ明日ハヂキニ又アハレルホド近イ近江國ヂヤトハ思ヘドモ。カハツタモノデ別レトイヘバ悲シイ。ア、夜ガイカウフケタヤラ袖ガ露デヌレタワイ。イヤ〳〵コレヤ。涙ヂヤワイ。

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとは聞ど春霞たちわかれなば戀しかるべし

○北國ニハカヘル山ト云山ガアルト云フナレバ其名ノトホリニオツ、ケ御無事デカヘラツシャラウトハ思ヘド。ソレデアノ霞ノ立テアル方ヘ立テ別レテイカシャツタナラバ戀シカラウ。

人のうまのはなむけによめる　きのつらゆき

をしむから戀しきものをしら雲の立なん後は何でいちせむ

○ナゴリヲシウ思ヘバ。マダタ、ツシャラヌウチカラ此ヤウニ戀イ物ヲ

○ばやとは上にもいふ如くに思へばかねて戀しきやと意得べし

○相坂の關より東の國をあづまの國といへり

○思へどもと初にいふは心ふかき詞なり思へどもと〳〵意なりといふ説はさもありぬべし

〔三〕立テイカシャツタアトデハ。ドノヤウナコ、ヲカスルデアラウ。

ともだちの人の國へまかりけるによめる　在原しげはる

わかれてとほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しさ

○別レテカラハ遠イ道ヲヘダテ、。久シウアハレヌ〻ヂアト思ウユエカシテ。マダカウシテ見テ居ナガラ。カタ一方デハ。ハヤ今カラモウ戀シウ思ハルヽ。

あづまのかたへまかりける人によみてつかはしける　いかこのあつゆき

思へども身をしわけねばめに見ぬ心を君にたぐへてぞやる

○ナンバウカナゴリヲシウ思ヘドモ。人ノ身ハ二ツニ分ラレヌ物デドウモツイテハエイカデバ。目ニハ見エヌケレド。心ヲサ其ノ方ヘソハヤヲヤ

○相坂山は東へ下る人をば京よりとゝまりて送りてこゝにて別るゝところなりいにしへ山なる關あり旅人はこゝにて道の神にたむけすれば手向山ともいへり

リマス。

相坂にて人をわかれける時によめる

(千秋云。人をわかるといふも。人にわかるといふと同じことなり。しかるを打聞に。人の旅行に別るゝには。人をといひ。我行くには人にわかるといふといへるはあたらず。萬葉集に。くやしく妹をわかれ來にけり。又たらちねの母を別れてまことわれ旅のかりねにやすくねんかも。これらわがゆくときの別れなり)

なにはのよろづを

あふ坂の關しまさしき物ならばわかず別るゝ君をとゞめよ

○アフ坂ト云ガマサシク其ノ名ノ通リチガヒナイ物ナラバ。人ニ逢ウハズヂヤ。別レウハズハナイ。スレヤ殘リ多イニ別レテユク此人ヲ。アヒカハラズ逢ウヤウニコノ關デトゞメヨ。

餘材まさしきといへるにかなはず。

○かゝる衣は冠のみ言ふ朝露もまた冠なるがゆゑにそのよせがてらそのよせがてらの詞にて今も有消ぬべし云てのころのさまなり

○是にきみとしの名と常陸國の名をよみ入りたると雖

(千秋云。餘材抄は關といへる詞になづみて二三の句を說たれども。關にて人をとゞむるは常のことなるを。まさしきものならばなどてとゞめしくいふべきにあらず)

題しらず　よみ人しらず

から衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべきものを

○(一)御立チ日ヲバ明日ヂヤト云フコトハ。ワシヤモウ聞キマスマイ。ワシチステ、オイテ御出ナサルコトナラバ。明日御立ヂヤ。明日ノ朝ニナッテナラ。ワシヤモウ露ノキエルヤウニアラウト存ジマスモノ。

此歌はある人つかさを給はりてあたらしきめにつきて年へてすみけ(カヨウタ)る人をすてゝたゝ明日なんたつとむかりいへりける時にともかうもいはでよみてつかはしける。

ひたちへまかりける時にふぢはらのきみとしによみてつかはしける　寵

もいへり然は物の名俳諧等の部に入べきを彼からつゝ駒にしの歌を旅の部に入しかば是も意しるしてこれをむねとし別てこゝにはいれしなり

○人の家にやとるは方たがへのためにやとれるなるべし

○これは戀の部に入べきに部にかくは端書にまかせてこゝにはいれたるにや

あさなげに見べき君とし頼まねば思ひたちぬるくさ枕なり

○毎日アハレル公利（きみとし）様ヂヤトハ頼マレヌ。ミヅクサイ御心ナレバ。ソレユエワシヤ存ジ立ツテ常陸ヘ下リマスル今度ノ旅デゴザリマス。

きのむねさだがあづまへまかりける時に人の家に
やどりてわかつき出たつてまかりまうししければ
にや人のよみていだせりける

よみ人しらず

えそしらぬ今心みよ命あらば我や忘るゝ君やとはぬと

○オマヘハワタシヲイツマデモ忘レハセヌトオツシヤルケレドモ。ワシハドウモソレバサ。エガテンセヌ。未デワシガ忘レルカ。オマヘガ忘レテドウデ下サレヌカハ。命ガアツテイキテ居タナラ。オツツケ知レワホドニタメシテゴラウジヨ。ワシハオマヘヲイツマデモワカレハスマイカ。オマヘハ追ツ付ケワタシヲ御忘レナサルデアラウワサ。

○六帖にハ二の句ふかきこゝろのとあり　あしき歌

あひしりて侍ける人のあづまのかたへまかりける
をおくるとてよめる　ふかやぶ

雲ゐにも通ふ心のおくれねばわかるゝ人に見ゆばかりなり

○貴様ガ今度ドレホド遠イ所ヘイカシヤツテモ。拙者ガ心ハ。イツモソノ貴様ノ方ヘカヨウテ。コヽニ殘ツテ。居子ハヒツキヤウ此ノ身ガ。今別レテアトニ殘ルト見ラレルバカリヂヤ。心ハ別レハセヌ。

友のあづまへまかりける時によめる　よしをかのひでをか

白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくだく旅かな

○雲ノアチコチヘ分レテイクヤウニ。今度遠イ間ダチヘダテヽ別レル悲シサニ。今ハナムケニ進ズル此ノ手向ノ麻ノコマカナヤウニ拙者ハイロ〳〵ニ心ヲクダイテ。サテ〳〵ヲシイ御旅立デゴザルカナ。

（千秋云。ぬさとて。五色の絹などをこまかにきりて袋にいれて。道の神に手向の料に、旅だつ人にをくるとあり。ぬさ袋といふこれなり）

○てゝにもいせ物がたりにもみちの國とかけるはそのかの頃のならはしにしかし言によろしみちすらず是はみちのおくの國とおのの云其おくのおくの國とおのを省きてみちのくの國といへるなりみちの國とはいわまり省き過てあやまれるなり

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける　つらゆき

しら雲の八重にかさなるをちにても思はん人に心へだつな

○ハルカニ雲ノイクヘモヘダヽツテアルアチラノ國デアラウトモ。拙者ハ貴樣ノ事ヲ。タエズ思ウテ居ヤウホドニ。タトヒ雲ハヘダテル共。心ハヘダテサツシヤルナヤ。

人をわかれける時によみける

わかれてふとは色にもあらぬに心にしみてわびしかるらん

○色コソ物ニシム物ナレ。別レト云フハ色デモイニ。ドウ云コトデ此ヤウニ心ニシミ〻〻トツラウ思ハレルヤラ。

あひしれりける人のこしの國にまかりて年へて京にまうできて又かへりける時によめる

○こしの國ハ越前をいふとみゆるはかの加比留山われはなり

かへる山なにぞは有てあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ　凡河内躬恒

○貴樣ノ又下ダラツシヤル國ニアルカヘル山ハヨソヘイタ人ノカヘルト云名ヂヤト思ウタニ。ソノカヘル山ハ。何ンノヤクニタツコトゾ。サウ云フ山ガ有テモアルカヒハナイ。アルカヒト云ハ。久シブリデ來テモ。京ニハ居トマラズニ。又アチヘカヘルト云名デコソアレ。

こしの國へまかりける人によみてつかはしける

よそにのみこひやわたらん白山のゆき見るべくもあらぬ我身乙

○今カラハヨソニバツカリオナツカシウ思ウテ。月日ヲタテルデゴザラウカ。アノハウヘ參ツテ御目ニカヽラレウヒ思ハレヌワシガ身ナレバ。ゆきて見るといふことを白山の雪を見るといひかけたり。

おとは山のほとりにて人をわかるとてよめる

○此別れを鳥のをしむがごとく聞ねてたかく鳴と云てさて我をしむの心よりとりの聲もひとつとして鳴ゆるとはいへ聞ゆる時鳥にはいはせたのみおはせたるにしへの意なりこの此意をおもひ込ぬを人はこの類をは云たらぬやうに思へり○虫は秋の別れをしむの人の別れをかねをはしをしへり

おとゝ山こだかく鳴て時鳥君が別れを惜むべらなり

つらゆき

○コノオトハ山ノ高イ木ノ上ヘデアレホト、ギスガ高ウ鳴キマス郭公モアノトホリ鳴テ貴樣ノ御別レヲナゴリヲシウ思ウテアラウサウ聞エル。

拙者ドモ、同ジ「サ。

唐モノシラヘノ役ニ仰付ラレテ西國ヘ

ふぢはらのゝちかげがから物のつかひにあが月のつごもりかたにまかりけるにうへのおのこどもさけたうびけるついでによめる

ふぢはらのかねもち

もろともに鳴てとゝめよきりぐす秋の別れは惜くやわあらぬ

○トモ〳〵ニ鳴テドウゾオトメ申セキリ〳〵スヨ。今マ秋別レノ時分ニオワカレ申スハ。コレホドナゴリヲシイニ。ソチハナゴリヲシウハナイカイ。

○しろめは大和物がたりに源の告がなすめ又ハ津の國の江口の遊女なりと云へり大鏡にいしの河にのおんはしましにしろめと云そびもものめ

秋霧のともに立出て別れなばたれぬ思ひにこひやわたらん

平ノとものり

○アノ霧ノ立ツヤウニ貴樣モ共ニ立テ出テイカシヤツテ御別レ申シタナラワシハ今カラハアノ霧ノハレヌヤウニ。心ガハレヌ。イツモオナジカシウ思フテタテルデゴザラウカイ。

源さねがつくしへもあみんとてまかりける時にやまざきにてわかれをしみけるところにてよめる

しろめ

命だに心にかなふ物ならば何かわかれのかなしからまし

○命サヘ心マカセニナラテ。死ナズニ居ラルヽモノナラ。ナニガサテ御別レ申スガコレホドニ悲シカラウゾイ。人ノ命ハ御歸ノ時分マデノコトモ知レヌニヨツテサ。悲シイワイノ。

山ざくらより神なびのもりまてをくりに人々まかり

して歌よませられしことわれらの葉に遊女のよき人のまへにてよめるもの多し後に院のてろなでもさることゆゑの後世のおそびとはいと異なり

○大かたはおりはよそとにいざはに同じ詞なれるをりそれをいひてはおくりの人とともにとなれり

てかへりがてにして別れをしみけるによめる

みあもとのさね

人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざ歸りなん

○人ノサセル旅デハナイ我心カライク旅ヂヤニ。タイガイナコナラモウイキトモナイト云テ。ドレヤカヘラウゾ。

いまはこれよりかへりねとさねがいひけるをりに

藤原ノかねもち

よみける

したれてきにし心の身にしあればかへるさまには道もしられず

○ドコマデモイッショニイキタイトシタハレテ。コレマデキタ心ニ若イテアル我身ヂヤニソノ心ガドコマデモ貴樣ニツキンツテノ參レバ。コレカラ歸ルトキニハ此ノ身ハ心トハナレテ心ノナイヌケガラヂヤニヨッテ。カヘリシナニハ道モエシリマセヌ。

○かつは物ふたつの間におく詞なりてはあふと別の間に用ゐたり

○仕官の人は私に行がたき

藤原これをかゝ武藏のすけにまかりける時におくりに相坂をこゆとてよみける　つらゆき

かつこゑて別れも行かあふ坂と人だのめなる名にこそ有けれ

○此ノ坂ハ逢坂ナレバ人ニ逢ウハズヂヤニ。此坂ヲコエッヽソシテマア別レテイカッシヤルヿカ。コレデハ逢フ坂ト云名ハ。頼モシサウニ聞エテ頼ミニナラヌサ名ヂヤワイノ。コレガ人タノメト云モノヂヤ。人ダノメトハ人ニ頼モシウ思ハセテオイテ。ソシテ其通リデモナウテムダナ事ヲ云ヒマス。

（千秋云。かつとは。逢坂をこゑながらかつわれゆくかといへる意にて逢と別るゝと。まじはることとにいへることばなり）

おほゐのちふるがこしへまかりけるうまのはなむけによめる

藤原ノかねすけの朝臣

君が行こしのしら山しらねどもゆきのまに〳〵跡は尋ね

故にその時にのぞみてひとへにかくい思ふなり

○花山いみやこの東の山科にて遍昭のそこに住まれしことと上みにいへり

○寺の名は元慶寺といへり

○なんの上のなねをかよはし下のなかよ云ひおさふるねる詞にて見ねなと云意なりはなんいにしへ

ひむもいたりそへたるのみにてなといん

○貴様ノ下ラッシャル北國ノ道ハ拙者ハ不案内ナレドモ。白山ハモトヨリノ。惣体雪ノ深イ國ヂャト云ッナレバ。貴様ノトホッテイカッシャッタソノ雪ノ跡ヲタヅネテ拙者モアトカラ參ラウ。

人の花山にまうできて夕さりつかたかへりあむと
しける時によめる　　僧正遍昭

夕くれの籬は山と見るなゝんよるはこえしと宿りとるべく

○夕カタノ此庭ノマガキハ。山ト見エレバヨイニ。サウシタナラ。夜ルハドウモ山ハコエラレマイト思ウテ。アノイヌル人モ。コヨヒハコヽデトマルヤウニ。

山にのぼりてかへりまうできて人々別れけるついでによめる　　幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてんとめんとめじと花のまに

ひおさふるなり

○山といへるは比叡山なり

このころハ日枝の延暦寺を山といひ三井寺の園城寺を寺とのみいひならへり

○比枝の山の舎利會に雲林院の皇子のぼり給ひてかへりけるとき心得べし舎利會のこと三代實錄の貞觀八年六月にくはし

〳〵

○ザテカウ御別レ申スハキッウ御殘念ナガ。ト云テ拙僧ガナンボオトメ申シタトテトマリハナサレマイホドニ。コレカナンデモコノ山ノ櫻ニウチマカセテ。トメウトトメマイト。アノ花シダイニ致サウワイ。オノ〳〵ガタヨモヤ。アノ花チフリモキッテエカヘリハナサルマイワサテ。

うりんゐんのみこの舍利會に山にのぼりてかへりけるに櫻の花の本にてよめる　　僧正へんせう

山風に櫻吹まきみだれなん花のまぎれに立とまるべく

●山風ニ此ノ櫻ノ花ヲ吹卷テチリミダレヨカシ。ソシタラ此ノ花ノチリミダレルノニマギレテ。カヘル道ガシレヌト云テ。君ガオトマリナサルヤウニ。

清

ことならば君とまるべくにほとなんかへすと花のうきに　　幽仙法師

○秋に遍昭の里はあれてとよみしは同し度なるへし

○大御酒のさかづきをとりてこの歌あるはかねみの王

やとおらぬ

○トテモ見事ニ咲クホドナラバ。君ノ殘リ多ウ思召テオトマリナサルヤウニ咲タガヨイ。ソレニ君ヲオカヘシ申ノハ花ノキコエヌノデハナイカ。花ノキコエヌノチヤウサオカヘシ申サウヤウハナイワサテ(結句又)花ヨソチガタメニモウイフデハナイカ。ソチガタメニモウイフデヤワサテ。

仁和のみかどみこにれはしましける時にふるの瀧御らんじにおはしましてかへり給ひけるによめる　兼藝法師

あかずして別るゝ涙たきにそふ水まさるとや下ゑ見ゆらむ

○ノコリ多ウテ御別レ申ス拙僧ガ此涙ガ混ニソウテ流レル。コレデハ川下デハ。水ガマシタト見エルデガナアラウ。

かむなりのつぼにめしたりける日れはみきなどたうべて雨のいたうふりけれはゆふさりまで侍りて

へさかづきをさすとてうたへるなりいせ物がたりにも狩しして天の河にいたるとい意をよみて秋はさせとあり

○しぐれは秋の末よりふるなれむかくよみて雨の詞にたたへたり

まかり出侍りけるをりにさかづきをとりて　つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をぬましてをしとこそおもへ

○アノ萩ノ花ヲコノ雨ニヌラシテシヂラカシテシマウノハ。キフウ惜ウ思ヒマスレ共マダソレヨリモ貴樣ノ此雨ニヌレテ御歸ナサルニ御別レ申スノガサ。ナホサラ御名殘ナシイフヂヤト存ジラレマスワイノ。マアマヒトツアガリマセ。ソノウチニ雨モヤミマセウワサテ。

とよめりけるかへし　兼覽王

をしむらん人の心をしらぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

○ソノヤウニ別レテ惜ンデ拙者ヲ御深切ニ思ウテ下サレウトハ今日マデ夢ニモ存ゼナンダ。サウシタ貴樣ノ御志ヲマダ存ゼナンダウチニ。拙者ガ身ハサ。此秋ノ時雨ノフルト云ヤウニ舊ウナツテモウラチノアカヌ物ニ

○はし書に初めてとあるをよくむかへて見るべし

ナリマシタ。マンツト早ウ君イウチニ其御志ヲ知ッタラ。別シテ大度ニゴザラウニアヽ残念ナ。

かねみのおはきみにはじめて物がたりして別れける時によめる　　みつね

別るれどうれしくもあるかことひより逢見ぬさきに何を戀まく

○御別レ申スハナゴリチシウハアレド。サテ〳〵マア嬉シイ「カナ。ナゼニト申スニ今夜ヨリサキ。イマダ御近付キニナラナンダウチニハ。何ヲオナツカシウハ思ヒマセウゾ。今夜逢メテ御近付キニナリマシタレバコソ。御別レ申スナレ。スレヤ別レノナゴリチシウ思ハレルヤウニ御近付ニナッタ所ガナンボウカ嬉シイ「ヂヤワサテ。

題しらず　　よみ人しらず

あかずして別るゝ袖のしら玉は君が形見とつゝみてぞゆく

○そぼちはそぼぬれそぼふるなどゝ云におなじくしをれひづをつゞめていふ詞なり

○この歌は旅のわかれにはあらしとみゆぬれ衣はいつはりてふとにより雨にとよせてとゞむるは偽なるに近しひてハ歌の字の意にて

○ノコリ多ウテ別レル袖ノ涙ハトント玉ノヤウニ落ルガ。此ノ玉ヲバ。ソコモトノ形見ヂヤト存ジテ別ヲ此袖ニツヽンデ参ル。

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖かわかぬ逢ん日までに

○此別レヲナンボウカ悲シウ思ウテ此ヤウニ泣ク涙ニヒツタリトヌレタコノ袖ハ。又逢フ日マデハ乾キハスマイ。ナゼニト云ニ。コレホドニ悲シウ思ウ「ヂヤニヨツテ。イツマデモ忘レラレマイホドニイツヲ限リト云「モナウ泣テヌラスデアラウニヨツテサ。清

かきくらしとはふらなん春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめん

○コノ春雨ハトテモフルホドナラバ。マックラニナッテマソツトツヨウフツタガヨイ。ソシタラ此雨ヲイヒタテニシテ別レテイク君ヲトメウニ。

しひて行人をとゞめん櫻花いづれを道とまどふ迄ぢれ

○ナンボトメテモトマラズニシヒテ別レテイク人ヲトメウニ。櫻花ヨ道ノ

わかれ行人のうらみてやいふなり

○石非は山路の岩あるところに清水のたゝへわるを云ふ是をいしるとよむはいしをにしへをしらぬ人のうつなるなり石をも古語はり多くいはむこと多し人物はいひつきてわかいと男とけるにちらぬは例なりたのかしかれもしし女なるべしつきて○物いひつきてそのいのてへ車にもしてをなり

シレヌヤウニチリウヅンデ。ドレガ道ヂヤトアノ人ノ迷フテエユカヌホドチツテクレイ。

しがの山こ沼にていしるのもとにて物いひける人
のわかれけるをりよめる　つらゆき

むすぶ手のしづくに濁るの山の井のあかても人に別れぬ
るかな

○惣体コノヤウナ山ノシミヅハ。澄イモノヂヤニヨツテ。飲ウト思ウテスクヘバ。ソノ手カラ落ルシヅクデヂキニ濁ルニヨツテ。オミウヤウニスクウテノマレヌ飲ダラヌモノヂヤガ。テウドソノ通リニ。サテ〳〵マアヌ残リオホイニアノ人ニワカレタコトカナ。

道にあへりける人のくるまに物をいひつきてわか
れけるところにてよめる　ともの り

下の帯のみちはかた〳〵わかるとも行めぐりても逢ん
とぞ思ふ

○帯チスルニ。ウシロヘアテタ所デハ。端ノカタ両方ヘワカレルケレモ。前ヘマハシテムスブトコロデハ。又イキアヰモノヂヤガ。ソノ通リニ今イク道ハカウベツ〳〵ニワカレテイクトモマタソノウチドウシテナリトモ。出合ウワサテ。

○下の帯ハ裝束の下着たるものゝ紐を云ふいにしへ帯と云ふはしよりさてこれは道をへだてゝ下の帯とわかるとつゝく隔句體なり

○土佐日記に明州の津にてよめるよしをくはしく書てうたも有は一の説なりけんを海路にて時にかなへれはそれを用ゐたるなるべしこゝはもろこしの京

○羇旅歌

もろこしにて月を見てよめる　安倍仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも

○今カウ空チヅヽトハルカニ見渡セバ。アレ〳〵。海ノ上ヘ月ガデタアヽアノ月ハ。故郷ノ三笠山ヘ出タ月デアラウカイマア。

此歌ハむかしなかまろをもろこしに物ならはしに遣ハしたりけるにゐまるべしこゝはもろこしの京

にてもいづこにてもよめるてふ意にてかくかきしものなり

○筐の流されしことは仁天皇承和五年なり

○わたの原わたとは海のあとなり原はひろく平かなるをいふに即海原と云同じ

たのとしをへてえかへりまうでこざりけるを此の國より又つかひまかりいたりけるにたぐひてまうできなんとて出たりけるにめいしうといふところのうみべにてかの國の人のいなむけしけりよるになりて月のいとおもしろくさし出たりけるを見てよめるとなんかたりつたふる。

おきの國にながされける時に船にのりて出たつとて京なる人のもとにつかはしける　小野ノたかむらの朝臣

清

わたの原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよ海士の釣舟

○ユクサキハイクラ年ナク段々ニアマタアル島々ヲ過テイクベキ海上ヘ今マ出船シタト云フヲ。故郷ノ人ニハシラシテクレイ。コレアノアチヘ歸ツテイクアマノ釣舟ヨ。

餘材結句の説わろし。

題しらず　よみ人しらず

○今日三日を見るべからすとてこの所にとまりぬ奈良よりは半日ばかりの程れど今日みるとは心得べきとは雖にもいへり

みやこ出てけふみかの原いづみ川々風寒しころもかせやま

○今日京ヲ出テ此ミカノ原ヘキテアノ向ヒニ見エル山ハ。鹿背山デヤガ此イヅミ川ノ川風ガキツウ寒イニ。アノカセ山ヨオレニキルモノヲ一ツ借セ山。

（千秋云。二句のいひかけ。鹿背山を見とのいひかけなり。譯はそのてゝろなり）

はの〳〵とあかしの浦の朝ぎりに島かくれ行船をしぞおもふ

○夜ノウス〳〵トアケテクル時分ニ。海上カラミレバアノ向ヒナ明石ノ浦か。朝ギリデカクレテ見エヌヤウニナツテイクアノケシキヲ遠ウヨソニミテ過テイク。此船中ノ心ハサテ〳〵モ心ボソイモノガナシイワヂヤ。

此の歌ハある人のいかくかきのもとの人まろが歌なり。

此の歌ハ。打聞に出されたるごとく。今昔物語に。小野の篁の卿の歌と

いそのしまがくれゆくふねをわがみつるかはおもふなれとおもふなり

○万葉に人まろの西の國へ行時と見たる歌にともし火の明石のおとにやこぎわかれなんなみのうへゆくふねをみつゝゆくかなとあり

てのせたるぞよろしかるべき。但し明石にて海をながめてよめるとあるは。下の句を心得わやまりておしわてにいへる詞なり。今昔物語古本。廿四の巻に出たり。餘材四の句の説たがへり。すべて島がくれといふことを。よく解得たる人なし。島がくれとは。海をへだてたるところの。かくれて見ねぬをいへり。かならずしも島にはかぎらず。この歌にては朝霧にかくれて明石の浦のみねぬを。海の沖よりいへるなり。

（千秋云。島がくれゆく舟とは。船の島がくれ行如く聞ゆれど。さにあらず。朝ぎりに明石の浦のかくれゆくを。見つゝゆく舟といふ意なり。この所むかしより人みなまどへり）

あづまのかたへ友とする人ひとり。ふたりいざなひていきけり三河ノ國八ッ橋といふところにいたれりけるにその川のほとりにかきつばたいとおもしろくさけりけるを見て木の蔭におりゐてかきつばたといふいつもじをくのかしらにすゑて旅の心をよまんとてよめる　在原ノ業平ノ朝臣

この集の歌をとりてそれに詞を多くくはへなるとはせしなるを加へなるとはかはりて書かへなるを顯昭なとはかはりたるものの集よりは前の物なるもの

○角田川にてれば武藏と下總の間にて今はこれとて云とすみだ川とて云ものと思ひたる心得たがひを實として後にいせ物がたりをとりて此集にくいへしにあらずや左に長く注せしものあるは大和もの語をもて後にかき加へしとみゆるも多し

から衣きつゝなれにしつましあればはるゝくきぬる旅をしぞ思ふ

○（一）きつゝ　故郷ニナジンダ妻ガアレバ。別レテハルバルト來タコノ旅ガサコソロポソウ物ガナシウ思ハル。

むさしの國としもつふさの國との中にあるすみだ川のほとりにいたりてみやこのいと戀しうれば

ければしばし川のほとりにおりゐて思ひやればかきりなくとほくもきにけるかなとおもひわびてなかめをるにわたしもりはや舟にのれ日もくれぬといひければ船にのりて渡ちんとするにみな人もものわびしくて京におもふ人なくしもあらずさるをり

に白き鳥のはしとあしとあかき川のほとりにあそびけり京にて見えぬ鳥おりければみな人見しらず

渡し守にこれは何鳥ぞと〳〵ひければこれなんみやこ鳥といひけるを聞てよめる

名にしおはゞいざとはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

○都ト云フヲ名ニツイテ居ルナラバ。定メテ京ノヲヲヨウ知テ居ルデアラウホドニ。ドレヤモノトハウ都鳥ヨ。コチガ思ウ人ハ無事デ井ルカドウヤ。

題しらず

北へ行雁ぞなくなるつれてこし數とたらでぞかへるべらなる

○北ノ方ヘイヌル雁ガサアレマア鳴クワイノ。ワシバカリカト思ヘバアノ雁モツレダツテキタ友ノ數ハメラヌヤウニナツテサ歸ルデアラウ。ソレデアノヤウニ泣テイヌルト見エル。

此歌はある人男女もろともに人の國へまかりけうをとこまかりいたりてすなはちみまかりにければ女ひとり京へかへりける道に歸る雁の鳴けるを聞てよめるとなんいふ。

あづまのかたより京へまうでくとて道にてよめる

おと

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれみやこのさかひなるらん

○四ドノアタリガ京デカクノ山デヤヤウ。片時モ早ウカヘリタウ思ヘバモウ京ノ山ガミエルカ〳〵ト氣ヲ付ケテミルケレド。ドレデヤヤラシレヌアノヤウニ山ヲカクシテ。ハツキリトミセヌ春ノ霞ガサキコエヌ霞デヤ。

こしの國へまかりけるときしら山を見てよめる

消はつる時しなければこしぢなるしら山の名は雪にぞありける

○この注は後に大和物がたりなどをとりあはせてかきいれなり

○みやこ鳥は鷗のごとなりみやこ人にはよせてやいふのみなり

○あるやなし生死のことやはり拾遺集にも生死のことをよめる歌見しかゆ

○てれは夫かなどの東國のの任にてくがにしたがひてゆきしかつかつ今歸るとなにつかまるしかたのかくの山〻京のをを霞のかなくすべしをしめてるばしかいしらんとうらひべくにあらず

○この歌を此の集の歌ずくのと云事いかなるを人のひ出けんよきこそ歌なれば拾遺にも二度入たり源氏物がたりにもたれ語いだしたれ

○ノコラズ消テシマウ時ト云ハナクテ。イツデモアノヤウニ雪ガアレバ此ノ北國海道ノ白山ト云山ノ名ハサ雪ノ一ヂヤワイ。打聞說名いといへるにかなはず。

あづまへまかりける時道にてよめる　つらゆき

糸による物あらなくに別路の心ぼそくもおもはゆるかな

○ナンデモ糸ニヨレバ細ウナルヂヤガ。カウシテ故鄕ヲ別レテキタ旅ノ道ハ。ソノヤウニ糸ニヨルモノデハナイノニ。サテ〳〵マア心ボソウ思ハルヽコトカナ。

かひの國へまかりける時道にてよめる　みつね

夜を寒みおくしつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ

○此ノゴロハ夜ガ寒サニ。草ヘハ霜ガフッテアルナイク夜カソノ霜ヲハラウテハ子。ハラウテハ子。野ノ草ヲ枕ニシテ。モウハヤ何度モ何度モ子タ。

○わる人但馬の城崎といふところの湯なるべし二見の浦ハ播磨なり今まの所のものいうたみと云ひなせりといへり

○天の川ハ河内の國交野郡にありともに友なふると從ふと

たぢまの國のゆへまかりける時にふたみの浦といふ所にとまりて夕さりのかれいひたうべにけるともにわりける人々うたよみけるついでによめる　藤原ノかねすけ

夕づくよおぼつかなきを玉くしげ二見の浦とあけてこそ見め

○(三)此ノ二見ノ浦ノケシキチミタイモノヂヤガ。コヨヒハ宵月夜デ。マダ影ガウスケレバ。ハツキリトハミエヌニ。夜ガ明テカラサトクトミヤウ。

これたかのみこのともにかりにまかりける時にあまの川といふところの川のほとりにおりゐてさけなどのみけるついでにみこのいひけらくかりして

たつわりてゝい從ふなり

あまのがたちにいたるといふとをよみてさかづきむさせといひければよめる　清　ありはらのなりひらの朝臣

かゞくらしたなばたつめに宿からん天の河原に我はきにけり

○此方ドモハ今日ハ一日狩ヲシテアルイテ。コレハ〳〵天ノ川原ヘキタワイ日モクレタニ。サテヨイ所ヘキタ。天ノ川ナレヤ。タナバタニ宿ヲカラウ。

○宿かす人とハ織女をさして云ふ

みこ此の歌をかへす〳〵よみつゝかへしえせずなりにければともに侍りてよめる　きのありつね

一とせに一たびきます君まてばやどかす人もあらじとぞ思ふ

○寛平上皇を申す

○此のたびに旅をかねたりと後撰に草まくらこたびへつゝ此たびは年月のとぶらふに同じとりわへずと句を切て意得べし

○まに〳〵は万葉に隨意とあるに付てみるとも書るとろもなゝてふとをのまゝのまゝ思ふはわろしかの歌の意集はそのしらしめんをとて字をそへたるも多したへ

○イヤ〳〵天ノ川デハ一年ニ一度ヅヽ御出ナサル彦星ト云御方ヲ待ヂヤニヨッテ。ナカノ〳〵外ノ者ガ。宿カラウト云タトテモ。借ス人モアルマイトサ存ズル。

朱雀院のならにおはしましける時に手向山にてよめる　すがはらの朝臣

此たびはぬさもとりあへず手向山もみぢの錦神のまに〳〵

○此ノ度ノ旅ハ御供ユエ。メサモ得用意致サナンダ。ソレユエ。神ハ御心マカセニト存ジテ即チコノ山ノ紅葉ノ錦ヲソノマヽ手向マスル。

たむけにはつゝりの袖もさるべきに紅葉にあける神やかへさん　素性法師

○神ヘノ手向ニハ。出家ノ身モ此トホリノ袖ナリニ切リキザンデ麻ニシテ手向ルハズ。ナレドモ。コノヤウニ見事ナ紅葉ノ錦ヲハラ一ツパイ見テ

ゞまゝと云を重ねたりと意得べし

○鶯の名をかくしてまたその鳥のうへをよめり

○此の歌によりてのちのちによみあやまれる歌とも多し

御座ナサル、神ナレバ。此ヤウナキタナイツヾリノ切レナドハ御受ケハナサルマイ。御返シナサルデガナゴザラウ。ソレユエサシヒカヘテ手向マセヌ。

○物名

うぐひす　藤原ノとしゆきの朝臣

心がら花のしづくにそぼちつゝ鶯とのみ鳥の鳴くらん

○オノガ心カラスキデ花ノ雫ニヌレナガラツライコトヂヤ乾カヌト云テ鶯ノヒタスラアノヤウニナクノハドウ云コトヤラ。

ほとゝぎす

くべきほとときすぎぬれや待わびて鳴なる聲の人をとよむる

○郭公ガ待ツ妻ノ來ベキ。ジセツガ過テコヌカシテ。マチカネテナクアノ

○人をとよましむるはかれが鳴音をめづるにつけて人の云さわぎ思ひさわぐをいふなり

○蟬ハ脱殼のあるものなれば今ま鳴をもうつせみと歌によめりてゝもたゞ蟬のとなり是は今の京となりてのならはせでとなり

壁ガ人ヲビツクリサセル。時鳥ノうへの戀の歌なり。餘材わろし。打聞よろし但し結句の說ハわろし。

うつせみ　在原ノしげとる

涙のうつせみれば玉ぞみだれけるひろとゝ袖にとかなからんや

○涙ノウツ川ノ瀨ヲミレバ。水玉ガ。トントマコトノ玉ガサチルヤウナワイアノ玉ヲヒロウタナラ。ホンノ玉デハナイホドニ。袖ヘ入レウトシタナラヂキニ消ルデアラウカ。餘材わろし。

かへし　壬生ノ忠岑

たもとよりとなれて玉をつゝまめや是なんそれとうつせみかし

○貫樣ハ袖ヘ入レウトシタナラヂキニキエルデアラウガト云ハシヤルガ。テモ袖ヲオイテ外ニ玉ヲツゝマウ物ハナイハサテ。スレヤ貫樣ノ袖ヘツ

ンデコレガサンレデゴザルト云テ。ワシガ袖ヘウツサフシヤレ。ワシモミヤウサ。

打聞よろし。餘材わろし。

よみ人しらず

うめ

あなうめにつねなるべくも見えぬかな戀しかるべき香とにはひつゝ

○梅花ハヤレ〳〵ウイ物ヤ。マモナウ散テシマイサウデ。目ニ常住見ラレサウニモミエヌ〳〵カナ。ソノグセアトデ戀シガリサウナ香ハヨウニホウテサ。

つらゆき

かにはざくら

かづけども涙のなかにはさぐられて風ふくごとにうきしづむ玉

○海ニ涙ガ立テ水玉ノチツテキエルノハ。玉ノヤウナガ。ソレヲホンノ玉ヂヤト思ウテ。其ノ海ノ底ヘハイツテ取ウトスレドモ。涙ノ中デハ。ド

○わなゝなどなげく詞なりものは初の句にかくせり

○かづくとは頭を地につきてうやまふことをぬかづくといふ又祝詞のりとにうなねつきぬきとも云へり

それを打かづくるをもかづくといひて頭に衣などを海人のうみに入をもかたちもてかづくといへり

○ながめは物思ひあるとき物みるとはなしに久しくまもりをるをいふよりてものおもひするをながめといふは後にはたゞ見るをとするはあやまりなり

ウモ手ニアタライデトラレヌ。ソシテ風ノフク度ニテウト底ニアル玉ガウイテハシヅミ。ウイテハシヅミスルヤウニ見エル。

すもゝの花

今いくか春しなければうぐひすのなくものはながめて思ふべらなり

○モウ春ノアヒダハナニホドモナケレバ。ソレヲ殘リ多ウ思フテ。人ト同ジヤウニ驚モシンキサウナカホシテ。物思イスルヤウナサウミエル。

からもゝの花

ふかやぶ

あふからものゝなはこそ悲しけれ別れんとをかねて思へば

○逢フタラウレシイハズヂヤニ。逢ヒナガラモヤツパリソレデモサカナシイワイ。アヘバマダ別レヌサキカラハヤ。別レル〳〵ヲ思ウニヨウテサ。

たちばな

をのゝしげかげ

あし引の山たちばなれ行雲のやどり定めぬ世にこそ有け

○此の題は山たち花とありしを後に山の

字をうつしもらせしが今はつたへしなるべし歌にはしかよみて猶次にもをかたなる山のきの木のついなどのつたへにてしか思はるゝなり

れ

○山カラ立テハナレテイク雲ノトマリドコロノ定マラヌヤウナモノデアトン ト行ク末ノサドウナラウヤラシレヌ世ノ中デヤワイノ。

をかたまの木　ともの り

打聞をかたまの木の説うけがたし。

見よし野のよしの〳〵瀧にうかび出る沫をかたまのきゆと見ゆらん

○吉野ノ瀧ヘウキデル水ノ沫ヲ人ハ。玉ガ出テキエルト見ルデアラウガ。

やまがきの木　よみ人しらず

（横井千秋云。山柿はちひさくむらがりてなる柿にて。世に信濃柿とも吉野柿ともいふ。又材に黒柿といふも是なり）

秋はきぬ今やまがきのさり〴〵すよな〳〵ながむ風の寒さに

○秋ガキタコレデハ風ノ寒サニ。マガキノキリ〴〵スガ。モウオツ〳〵ケヨ

○あふひは常の如くなりかつらは桂なり葵のことにはあらず

ナ〳〵ナクデガナアラウ。清

あふひかつら

かくばかりあふひのまれになる人をいかゝつらしとおもはざるべき

○コレホドニ逢事ガマレニナツタ人ヲ。ドウシテツライト思ハズニ居ラレウゾ。ツラウ思ハイデハ。

人めゆゑ後にあふひのはるけくはわがつらきにや思ひなされん

○人目ヲツヽムユエニ。コレカラ後ニモシ逢フコトガ遠ウナツタナラ。ソノワケハシラズニ。コチガツライノニナルデガナアラウ。

くたに　僧正遍昭

ちりぬれに後はあくたにある花を思ひしらずもまどふてふ哉

○てふは花をしたふものなれば云出てあ

まりに物に思ひなづむ人を教へてよめり蝶は字音にのみいひて和名をいはず新撰字鏡に蝶の和名かはひらでといへり今もみちのくにてはあまびらと云よし

○花ハチツテシマヘバ後ニハ芥ニナツテナンデモナイ物ヂヤニ。ソレヲ
カテンセズニアハウナ。サテモマア花ニマヨウワカナ。

さうび　つらゆき

われはけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

○オレハ花ト云物ヲ今朝始メテサミタガ。花ヲバ世間ノ人ガアダナ物ヂヤト云ヂヤガ。ナルホドミレバ。アダナモノト云ベキ色ヂヤワイノ。打聞よろし。

をみなへし　とものり

白露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも糸をみるべし

○露ヲ玉ニシテツナグトテヤラ。蜘ガ女郎花ノ花ヘモ。葉ヘモミナ糸ヲ引テカケタ。

朝露を分そはぢつゝ花見んと今ぞ野山をみなへしぬる

○をみなめしとよむへの濁れるをめとなふるなりされどていはをみなへしとなへしなるべし

○さゝがにハ蛛なりもはら蟹にすむ精にかたちの似たればさゝがにといふなり

○これは今の京なる嵯峨の小倉山なるべし

○桔梗の字音なり

○女郎花ヲ見ヤウト思フテ。朝露ヲ分テヌレ〳〵アルイテ。今日サ野ヤ山チドコモカシコモミナトホツテ知ツタ。

朱雀院のをみなへし合せの時にをみなへしといふ

いつもヒをくのかしらにおきてよめる　つらゆき

をぐら山みね立ならしなく鹿のへにけん秋をしる人ぞなき

○小倉山ノ峯ノアタリヲアチコチアルイテ鳴ク鹿ノ。コレマデ經テキタ秋ノ數ヲサ何ン年ヂヤカシル人ハナイ。

あさちかうの花　とものり

○野ノケシキヲミレバ。冬ガレノ物ガナシイ時節ガ近ウナツタワイ。露ノ色ガカハツテキタ。

オイタ草葉モ色ガカハツテキタ。

秋とは物がなしき時節をいへりさる例秋の部にも秋はきぬ紅葉はやどに

○紫苑の字音なり

○龍膽なり今りうとうと云は唐音の轉せるか

云々などあり。考へ合すべし。

しはに　よみ人しらず

ふりはゑていざ故郷の花見んとこしをにほひぞうつろひにける

○ドレヤ昔ノ在所ノ花ナイテ見ヤウゾト思ウテ。ワザ〳〵キタモノヂモウサ色ガカハツタワイ。

うたんのはな　友のり

わがやどの花ふみしだくとりうたんのはなければやこゝにしもくる

○コチノ庭ノ大事ノ花ヲフミアラス。アノ鳥ヲオウテヤラウ。住ム野ガナイカシテ。トカクコヽヘ來オル。

しだくはしのぐと本と同言なり。

をばな　よみ人しらず

をばなゝ尾花なり。打聞の説わろし萬葉の歌の見あやまりなり。

○牽牛子なり和名抄にあさがはといへり

○けづり花は今云つくり花なり花二枚云〻

ありと見て頼むはかたきうつせみのよをばなしとや思ひなしてん

○惣ジテ世中ノ事ハナンデモ。有ルモノヂヤト思ウテ頼ミニシテモ頼ミニハサナリガタイ。スレヤ(三)世ノ中ノ事ヲバ皆無イモノヂヤト。レウケンヲツケルガ。ヨカラウカイ。

けにでし　やたべの名實

うちつけにでしとや花の色を見んおく白露のそむるばかりを

○花ヲミテサツキヤクニ濃イ色ヂヤト見ヤウモノカ。アレハ花ノ色ノコイノデハナイ。オイタ露デヌレテ。ソレデアノトホリニ。濃ウミエルバカリヂヤモノヲ。

二條后春宮のみやす所と申しける時にめどにけづり花させりけるをよませ給ひける　御母樣

ふんやのやすひで

花の木にあらざらめども咲にけりふりにしこのみなる時もがな

○此ゲヅリ花ナミマスレバ花ノ咲ベキ木デモアルマイケレ共。花ガサキマシタワイ。致セバナルマジイ木ヘモ木實ノナルヤウニ年ヨリマシタ私ガ此ノ身モドウゾ立身イタス時節モアレカシト願ヒマスル儀デゴザリマス餘材。四の句の初の説いとわろし。

しのぶぐさ　きのとしさだ

山高みつねにあらしのふくさとはにはひもあへず花ぞちりぬる

○近所ナ山ガ高サニ。ジヤウヂウ。嵐ノフク里ハ花ハサ咲テアルモノナシニツイ散リテシマウワイ。打聞。四の句の説わろし。

やまし　平ノあつゆき

時鳥みねの雲にやまぎりにしありとはきけど見るよしもなき

○和名抄に答の類にて垣衣一名烏韮しのぶくさといへるもこれにて古き軒ふるき築土などに生るものなり

○和名抄に知母をやましといへり

○時鳥ハ峯ノ雲ノ中ヘトンデイタカシラヌ。アンコラデ鳴クトハ聞エルケレド。ドウモ形ハ見ヤウヤウガナイ。

からはぎ　よみ人しらず

〔千秋云〕。清晨堂の御神樂の時に。人長かれたる荻の枝を持つことありこれを枯荻といふよし。體源抄などに見ゆ。又いとしろく枯たるをぎをたかやかにかざしなど源氏物語にも見たり。さればこれはもとからをぎとありて歌も二の句。からを木毎にとありけんを題の荻を萩にわやまりて。歌のてにをはをも。それによりて改めつるものにはあらじ歟。

うつせみのからはぎごとにとゞむれどたまの行へを見ぬぞ悲しき

○蟬ノカラヲバスギステヽドノ木ニモトメテオイテ。其身ハドコヘカ飛ンデイヌルカ。此ノ人間モテウドソンナモノデ。人ゴトニ死ヌレバミナカ

ラダチハ棺ノ中ヘトメテオケ。カンジンノ魂シヒハドコヘトンデイヌルヤラ。ユクヘカシレヌヤウニ。ナツテシマサノハサ。カナシイ子ヂヤ打聞よろし。

かはなぐさ　ふかやぶ

うばたまの夢に何かはなぐさまんうつゝにだにもあかぬこゝろを

○逢ヒタイト思フ人ハ夢ニテモ見レバ心ガ井ルト云フナレドモ。(一)夢ニ見タバカリデドウシテ心ガ井ヤウソ。シヤウジンニ逢テサヘマダタラヌヤウニ思ウ心ヂヤモノチ。

さがりこけ　たかむこのとしたる

花の色はたゞ一さかりこけれどもかへすぐゝぞつゆもそめける

○花ノ色ノ濃イノハ。タツタ一サカリデ。ワヅカノ間バカリナレドモソレヲ露ハ。毎朝毎晩ナンベンモ〳〵サンメルワイ。タツタ一サカリナモノ

○和名抄に河苔かはなといへる是なり

○日陸ひかげといひて白青なる苔の奥山の古木の枝などに生たるを云さるをがせと云物なり

○和名抄に長間笋ながけ笋青最晩く生味大に苦也といへりてれなるべし今は女竹とも思ふのめ竹ともいふなり

○和名抄に苦竹かはたけといへるこれなり

チ。ソノヤウニ染ズトモヨイワチ。

にがたけ　しげはる

にがたけは次なるかはたけとゝもにくさぐさの名なりうつは物語にみゆ。

(千秋云。にがたけは。苦茸。かはたけハ。革茸なり)

いのちとて露をたのむにかたければ物わびしらに鳴野べの虫

○野ヘンノ虫ハ。露ヲ命ヂヤト思ウテ頼ミニスレドモ。頼ミニナリニクイハカナイモノヂヤニヨツテ。雖義ニ思ウテカナシサウニ鳴ク。

かはたけ　かけのりの王

さよふけてなかばたけ行くかたの月吹かへす秋のやまかせ

○夜カフケテモウ半分ホドモタケテイタアノ月ヲ東ノ方ヘ吹カヘセ秋ノ山ノ風ヨ。

○蕨（わらび）を藁火にとりなせり六帖にもみよしの山のかすみをけさみればわらびのもゆるけふりなりけりかくさまによめるがおはし

○いさゝめは万葉に卒爾とかきしもいさめとよむべき歌ともなりてかゝりそめて意なりとは思ふる

わらび　　しんせい法師

烟たちもゑとも見えぬ草の葉をたれかわらびとなづけそめけん

○ワラ火ナラバ。烟リモ立ツテモエルハズヂヤニ。烟モタヽズモエル所見エヌ草ノ葉ヂヤモノヂ。誰カワラ火ト云。名ヲツケンメタヿヤラ。

（千秋云。あの歌は。物名のよみざまにあらざれば。此の部に入へきにあらず）

清

さゝまつ　びは　はせをば　きのめのと

いさゝめに時まつまにぞひとへぬる心ばせをばひとに見えつゝ

○近イウチニ逢イマセウトタガヒニ約束ヲシテオイテ。其日マデハツイワヅカノ間ダノヿニ思ウテ待ツアヒダニサ大分日數ガタツタワイ。コレデハトウアラウカ。逢ウヿハ心モトナイモノヂヤ。逢ハウト云ワシガ心アヒヲ人ニ。見ラレテマア。エヽコンナヿナラ約束セデバ。ヨカツタニ

○あしきなしハ心うしとも　にがゝしきとも　いふ意なり　なげきなつめそはなげきをあつめそといふなり

○唐琴は備前の國にあるところなり

○いかゞさきたしかならず

なし　なつめ　くるみ　　兵衛

あぢさなしなげきなつめそうきとにあひくるみをばすてぬものから

○イロ〳〵サマ〳〵ノウイコトニアフテ來タ此ノ身ヲエステモセズニ居ナガラソノウイ事ノカズ〳〵ヲトリアツメテナゲカウヿデハナイアヽムヤクナヿヂヤ。

からとといふところにて春の立ける日よめる　　安部清行ノ朝臣

涙の音のけさからことに聞ゆるゑ春のしらべやあらたまるらん

○アノ涙ノ音ノケサカラカハツテ聞エルノハ。此ノ唐琴ノ調子モケサカラハ春ノ調子ニナツテキノウマデトハ改マツタカシラヌ。

いかゞさき　　かねのおはぎみ

崎ハ山崎をカ崎なと水邊なら云でも河内

茨田郡に伊香郡の郷あり近江に伊香郡あり又かげろふ日記にいかゞさきれにきわりて近江なるべし

かぢにわたる涙のしづくを春なればいかゞさきちる花と見さらん

○舟ノカヂヘアタツタ涙ノタダケテチル果ガ。今ハ春ナレバ花ガチルト思ハレル。トント花ヂャ。アレチドウシテ花ト見ヌモノガアラウゾ。花のさきちるといふは。たゞちるとなり。例みなしかり。打聞わろし。

あはのつねみ

かのかたにいつからさきに渡りけん涙路はあとものこらざりけり

○見レバアレアノ辛崎ニ人ガ立テ居ルガ。アソコヘハ今マデニ何時渡ツテイツカラアヽシテ居ルコヤラ。今マデ渡ツタナラ。其アトガアリソナ物ナレバ。涙ノ道ナレバ渡ツタ跡モノコツテハナイワイ。

伊勢

涙の花おきからさきて散くめり水の春とは風やなるらん

○水のはるてふ詞秋の歌に

もみぢばのながれざりせは龍田川水の秋をバ誰かしらましとよめるに同し

○北野と平野の間をながるゝ川なりいにしへてゝにて紙をすかせ玉へり

○涙ノ打ヨセテタルノハ。テウド花ノチツテクルヤウニミエルガ。此ノヤウニ打ヨセテ磯ヘチツテクル涙ノ花ハ。アノ沖ヘサイタ花ガ沖ノ方カラチツテ來ル樣子ヂヤ。サテ花ヲサカスノハ春ノコナリ涙ノヨセテタルノハ風ユエナリ。スレヤ水ノタメニハ。風ガ春ニナリカハツテアノヤウニ花ヲサカスカシラヌ。

打聞說上句にかなハず。

かみやがは

うば玉のわが黑かみやかゞるらんかゝみの影にふれるしら雪

つらゆき

○オレガ黑イ髮ガ色ガカハツテシラガニナツタカシラヌ。鏡ヘウツヽタ影ヲ見レバツムリヘマヅ白ニ雪ガフツタ。

よどがゝ

あし引の山べにをれば白くものいかにせよとかはるゝときなき

○河内の交野郡山城のさかひなり

○今昔物がたり五條西洞院にかつらの宮と申入おはしますその前に大なるかつらの木あるり故に

○山里ニ住ンデ居レバ。ジヤウゲウ雲ノハレル片モナイサウナウテサヘ氣ノツマツタ山ノ中ヂヤニ。何ントセイト云フコデ此ノヤウニ雲サヘ晴トキモナイコゾ。

かた野　たゝみね

夏草のうへはしげれるぬま水のゆくかたのなきわが心かな

○拙者ガ身ハテウド。ウヘニハ夏ノ草ガ一ツハイハエシゲッテ。アルヤラトナイヤラシレヌ沼水ノヤウナモノデ。世間ノ人ニモシラレヌ立身モエセ子バテウド又ソノ沼水ノ流レテ行ク所ノナイヤウニ。扨サテ心ノユカヌコカナ。オモシロウナイコカナ。

かつらのみや　源ノはどこす

秋くれど月のかつらのみやはなるひかりを花とちらすばかりを

○ソウタイノ木ハ秋ハ實ガナルモノデヤガ。月ノ中ナ桂ハ。秋ガキタトテ

名づけまゐらせたるなり云〻ふのことなるべし

○和名抄に百和香あり唐國のむかしわらい香なりこれにもつたへし來しなるべし後世この香の傳をいろ〳〵いへどさだかに傳はれりとも聞ねず○紙に墨をながして文なせるなり今もあるものなり

實ガナルカ。實ハナリハセヌカ。タヾ秋ハ常ヨリサヤカナ光ヲ花ノヤウニ思ワセラスバカリノコヂヤモノヲ。ソレニ世間デ秋ノ月ヲバカクベツニ賞翫スルハドウ云コゾイ。

百和香　よみ人しらず

花ごとにあかずちらし〻風なれどいくぞはくわからしとかは思ふ

○花ト云花ヲバドレモカレモミナ。殘リ多イニ散シテシマウヤツナレバ風ヲバドレハドレホドフンクニ思ウゾ。タイテイ不足ニ思ウコデハナイ。

すみながし　しげはる

春がすみあかしかよひぢなかりせば秋くる雁はかへらざらまし

○春ノ霞ノベッタリトフサガツテアル中ニ通ツテイク道カ。ナイナラバ秋キタ雁ガ春カヘリハスマイニ。霞ノ中ニモ道ガアルデ春ハカヘルデアラウ。

○炭をおこしたる火なりとおきてふのみもいふ沖と○河にいふことうたがへし万葉によるしのゝ川のゝさふと沖によめるなり

○粽（ちまき）飯を青き眞菰草にて つゝみ黄糸をもてまくこと大膳式に見えたり

○春をはじめ

ふき火　みやこのよしか

流れいづるかたゝに見えぬ涙川（なみだ）おきひんとさや底（そこ）としら れん

○流レテ出ル源サヘドチヂヤカシレヌ。涙川ナレバ。マシテ底ノ深サハイカホドアルカシレヌガ。モシ沖ノ深イ所マデ。水ノ干ル時ガアツタナラ底ノ深サモミエルデアラウガ。

ちまき　大江ノ千里

のちまきのおくれておふるなへなれどあだにはならぬたのみとぞきく

○後蒔（まき）ノオクレテ。ハエタ苗デモ。ムダニナツテシマイハセズニ。秋ハヤツハリ實ノツテ頼ミノアル田ノ稻ヂヤト。聞及ンデ居ル。スレヤ學問デモナンデモ。オンガケヂヤト云テ爲マイヤウハナイゾヤ。

打聞四の句の注俗意なり。

をとしめ。るをはてにて。ながめをかけて時の歌

終りにしてながめと云詞を歌の中に云ひかけてさて今の時のうたをよめと云此なかめは春の長雨の事なるべし

よめと人のいひければよめる　僧正聖寶

花のながめにあくやとて分ゆけば心ぞともにちりぬべらなる

○ゾンブン目ニ見飽カト思ウテ。花ノタント咲テアル中ヲ分テイケバ花ニ目ガ移ツテ。コチノ心ガサ花トイフシヨニ。アチコチトチツテイクヤウナ心モチガスル。

頭書　古今和歌集遠鏡之上終

本居鈴廼屋翁著述　下卷

顏書

古拳和顏氏家訓

山崎美成大人頭書

頭書 古今和歌集遠鏡之下

○万葉には男女の相思ふ恋のみならず親子兄弟朋友の相思ふも共に相聞と題して部を分てり総て男女の中云てのみの歌とするはこの集がはじめなり

○戀歌 一

よみ人しらず

時鳥なくやさつきのあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

○(上)ドノナヲナワケナ物ヤラマダシラズニワシヤマア。ムチヤナ戀ヲスルカナ。

素性法師

音にのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

○音ニキクバカリデ(の白露)マダ見タコトモナイ人ヲ思フテ。夜ルハ子ラレテオキテ居テ。晝ハ又戀シサニエコタヘイデ。消サウニ思ハルヽ。

紀ノ貫之

○上はは やくといはん序なり

よし野川岩浪たかくゆく水のたやくぞ人をおもひそめてし

○アノ人ヲオレヤトウカラ思ヒソメタ。又オレガアノ人ヲ思フノハサイシヨカラモウ。吉野川ノ早瀬ノヤウニヤルセモナウ思フ。

（千秋云。後の詞の意は「たきつ心をせきぞかねつる」「たきつせの中にもよどはありてふを云〻などの意なり）

藤原勝臣

しら涙のあとなき方に行舟も風ぞたよりのまろべなりける

○涙ノ上ノ。人ノトホッタ跡モナイ方ヘイク舟デモ。風ト云フ物ガサ手ヨリノ案内者ヂヤ。ソレニワシガ戀ハソンナ風ノヤウナ。タヨリニセウ物サヘナイワイノ。

餘材。打聞。ともにわろし例をもてしるべし。

在原元方

○音羽山は逢坂の西南につゞきて頭より西は山科なり

○立かへりとは涙によせていへり人に心をおくとはその戀人の上に心を思ひおくことなり

音羽山おとに聞つゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

○音羽山ハ逢坂ノ關ノコチラニアル山ヂヤガ。其山ノ名ノトホリニコナタデ音ニハキヽナガラ。關ガアッテコエラレヂバ。コチラニチヅト。トマッテ居ルヤウニ逢坂ト云フ名ノヤウニ思フ人ニ逢フヿモエセズニ。何ン年モタテルヿカナ。サデモ早ウ逢ヒタイ。

立かへりあとれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら波

○此ヤウニコソニハナレテ居テモ。心ハジヤッヂウ。カノ人ノ所ヘバッカリイテ居レバ（つ白波）又シテモ〳〵アヽハレ逢タイヿヤトサ思フ。

打聞いとわろし。

つらゆき

世の中はかくこそ有けれふく風のめに見ぬ人も戀しかりけり

○ヨノ中ト云モノハマアカウシタヿヂヤワイ。マア聞テ下サレ。（三）マダ

○ひをりの日とは騎射の日の事なり
○あやなくはわけもなく差別もなしなと云におなし

一目も見タ丁モナイ人モ。此ノヤウニ戀シイヂヤワイ。

右近のうまばのひをりの日むかひにたてたりける
車の下すだれより女のかはのはのかに見えければ
よみてつかはしける

在原ノありひらの朝臣

ひをりといふ名は。袖中抄の説のごとくなるべし。

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなくけふやなが
めくらさん

○見ヌデモナシ見タデモナイ人ガ此ヤウニ戀シイヂヤガコレデハワケモナイ丁ニ今日ハ一日シンキニ思フテクラスデアラウサ。

かへし　よみ人しらず

しるしらぬ何かあやなく分ていはん思ひのみこそしるべ
なりけれ

○見タノ見ヌノト分テハ何ンノイハウコトゾ。ソレヤワケモナイ丁ヂヤ。

○春日野の祭ハ延喜式に春二月冬十二月共に上の申の日祭之とあり○上の句い序なり

戀ト云モノハ。思ヒバツカリコソハ。イッゾハアハレルシルベナレ。其外ノ丁ハナニモドウコウト云丁ハナイワイナ。

かすがのまつりにまかれりける時に物見に出たり
ける女のもとに家をたづねてつかはしける

みぶのたゞみね

春日野の雪間を分ておひ出くる草のはつかに見しし君は
も

○春日野ノ雪ノアヒダカラ。ハエテヽクル草ノチツトバカリ見エソメタヤウニハッ〳〵ニチョット見エタ御方ワイノマア。

人の花つみしける所にまかりてそこありける人の
もとに後によみてつかはしける

つらゆき

山櫻かすみのまよりほのかにも見てし人こそ戀しかりけ
れ

○はなつみの事はるの卷にいへり。この山さくらをたとへいふ色さな

くともあるゝけれと詞書に花つみしけるとあるにかすみの間よりなと云おもしろくつゞきたり

○山ノ櫻ノ花ヲ。霞ノアヒダカラ見ルヤウニ。ウス〳〵ト見タ人ガサマアサテ〳〵戀シイコヂヤワイ。

題しらず　もとかた

たよりにもあらぬ思ひのあやしさと心は人につくるあり
けり

○何ンゾノタヨリニコソ。物ハコトヅケテヤルモノナレ。タヨリテモナイ此ワシガ思ヒノ。カハツタコトハ。此ヤウニ思フ心ヲソノ人ニツケルノヂヤワイ。カウイフノハ。タヨリニ物ヲコトヅケルト心ヲ人ニツケルト云ト詞ガ同ジコヂヤニヨツテサ。

餘材わろし。打聞いかなる意とも聞とりがたし。

はつ雁のはつかに聲を聞しより中空にのみ物をおもふかな　凡河内躬恒

○空ヲ飛ディク始メテノ雁ノ聲ヲ聞クヤウニ。人ノ聲ヲハツ〳〵ニチヨツ

○はるかになるとうけたる縁にあらずいかに聞つゝにてあひなんといくもるのなかにはるかに如くしていつもしらぬとなりさてその人の名は高く音にきゝつゝ戀わたるとなり

ト聞テカラ。心ガヒタスラ。ウテウテンニナツテ。サテモ〳〵モノ思ヒチスルコカナ。

あふとは雲ゐるかになる神の音にさゝつゝこひわたるかな　つらゆき

○コレホド戀シウ思ウケレ共。ナカ〳〵逢ハレサウナモヤウハ遠イコデ。タヾ雲ノ中デ鳴ルカミナリノ遠イ音ヲソンカラ聞クヤウニ。音ニバツカリ聞テ月日ヲタテルコカナ。

かた糸をこなたかなたによりかけて逢ずは何を玉のをにせん　よみ人しらず　清

○一筋ヅヽノ糸ヲ。合セテ玉ヲツナグ緒ニヨラウト思ツテ。ソノ糸ヲアチラヘコチラヘトヨリカケテ。モシソレガ一ツニ合ハイデ緒ニナラズハ。玉ツナグ緒ニハ何ヲセウゾ。ワシガ戀モテウトンンナ物デ此ヤウニイロ

〇新撰和歌集には初の句夕されば奥義抄に中抄には末の句人戀る身は

〳〵トスレバモシシャウ逢ハレズバ。ドウシテ命ガツヤカウゾ。

餘材打聞ともに。二の句の注わろし。これはたゞさま〴〵として心をつくすことをたとへたるなり。男女のこなたかなたをたとへたるにはあらず。

夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人をこふとて

〇ユウカタニハ雲ノ旗手ト云テイロ〳〵ノ雲ガタツ物チヤガテウドソノ雲ノタツ空ノヤウニ何ンノ手ガ、リモナイ。遠イ人ヲ思フトテワシハユフカタニナレバ。ソノ雲ノハタテノヤウニイロ〳〵サマ〴〵トサ物思ヒチシマスル。

かりこもの思ひみだれてわがこふと妹しるらめや人しつげずも

清

〇苅タマコモノミダレルヤウニワシハイロ〳〵ト心ガミダレテ。此ノヤウニ思フト云フチ。妹ハ知ラウカイ。人ガイツテキカサズバ。コレホドニ思フトハ知リハスマイ。

〇おくとは也起るとてはぬとは、寝るとてはなり

〇ゆふたすき水緒をたすきにするを云神官等がつねにするこなれば日はかけぬなしといはんかなり序にいへりかくるハ心にかくるなり

つれもなき人をやねたく白露のおくとしなげきぬとはしのべん

〇(三)ボキルト云テハナゲキ。子ルト云テハシタウテ。アノアイソモナイ氣ヅヨイ人ヲ此ノヤウニ思ハウカヤ。サテモクチヲシイヤドウゾ思フマイゾ。

濁

ちはやぶるかものやしろのゆふたすき一日も君をかけぬ日はなし

〇(上)ワシハ一日モオマヘノコトヲ云ダシテ思ハヌ日ハ云ハナイ。

我戀しむなしき空にみちぬらし思ひやれども行ク方もなし

〇ワシガ戀ハ。サテケシカラヌ戀デ。虛空ヘ一ツパイニフサガツタサウナサウヂヤカシテ。思ヒチハラシテヤラウト思ヘ共。ドツコヘモ行クトコロガナウテ。ナンボウデモ此思ヒガハレテ。ユカヌ。

するがなるたごのうら涙たゝぬ日しあれども君をこひぬ

日はなし

○此ノタゴノ浦ノ浪ハ。オボカタイツデモ立ワカ。ソレデモサタマ〳〵ニハ此涙デモタヽヌ日ハアレドモ。ワシガオマヘヲ戀シウ思ハヌ日ト云テハケガナ一日モナイ。

夕づくよさすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もする哉

○アレアノ夕日ノ影ノサス。岡ノ松葉ハ四季トモニ同ジ色デ。イツモ云ワカチモナイガ。デウドソノヤウニ。ワシハイット云ワカチモナイ戀ヲ。マアスルヿカナ。サテモ〳〵。

（千秋云。此初句夕づくよ。夕づくひ昔より兩本有しと見ゆ。千五百番の歌合に。公經卿さびしさをいかにといまし夕づく日さすや岡べのまつの雪折季經判に。いく。万葉集にはゆふづくひさすやと侍り。古今の歌を思ひて。松をよまば。夕づくよとぞ侍るべき云ゝ。かゝれば公經卿は夕づく日とある本によりてよまれ。季經卿は夕づくよとある本につきて判せられたるなり。今師も譯は日とある本によられたり）

○此歌後撰に女のもとにつかはしける朝臣

よしのふ

とあり

よしみてかへらず木がくれて人しらたぎつ山水にいづれかはめにしも見ゆる音にこそきけと見えたり

打聞に。松を待に。どうなしてとあるはわろし。そのこゝろはなし。清

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

○山ノ陰ナ川ハシゲッタ水ノ下ニカクレテ。ヨソヘ見エハセ子ヒ。ゲウサンニサツサト流レオチルモノヂヤガ。ワシガ戀モテウドソノヤウデ。見エヌヤウニカクシテハ居ルケレド。胷ノ内ハサツサト瀧ノ流レルヤウデソレヲセキトメウト思ヘド。中々セキトメラルヽヿデハサナイ。

よしの川いはきりとほし行水の音にはたてじ戀はしぬとも

○吉野川ハケシカラヌ早イ川デ。ドウ〳〵ト鳴ッテ。岩ヲ切リトホシテイクヤウニスルドイ流レヂヤガ。ワシガ戀モ。ムヲ子ノ内ハ吉野川ヂヤソレデモタトヒコレデ。死ハスルト云テモ。吉野川ノヤウニ。音ニタテヽ人ニハシラレマイゾ。

たぎつせの中にも淀てありてふをなど我戀はふちせとも

○ある人云山高み下行水とはふかく思ふたとへなり以上四首は水に上四首は水に戀の類なりてれより下この巻の中にしのぶ心をよめる人戀ひとりにいはしとしのぶなりしの世の人に後のまきなりしのぶなりとの紅の花は末よりさき初る末を摘とる故に

なき

○山川ハ早イ物ナレド。ソレデモ其ノ間ニハ。淵ガアツテヨドム所モアルト云フ事ヤニ。ワシガ戀ハナゼ淵ヂヤ瀬ヂヤト云ワカチモナシニイツモ早瀬ノヤウナ「ゾイ。

山高み下ゆく水のしたにのみ流れてこひん戀はたえぬとも

○山ガ高サニ。上ノ方ヲバイカズニ下ノ谷バカリ流レル水ノトホリニワシモタトヒ此ノ分デコヒシニ、死ヌルト云テモウハベハアラハシハスマイソイツマデ心ノ内デバツカリ思ウテ居ヨウゾ。

思ひいづるときは山のいはつゝじいはねばこそあれ戀しきものを

○の山の(三)口ヘダシテイハヌデコソアレ思ヒダシタ片ニハ夫ハ〳〵戀シイモノヂ。

人しれず思へばくるしくれなゐの末つむ花の色にいでぬる

末つむ花と云りと誰もこわれと思ふにたゝ輪の末の少ゞ咲たるを摘もものなれば云るべし万葉によそにのみ見つつやこひん紅の末つむ花のかたにいづとも人しれずしのぶ少しかりへしのみ

○はつこい上枝を云しつこは下枝を云日木紀熊仁天皇の御歌にかぐはし花橘しつこはつこは人みなとりねからしとよめり

○人ニシラサズニ心ノ内デバツカリ思フテ居レバキツワジユツナイ。コレデハドウモタマラヌホドニ(三四)イツソワチダシテノケウ。

秋の野の尾花にまじり咲花のいろにやこひんあふよしもあみ

○此ヤウニ心ノウチデバウカリ思フテ居テハ。トテモドウシテモカウシテモ逢ハレサウナモヤウガナサニ。シアンシテ見レバ。(上)イツソウチダシテカラウカイ。

上句打聞の説よろし。清

わがその〻梅のはつえにうぐひすの音に鳴ぬべき戀もする哉

○アチコチノ庭ノ梅ノ木ノ高イ枝デ鶯ガナクカ。ワシモアノヤウニ慶チアゲテナキモセウヤウニ思ハルホドノ戀チマアスルアラレモナイ「カナ。

あし引の山はと〻きすわがごとや君にこひつゝいねがてにする

○夏なれむ夏さればを誤りしかまた六帖に夏くれば とあり しかにもわらんか

○夜ルモヨヒトヨ子ラレヌニヨツテ聞テ居レバ。ヒタモノ郭公カ。鳴カアレモソレカ君ヲ思フヤウニ。戀チシテ子ラレヌコトカイ。

三四の句は。わが君に戀るごとや。こひつゝといふ意なり。

夏なれば宿にふすぶるかやり火のいつまで我身下もえにせん

○夏テイハウナラ。テウド家ノマヘデタク蚊遣火ノ上ヘアラハレテハモエズニイツマデモクス〳〵トフスボツテアルヤウニ。ワシカ身モ此ノヤウニイツマデ人ニハイハズニ胸ヲモヤシテ居ルデアラウ。

夏なれば。夏の物にてたとへていはゝといはんがごとし秋なればともあるそれも同じ意なり。

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも

○ドウゾ戀ヲスマイト思テ。御手洗川デシタミツギヲ。神ハトウ〳〵御ウケナサレヌサウナワイマア。サウカシテ子カラ戀カヤマヌ。

つのごとなるを後にはみそぎとのみもいらひの事をいへり

あはれてふとだになくはなにをかは戀のみだれのつかねをにせん

清

○思ヒカ胸ニ一ツ杯ニナルトキニハ。聲ヲアゲテ。アヽアハレアヽアハレトイヘバコソスコシハ胸モユルマレ。ソノアヽアハレト云ヲサヘナクバ戀スルモノハ何ンデ心ヲヲサメウゾ。テウド萱ナドヲ苅テ乱レタ時ニ。一トコロヘトリアツメテ。緒デユヒツカヲルヤウニ。戀デ心カ乱レタ時ニハアヽハレアハレト云ノカ東子緒ヂヤ。

思ふにはしのぶるとぞまけにける色に出じと思ひし物を

○ナンボシノンデ見テモ。思ウ方カ強イニヨツテトウ〳〵シノブ方カサ。マケタワイ。イツマテモ色ニハダスマイト思ウタモノヲ。

我戀を人しるらめやしきたへの枕のみこそしるはしるらめ

○此ノ通リニキツウシノベバ。ワシカ戀スルノハ。人カシラウカヤ。タレモ知ル人ハアルマイ枕バカリコソハ。夜ル〳〵シテ子ルモノナレバ。

○浅茅生（あさぢふ）　小野といはん冠辞なりしのぶといはんとてしのはらと云

モシ知ルナラシリモセウケレ。

浅茅生のをの〳〵しのはらしのぶとも人しるれめやいふ人なしに

○（一）（二）此ヤウニ忍デ思フト云フモ君ハ知ウカイシリハスマイ。云テキカス人ナシニハ。

人しれぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれども逢よしもなき

○人ニシラザヌコノ思ヒトシタ「ワイノ」（三）マヂカイ所ヂヤケレドモ。ナゼニアハレルヤウノナイ「ソ。

（千秋云。二の句なぞとのともし。歌注打聞などに。たゞなぞなり。とゝいふ辞ハ。いはれぬやうなれども詞（ことば）のたすけにおきたるなりとあるは心得ず。助辞にともしを用ひたること。をさ〳〵見ゆ此とはかならずもを寫し誤りて傳へたるにて。もとハなぞもにてぞ有けん。なぞもは古歌に例多く見ゆちかくは此の巻の中にもかゝり火に云々なぞもかくとあり。もと。と字の形よく似たり。

○これハ女の歌なるべし

思ふともこふともわはん物なれやゆふてもたもくとくる下ひも

○イカホド思タト云テモコヒシタウタト云テモ逢ハレウモノカイドウデアハレル「デハナイ。ソレニ又シテモ〳〵。ムスブ手モタルイホドセツ〳〵下紐ガトケル。総体シキリニ人ニ逢ヒタウ思フ時ニハ下紐ガトケルモノヂヤト云「ヂヤガ。ワシハナニホドアヒタウ思フテ下紐ガトケタト云テモトテモ逢レハセ子ハ何シノセンナイ「ヂヤニ。

打聞下句の詞上句にかけ合わろし。

いで我を人なとがめそ大ぶねのゆたのたゆたに物おもふころぞ

○イヤサ。コレ貴様タチソノヤウニトガメテ下サルナイ。ワシハ大キナ舟ノ浪ニユラレルヤウニ物思ヒテウカラ〳〵トシテ居ルジセツヂヤスレヤアヂナ顔ツキニ見エルハズヂヤ。

○いでは日本紀に歟乞と書萬葉にも乞の字のみをかけり

いせの海ゝ釣するあまのうけなれや心ひとつをさだめか

○和名抄泛子ウケとよめり

うけは水にたゝよひてところさだめぬもの故にたとへ云り

○打はへてハ打のべてといはんがごとしさてくりよする物故にくるしといいんとて上にいへるなり

ねつる

○戀ヲスルワシガ心ハイセノ海デ獵師ノ釣ヲスルウケヂヤカシテ。フハラ〳〵トウカレテシヅノウト思フテモドウモシヅノラレヌ。釣ノウケト云フモノハ涙ニユラレテ。フハラ〳〵トウキアルク物ヂヤガ心ガテウドンノヤウニサ。

いせの海のあまの釣縄うちとへてくるしとのみや思ひ渡らん

○(一)(二)戀ユヱニ長イ月日ヲ。此ノヤウニジユツナイヿヤトバッカリ思フテタテル(わたらへ)ヿデアラウカ。

千秋云。あまのつりなはうちはへてくる。とつゞけたるは。いと〳〵長き縄に釣の枝糸をわまたつけて。海の中へ。遠くうちはへおきて。その縄をくりよせわげて。かの釣をくひたる魚どもをとるわざありこれなり。今世にあれをながの〻釣といふは。長縄の釣といへるを訛れるなり國によりては。ながなはともいへり。この歌うちはへてくるといへるよのつねの釣にては、かなはぬことなり。

○なみだ川いせに在といへど地名にはあらず

涙川なにみなかみをたづねけん物おもふときの我身なりけり

○涙川ト云川ノミナカミハトコヂヤカトナゼ思フタヿヤ ランノ川ノミナカミハドコデモナイ物ヲ思フ片ノ此ノワシガ身ヂヤワイ。ハテ涙ハ身ヤラ出ルハサテ。

たねしあれば岩にも松はおひにけり戀をしこひはあとざらめやと

○タネガアレバ。岩ニモ松ハハエルワイ。スレヤナンボ出來ニクイ戀ヂヤト云テモ隨分骨ヲ折リサヘシタナラ。逢ハレヌト云ヿガアロカイ。ドコゾデハアハレヌト云ヿハアルマイ。

○空にうきてといはんとて上はおきたり

あさなゝたつ朝霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり

○毎朝〻〻川ノ霧ノ中ニウイテアルヤウニイツモ落チ付カヌ思ヒノアル世ヂヤワイ。

○ねをのみなくといふに上いひ出でたれども鶴にはみだるといふ詞あるによりよめるなり

○よひ〳〵は毎晩のごとなり新撰和歌集にはこゝにひてとあり

○萬葉に中〻に死なばやす

忘らるゝ時しなければあしたづの思ひみだれてねをのみぞなく

○ワスレラレル時ガナケレバ。(三)イロ〳〵ト思ウテ泣テバツカリヲ居ルワシヤ。

から衣ひも夕ぐれになる時はかへす〴〵も人はこひしき

○(一)もひ毎日ユフ方ニナレバカヘス〳〵モサ。カノ人ガ戀シイ。

よひ〳〵に枕さだめんかたもなしいかにねし夜か夢に見えけん

○イツゾヤ戀シイ人ヲ。夢ニ見タ丁ガアツタガ其ノ夜ハドチラ枕ニドウシテ寐タ時デアツタヤラ。思ヒダシテミレド覺エヌ。ソレデ此ゴロモ。毎晩〳〵ドウゾ夢ニ見ヤウト思ヘド。ドチラ枕ガヨカラウヤラ定メウヤウガナイ。

餘材打聞ともに上の句の訛たがへりよく上下の詞を味ひてしるべし。

戀しきに命をかふるものならばしにもやすくぞあるべか

けん出る日の入わきしらぬわれしくるしも是をおもひあはすべし

○いせ物がたりにおもふことをいはでぞたゞにやみぬべきわれにひとしき人しなければとおもふたれをば思ひあはす

りける

○命ヲ此戀シサノクルシイノニカヘテ死ナルヽモノナラ死ヌルノハヤスイデサアラウト思ハレルワイ。此クルシイメヲセウヨリ。死タ方ガハルカマシヂヤ。

人の身もならはし物をあしずしていざ試みん戀やしぬると

○人ノ身ト云モノモ。ナンデモナラハシガラナモノヂヤ。戀シイ人ニアハズニ居テモソレガナラハシニナツテ。ソノ通リデ居ラルヽモノカ。又ソレデハコタヘラレイデ。死ヌル物カ。ドレヤ。逢ハズニ居テタメシテ見ヤウソ。

しのぶれどくるしきものを人しれず思ふてふと誰に語らん

○思フコトヲ隱シテ居ルノハサテモ〳〵苦シイニ此ヤウニ人ニシラレズニ心デバツカリ思フト云コトヲ。誰ニナリ左語リタイモノヂヤガ。タレニ語

○なゝんはなりねなどいふにおしなりねをつゞめてなれと云

○涅槃經に是身無常念々不住云〻如レ薪合レ水ヲ隨レ流離レ

ラウソ。タレニモ聞ラウ人ガナイ。

來ん世にもはやなりなゝんめのまへにつれなき人を昔と思はん

○イツソ早ウ來世ニナッテシマヘバヨイニ。ソシタラ此現在目ノマヘニツレナイ人ヲ昔ノヿダヤト思モワウニ。昔シ事ダヤト思フタラ。コレホドニフラウハ思ハレマイヲサ。

つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまで思ふなりけり

○アイソモナイ人ヲ戀シフ思フトテワシハマア。山ノ中ナラコダマノヒヤクホドニサテモ〳〵大キナタメ息ヲツイテナゲイタヿカナ。

行水にかずかくよりもはかなきと思はぬ人をおもふなりけり

○流レテイク水ヘ物ノ數ヲカキトメルノハ。ダンキニ消テシマヘバ。センノナイヲチノアカヌヿダヤガ。ソレヨリマダキツイヲチノアカヌヿハ。

○まどふはまよふにおなし

○願集に離がために君を戀らんこひわびて我はわれにもあらずなり

行

○此我は我にもあらずといふに同じ

コチヲ思フテモクレヌ人ヲ。コヲカラバツカリ思フノダヤワイ。ワシガ戀ハサウダヤワイノ。

人を思ふ心は我にあらねばや身のまどふだにしられざらん

○人ヲ戀シウ思フ心ハ。我心ダヤケレド。我心デハナイヤラシテ。此我身ノマヨウノサヘシレヌ。モシコノ心ガキツト我心ニチガイナクバ。我身ノマヨフノガシレヌト云ヿハ。ナイハズヤワサテ。アヽ戀ト云モノハカハツタモノダヤ。

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路にあふ人の夢

○人モナイハルカナ國ヘイタナラ道デ逢人モアルマイガ。テウドンンナモノデ。ワシガ戀シイ人ノヿヲ思ヒヤル其ノ心ノイク道モ。ダン〳〵遠ウナルカシラヌ。サウカシテ。アチコチト思フテ夢ヲ見テモ思フ人ニアフ夢ハ見ヌ。

打聞上句の意たがへり。

夢のうちに逢見んとを頼みつゝくらせるよひはぬんかたもなし

○セメテハドウゾ夢ノウチニ逢ハウト思フテヒルノ内カラソレヲ頼ミニシテ暮ラシタ夜ハ。ドチ枕ニドウ寝タナラ夢ニ見ラレウソ。ドウ寝タモノデアラウソト。心カマヨウテ。ドウモ寝様ガナイ。

○萬葉にこひしなばこひもしねとやたまぼこの道行人にことをつげいん

餘材打聞ともに。結句を解えず。上なるいかにねし夜か夢に見おけんといふ歌と合せて心得べし。

こひしねとするわざならしうば玉のよるとすがらに夢に見えつゝ

○コレハマア。戀デ死ンデシマヘト云ヲサウナ。ナマナカニ。夜ルハヨヒトヨ夢ニ見エテ。思ヲサセテ。ホンマニハ子カラアハレデサ。

涙川まくら流るゝうきねにと夢もさだかに見えずぞありける

○もの故はものなからの義なり

○新撰萬葉にハ二三の句我身ぞかげとなりにけるとあり

○下にもゆるは水そこをいひて心の中にもゆる也心の

○涙ガ川ノヤウデ枕ガ流レテ川舟ノ中デ浮テ寝ルヤウナ。カウイウ浮寝デハ見ル夢モハツキリトハサ見エヌワイノ。

戀すればわが身は影となりにけりさらとて人にそとぬものゆゑ

○戀ヲスレバワガ身ハ。此ヤウニヤセテ。影ノヤウニナッタワイ。サウカト云テ思ウ人ニ添ヒモセヌモノヽダセニサ。影ナラ人ニソヒソナモノデヤニ。

かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川にうきてもゆらん

○鵜飼舟ノカヾリ火コソ川ニ浮テモエル物ナレ。カヾリ火デモナイワシガ身ノナゼニマア。此ノヤウナ涙ノ川ニウイテ。胸ニ思ヒノ火ガモエルヤラ。

かゞり火に影となる身のわびしさは流れて下にもゆるなりけり

中に思ふを下に思ふと云ハまたよめり

○六帖には五の句うゑて見ましをとありて貫之の歌なり

○川ヲ流レテクダル鵜飼舟ノカゞリ火ノ移ツタカゲハ水ノ下デモエルガ。ワシモテウドソンナモノデ。戀ニヤツレテ影ノヤウニナツタ身ノ。ツライ難儀ナコトハ。四長イ月日ヲ。心ノ内デバツカリ思フテ。ム子ノモエルノヂヤワイ。

はやき瀬に見るめおひせば我袖の涙の川にうゑましものを

○ミルメト云モノハ海ノ中ヘハエルモノヂヤガ。ソレガ若シ川ノ早イ瀬ヘハエテソダツナラ。ワシガ袖ノ涙ノ川ヘウエワセノ。ナゼニナレヤワシガ涙ハ早イ瀬ノヤウニ流レルソシテ。戀シイ人ニ逢フヿヲミルメト云ニヨツテサ。清

おきへにもよらぬ玉藻の波のうへにみだれてのみや戀渡るらん

○ワシガ戀ハ沖ノ方ヘモ磯ハタヘモヨラズニ。涙ノ上デミダレテアル藻ノヤウニドチラヘモツカズニ心ガ亂レテ。イツデモ此ヤウニ。戀シイ〳〵

○しらずやはうたがひのやにわらずよにかよひてみづからなげく詞なり

○打聞にハ人はしらなんとあり

ト思フテバツカリ月日ヲタテルデアラウカ。

あしがものさわぐ入江のしら波のしらずや人をかくこひんとは

○「上」人ヲ今此ノヤウニ戀シウ思ワウトハ。思ヒモヨラヌヿヨ。

人しれぬ思ひを常にするがなるふじの山こそ我身なりけれ

○常住人ニシラサヌ思ヒヲスルワシガ身ハ。外ニハナイ。駿河ノ富士山ガサワシガ身ヂヤワイ。ナゼト云フニ富士ノ山モ火ハモエズニ常住烟ガ立テモエルハサテ。

とぶ鳥のこゑも聞えぬおく山のふかき心を人はしらずや

○イカウ深イオク山デハ。鳥ノ聲モセヌモノヂヤガ。ソノクラヰノ奥山ホド深イ此ワシガ心ヲ。思フ人ハ。サウトハシラヌサウナガ。ドウソ知テクレカシ。

あふ坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しきねのみ鳴ら

○六帖には下の句いはでしもこそてひしかうけれとあり

○後撰にこの歌をのせて詞書に返しせぬ人につかはしけると見えそのかへし

ん

○相阪ニハトシテアルアノ木綿ヲツケタ鶏モ人ガ戀シイヤラ。オレト同ジヤウニ聲ヲアゲテヒタスラ鳴。

打聞ゆふつけ鳥の説わろし。

逢坂の關に流るゝいはし水いとでこゝろにおもひこそすれ

○(上)イハズニ居ルデコソアレ。心ニハタイテイ思フ丁デハナイ。

うき草のうへはしげれるふぢなれやふかき心をしる人のあき

○ワシノ深イ心底ハ。ウヘニハ浮草ノシゲッテ見エヌ淵ヂヤカシテ。此ノ深イ心底ヲ。人ガ知テクレヌ。フカイ丁ガ見エヌサリナ。

打わびてよばゝん聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

○サシツマッテセンカタナサニ大キナ聲ヲシテヨバヽツタナラ。其聲ニハ

山彦のとゝのまに〳〵とひゆかばむなしきそらに行やかへらん

○入紐は雌紐雄紐とて裝束の時とり合せてさしいるものなりよりて入紐と云ふ太刀にも入紐わりて片方を輪にしてそれへ入て結ぶなり

ヨモヤ。コタマノヒヾカヌ山ハアルマイトサ思フ。大キナ聲ヲスレバ必コタマノヒヾリ通リデワシガコレホドニ深ウ思フ丁ナレバアチラカラモスコシハ何ントソ思フテクレンナモノヂヤ。

こゝろがへする物にもがかた戀しくるしき物と人にしらせん

○タガヒニ人ノ心ガトリカヘラレル物ニシタイモノヂヤ。ソシタラコチノ心トアチノ心ト入カヘテ片思ヒハクルシイモノヂヤト云丁チアノ人ニ思ヒシラサウニ。

よそにしてこふればくるしいれ紐の同じ心にいざむすびてん

○今ノトホリニヘダッテヨソデ戀シウ思フテ居レバクルシイニ。両方ノ紐ヲ一所ヘムスビ合スヤウニドレヤコレカラハ一所ニ居ルヤウニセウゾ。おなじこゝろにといへるは。或人の云からぶみに同心結といふまとわるによれるなり。といへり。又今おもふに。ところをまゝろと寫しあやま

れるにや。

春立ばさゆる氷の殘りなく君が心とわれにとけなん

○春ニナレバ氷ノ殘ラズトケルヤウニ君ガ心ハドウゾオクンコナウ我ニウチトケヨカシ。

あけたてば蟬のをりはへ鳴くらしよるは螢のもえこそ渡れ

○夜ガ明レバ蟬ハ蟬ノヤウニヒガナ一日ナイチクラシ。夜ハ螢ノヤウニ思ヒニモエテ夜ヲアカシテサ月日(わたれ)ヲタテルワイ。

夏むしの身をいたづらになすともひとつ思ひによりてなりけり

○夏ノ比虫ノ火ノ中ヘトビコンデ。ツイ我身ヲムダニシテシマウノモ火ヲトラウト云フ思ニ一ツニヨツテノコトデヤワイ。人ノ戀ヲスルノモテフド其通リデ。人ニ心ヲカケテ。ツイ我身ヲシモテノケルコトデヤアト戀ハスマイコトデヤゾヤ。

○をりはへハ打はへに同じはへは經るなり日めもす夜もすがらの歎きを云なり

○思ひを火にとりなすさ例のことなりよりて身のいたづらにとはいへり飛蛾ともいふ蜀蛾ともものなり

餘材打聞ともにひとつおもひの說わろし。清濁

夕されば いとゝひがたきわが袖に秋の露さへおきそはりつゝ

○戀ヲスレバタヽサヘ涙ガカワキニクイワシガ袖ヘユフカタニナレバ。此ノ時節ノ露マデガオキソフテサ。イヨ〳〵カワカヌ。清濁

いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり

○イツデヤト云テモコヒシウナイト云フハナケレドモ。ソノ内ニモトリワケテ秋ノ時分ノ夕方ハ又カクベツニドウモタヘラレヌワイ。

秋の田のほにこそ人をこひざらめなどか心に忘れしもせん

○(一)サウト顯ハレテ思フフリコソスマイケレ心ニハ何シノ忘レウゾイハセヌ。

秋の田のほのうへを照すいな妻の光のまにも我やわする

○そはりはそふを延たる詞なり

○此歌は小町集に入て下の句あやしかりけり秋の夕くれとみゝたりあやしと云は常に異なるなり

○秋ノ田ノ稲ノ穂ノ上ヘイナヅマノヒカリト光ルホドノチヨツトノマモワシハオマヘノ一チ忘レルガイソレホドノ間モワスレハセヌゾイワシヤ。

人めもる我かはあやな花すゝきなどかはに出て戀ずしも

あらん

○人目チハヤカル我身カイオレハ何ニモ人目チ憚カル一ハナイニ。アトワケモナイニアヤワケモナイ何ノタメニ此ヤウニ(三)アラハサズニハツカリ思フテ居ヤウゾ。

わわ雪のたまればかてにくだけつゝわが物思ひのしげさころ哉

○洟雪ノタマルカト見レバ。エダマラズニクダケテ消ユルヤウニオレハ心カクダケテ此コロハサテ〳〵モノ思ヒノシケイ一カナ。

おく山のすがのねしのぎふる雪のけぬとかいはん戀のしげさに

○洟雪はあわしき雪といふてとなり春にかぎらず冬にもよめりたまれればかてにたまれば和塔すといふこゝろなり

○かくはかなげによめるをよく味ひて歌の心をしるべし

○うたゝ寐は轉寐なり俗にてろび寐と云ふ初てきいそめたりけりを約めていへるなり

○いとは甚の字にあたれりせめてはせまりてなり

○此ヤウニ思ヒカシゲウチハ。ドウモタマラヌ二(上)ワシハモウキユル死ヌルト云テヤラウカイ。

○戀歌二

小野、小町

題しらず

おもひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを

○思ヒ〳〵寐ルユエニヤラ。戀シイ人ガ夢ニ見エタ。其時ニ夢ヂヤト知ワタナラサマサズニオカウデアツタモノヲ。チシテチシテサマシテノケタ

うたゝねに戀さ人を見てしより夢てふ物ゝ頼みそめてき

○イツゾヤウタヽ子シタ時ニ戀シイ人ヲ夢ニ見テカラ。夢ト云モノハヨイ物ヂヤト思ヒソメテ。ソレカラ又見ヤウ又見ヤウト思フテ。夢ヲ頼ミニシテ居ル。

いとせめて戀しさ時はうゞ玉の夜の衣をかへしてぞきる

○万葉には袖かへすとあり一わきも子にこひてすべなみしろ妙の袖かへしは夢に見えきや

○拾芥抄二十一寺之中上出雲寺下出雲寺見ねたり

○法華經五百弟子品曰以無

○衣ナカヘシテ着テ子レバ思フ人ヲ。夢ニ見ルモノヂヤトイヘバワシモキツウサシツマツテ戀シウタヘラレヌ時ニハ子マキヲウラカヘシテサキテ子ル。

秋風の身ゐ寒ければつれもなき人をぞ頼むくるゝ夜ごとに

素性法師

○ワシガ思フ人ハツレナイ人ナレドサ秋風ガ身ニシンデ寒ケレバ日ガクレヽバ毎夜モシヒヨツト見エルコモアラウカト思フテワシハソレヲ頼ミニスル。

しもついづもでらに人のわざしける日しんせい法師のたうしにていへりけるとばを歌によみてをのゝこまちがもとにつかはしける

證法

ツイゼンノ法事

あべのきよもきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬしら玉は人を見ぬめの涙なりけり

佛寶珠繫其衣裏與之去云々この文講する時清行も小町もともに座にありて聽聞しける故に是にとよせてよみして置るなるべし

○眞セイノ談義ニトカレタカノ法華經ノ衣裏寶珠ノ事ニツイテサ。ナンボ袖ヘツヽンデモ。タマラズニコボレテ出ル玉ハ戀シイ人ヲエ見ヌ目カラコボレル涙ヂヤワイ。

かへし

こまち

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我とせきあへずたきつせなれば

○ワシガ涙ハ又トソンナコッチヤナイドウモセキトメラレヌホド流レテ瀧ノ水ヂヤ。スレヤカマヘノソノ袖ニツヽマレヌ玉ト見エル。クラ井ノ涙ハオロカナコイノ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

藤原ノとしゆきの朝臣

戀わびてうちぬる中に行かよふ夢のたゞぢと現ならあん

○思フテモ〜モアハレハセズ。戀アグンデ。スコシ子ムウタ間ダニ通ウ

ト見ル夢ノスグミチハドウゾホンマノ「デアレカシ。夢デコンズツト通ハレル道ナレ。ホンマニハソンナ「ハ及ビモナイ「。イツ〻モ見ワビテ居ル中ヂヤモノ。

中は思ふ人との中なり。然るを餘材に。ねたる中なりと。いへるは。かなはず。もししからば。うちぬはどにとこそあるべけれ。

清

すみのえの岸による波よるさへや夢の通路人めよくらん

○君ホンマニカヨフ道デハ人目ヲ憚カルモ。ソノハズノ「ヂヤガ。〔一二〕夜ル夢ニ通フト見ル道デマデ。人目ヲハヾカツテヨケルヤウニ見ルノハドウシタコトヂヤヤラ。

をの〻よしさ

わが戀むみ山がくれの草なれやしげさまされどしる人のなさ

○ワシガ戀ハ。山ノオクニカクレテアル草ヂヤカシテ。段々トシゲサカマサルケレドモ。サウト云「ヲ知テクレル人ガナイ。

○夏虫は燭蛾なり

○万葉には勝異殊等の字をけとよみてとにまされる義とす

きのとものり

よひのまもはかなく見ゆる夏虫の迷ひまされる戀もする哉

○アノヤウニ夏虫ノ火ヲトラウト思フテ飛入テ。宵ノ間ヲモエタモタズニツイ命ヲシマウテノケルノハ。キツイアハツナ「ヂヤト思ハルガ。ワシヤ又コノヤウニ人ニアヒタイ〳〵ト思フテ。戀ニ身ヲシマウノハ。アノ夏虫ノ火ニマヨウノヨリハ。ナホマサツテサテモ〳〵マア。アハウナ「カナ。

餘材。よひのまの説たがへり。清濁

夕されば螢よりけにもゆれども光見ねばや人のつれなき

○毎日夕方ニナレバ。螢ヨリモナホワシハ。思ヒガモユルケレド。ワシガ此ヤウニモエル思ヒハ。螢ノヤウニ光リガナイニヨツテ。見エヌユエニ人ガツレナイカシラヌ。光リガアツテ見タナラヨモヤカウツレナウハアルマイ「ヂヤワサ。

○袂手といへば袖のことなり

○上は序にてかくれたるところなし

○新撰万葉にきくのかきはにおく霜の消かへりてもあいんとぞ思ふとありて冬の歌に入られたり

さゝの葉におく霜よりも獨ぬるわが衣手ぞさえまさりける

○サヽノ葉ヘフツタ霜ハキツウサエルモノヂヤガ。ソレヨリモヒトリ子ルワシガ袖カサ。ナホキツウサエテ寒イワイノ。

わが宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しかりける

○(上)イヤモウキツウ〳〵キエ入ルヤウニテ戀シイワイノ。

餘材打聞ともに。きえかへりの説わろし。すべてわきかへりしにかへりなどいふ類みな。其事のいたりて甚しきをいふ詞なり。今世の語にも。にはかへるなどおほくいふと。同じことなるをや。

河の瀬になびく玉藻のみかくれて人にしられぬ戀もする哉

○川ノ瀬ノ底ニハエテナビイテアル藻ノ水ニカクレテシレヌヤウニ思フ人ニシラレヌ戀ヲワシハマアスルヿカナ。

○みをつくしとは舟のかよふところを水をを尾と云ふそれに標の杭をたつるなりつゐに助辞にて水尾杭なり延喜式に難波津頭海中ニ立澪標二十丈佐日記に難波ノみをつくしのもとより難波津きて河尻にゝとあり

かきくらしふる白雪の下消にきえて物思ふころにも有かな

みぶのたゞみね

○雪ノ下カラ消ルヤウニ。ワシハ人ニハ云ハズニ此ゴロハホンニ消入ルヤウニ物思ヒヲマアスルヿカナ。

君こふる涙のとこにみちぬれば身をつくしとぞ我はなりける

清原おきふ

○ミチツクシト云モノハ海ノ中ニ立テアルモノヂヤガ。ワシハ君ヲ戀シウ思フテ泣ク涙ガ。テウド海ノシホノミチタヤウニ。床イツパイニ。ミチタレバ。ソノ床ニ子テ居ルワシガ身ハ。トントソノミチツクシニサ。ナツタワイ。ソシテソノミチツクシト云フ名ノトホリニ。身ヲツクシテシマウテノゲルデアラウ。

しぬる命いきもやするとこゝろみに玉のをばかり逢んと

○玉のをばかりはしばしのはをといふにいへり

いとなん

○トウテ戀デ死ヌル此ノ命ガ。若シヒヨツト。生ノビルヿモアルカ。物ハ（こゝろみ）タメシダヤニドウゾ。短イ玉ノ緒ノアヒダボドナリトモ。チヨツト逢ウト云テクレカシ。

わびぬればしひて忘れんと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

○トツトモウ戀ニナンギシハテタレバ。ドウゾシテムリニ此事ヲ忘レントラウカト。ソレガ頼ミニ思ハレテ。ソシテアハレモセヲ子バ。アヽ夢ト云モノハサ。人ニ頼モシウ思ハセテオイテ。何ンノナクニタヽヌモノダヤ。

打聞に。人だのめを人だのまれとあるはたがへり。人だのませとこそいふべけれ。（ま）は即ちませのつゞまりたるなり。

よみ人しらず

○新撰万葉にはわりなくぞ暁てもさめても戀らるゝうらみをいづちやりて忘れんとあり六帖には上の句それと同じく下の句は今とおなじ

○今の本には名にやのこらんとあり新撰万葉に名にやたつなんとあるが聞にやすくさわりもよろし

わりなくもねてもさめても戀しきか心をいづちやらばわすれん

○ナラヌコトチムリニ此ノヤウニマア。サテ〳〵子テモオキテモ戀シイコトカナ。コレデハドウモタマラヌガ。此ノ心ヲドチヘヤツタラ。此ノ戀ヲワスレルデアラウゾ。

戀しさにわびてたましひまどひなばむなしきからの名にや殘らん

○此ノヤウニ戀シイノニ。トウト雖義シハテト。モシヒヨツト魂ガマヨウテドコゾヘインデシマウダナラバアトハ此身ハムナシイヌケガラニナルデヤガ。ソシテ思フ人ニアヒモセヌムナシイ戀ノクセニ。戀デ死ダト云フガ名殘ルデアラウガ。

四の句ハ。魂のさりてむなしきからとなる意を。逢事なくて。むなしき戀ながらにといふ意に。いひかけるものなり。

紀ノ貫之

○こがるゝ色など云もみな火よう云さらむもゆる火の色に出ましを色燃ねとい ふなましとい ひしなり色もゆると云もやがて火の色の名あり

君こふる涙しなくはからころもむねのわたりは色もえなまし　清

○君ヲ戀シウ思フワシガ胸ハ。思ヒノ火ガモエルケレド。泣ク涙ヲケセバコソアレ。モシ此涙ガナクバ。衣物ノムネノアタリハ。思ヒノ火デモエル色ニナルデアラウ。

題しらず

よゝもに流れてぞゆく涙川冬もこほらぬみなわなりけり

○川ハ冬ハ氷ッテ流レガトマルモノデヤガ。ワシガナクコノ涙ノ川ハジヤウデウ流レテサトマル時ハナイ。冬デモ氷ラヌ水デヤワイ。

（千秋云。歌にみなわとあるを。水の沫とは譯せずして。たゞ水とのみ譯せられたり。これをもてすべて歌の譯法を思ふべし。又この歌みなわとよめるは。水とのみにて詞たらざる故なることをもさとるべし）

○六帖に貫之はさのあさげつゆおきながらにてひしきはあかぬ夢路をてふるなりけり

夢路にも露やおくらんよもすがら通へる袖のひぢてかわかぬ　濁

○夢ニ思フ人ノトコロヘ通フ道ヘモ露ガオクヤラ。ヨヒトヨ夢ニソノ道ヲカヨウタ袖カ。ヒツタリトヌレテ今朝モカワカヌ。イヤ〳〵ヨウ思ヘバサウデハナイ。コレヤ涙ヂヤワイノ。

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞおきうかりける

そせい法師

○タヾチヨット夢ニデモ思フ人ヲ見タ夜ハ。ソノ朝ノ床ガサ。ハナレテ起トモナイワイ。

いつはりのなみだなりせばから衣しのびに袖もしぼらざらまし

ふぢはらのたゞふさ　濁

○六帖にまことなきものおもひせばいつはりになみだは

てらねおとさかゞまし今と同じ意なるはいづれか前ならん

○戀シイフリチシテ。ウンニ泣テ見セル涙デアラウナラ。隨分人ニ見セウトコンセウケレ。此ヤウニ人ニ見ラレマイト。シノンデキルモノヽ袖ヲシボルヿハアルマイニ。

濁

ねになきてひぢにしかども春雨にぬれにし袖ととはいこたべん

大江ノ千里

○泣テ此ノヤウニ。ヒツタリトヌレタ袖デヤケレド。モシ人ガ問フタラ。春雨ニヌレタノデヤトイハウ。

わがごとく物やかなしき時鳥とさぞともなくよたゝ鳴らん

としゆきの朝臣

○時鳥モオレガヤウニモノガカナシイカイ。時シホナシニ夜ルハヒタモノアノヤウニナゼ鳴クヤラ。

つらゆき

○是はたゞ空なる戀をするといはんの上は序なりそらなるとはあなたへもてなたなきをいへり

○立るのそら上に同じ意なりおもはゐなくはおもはそぬを延たる詞なり

○ある人の秋ぎりのはるゝ時なきといふ縁もて立るのそらとはいふなり

さつき山稍をたかみはとゝきすなくね空なる戀もするかあ

○(上)泣テバツカリ居テ。ウカ〳〵トシテ。心モソゾロナ戀チマアスルカナ。

凡河内ノみつね

秋ぎりのはるゝ時なき心にはたちゐのそらもおもはえなくに

○戀チスルデハレル時モチイ心デハ。トント起居スルノモソゾロデウカ〳〵トシテオボエヌ。

藤原ふかやぶ

虫のごと聲にたてゝはなかねどもなみだのみこそ下にながるれ

○人ノマヘチシノブユエニ。虫ノヤウニ聲ヲ立テヽハナカヌケレド。ナイショウデハ。涙ヲナガシテバツカリサ。チリマスワイ。

○六帖には二の句のを千ぐさに咲るといひ四の句をみだれてものをとわれども今の方よろしみだれてを思ひみだるゝにたよれり

是貞、みこの家の歌合の歌

よみ人しらず

秋なれば山ぞよむまで鳴鹿のわれおとらめやひとりぬる夜を

○ヒトリ子タ夜。オレガ泣クノハ。秋デイハウナラ。山デウヘヒヾクホドニナク鹿ニモオトラウカ。オレハ鹿ヨリナホキツウ泣ク。

秋なればといい。秋の物にてたとへていはゞといふ意なり。夏なればともあるに同じ。

題しらず

貫之

秋の野にみだれて咲る花の色の千種に物をおもふころかな

○(上)此ゴロ(五ころ)ハイロ〳〵サマ〳〵ニ心ガミダレテ。サテモ〳〵コンナ思ヒチスルヿカナ。

みつね

○稲葉の風にふれてそよ〳〵となる音をそれよと云かけたり

○雲るのよそと云は遠きといふなり

ひとりして物を思へば秋の田のいなゞのそよといふひとのなさ

○ヒトリ此ノヤウニ物思ヒヲシテ心ヲクルシメテ居ルニ(三)いなゞのソレヨ御ダリヨト云テクレル人ガナイ。ひとりしては。ひとりなり。思へばは思ふにの意なり。みなふるきいひざまなり。

ふかやぶ

人を思ふ心は雁にあらねども雲るにのみも鳴わたるかな

○人ヲ思フ心ハ雁デハナケレドモ。雁ノ空ヲ飛テワタルヤウニ。サテモ〳〵ワシガ心ハ。ウカ〳〵トウハノソラニナツテマア。泣テバッカリタテルヿカナ。

餘材。二三句の注。ひがごとなりかりそめの意はなし。打聞。雲るの説。この歌にはかなはず。

たゝみね

○後撰秋のよに人をしづめてつれ〳〵とかきなす琴のねにぞなきぬる

○或抄云かきなすはかきならすなり万葉に響の字鳴の字をなすとよめり

○常よりもまさるといはん序なり

秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人のこひしかるらん

○自身ト引ナラス琴ノ聲ノ秋風ノ吹クヤウニ聞エルニマデ人ガ戀シイ此ヤウナチヨツトシタフニマデ。ヂキニ此ヤウニ戀シウ思フハ。ドウシタコトヂヤヤラ。

（千秋云。譯に自身トヒキナラスとある。自身といふこと。歌に見えず。いかにといふに。これはみづからひく琴にあらざれば。かきなすといへる詞いたづらなり。さればよその琴のねにはあらざることを。たしかにしめさんために。わきて自身といふことを。悉られたるなりすべてこの類多し。なほざりに見過すべからず。

つらゆき

まこもかる淀の澤水雨ふればつねよりとにまさるわがこひ

○一二雨ガフレバ。ウツトシウ物サビシイ故ニ。ツ子ヨリモカクベツニ戀ガマサル。

○家の集には聖やわたらんとあり

やまとに侍りける人につかはしける

こえぬまはよし野の山の櫻花ひとづてにのみ聞渡る哉

○ソチノ大和ノ國ヘマダコエテイカヌウチハ。見タイ〳〵ト思フ吉野山ノ花ヲ。人ノハナシニバカリ聞テクラスヤウナモノデ。大和ニゴザルオマヘノフチ。ウシガヌ子〳〵戀シウ思フノモ。ソノトホリヂヤアヽシンキナフカナ。

初句は。あはぬまはといふ意にいへるにはあらず。

やよひばかりにものいたりびける人のもとに又人まかりてせうそこずときゝてよみてつかはしける

露ならぬ心を花におきそめて風ふくごとに物おもひぞつく

○花ニハ露ガオクモノヂヤガ。ソノ露デハナイワシガ心ヲ。オマヘノ花ニオキソメテ井ルユエニ。風ノ吹クタビニ。花ガヨンヘチラウカトンコヘ心ガツイテサ。思ヒゴトガゴザル。ドウカヨソヘチリンウナウハサモ。

そでといひ又たゞ人におとづるゝことにもいふとゝなりぬ

○山の名をくらぶるにいひかけしのみ

○ふゆがはとにでりてよむ

○上は浮たるといはん序なり

チラトウケタマハッタソエ。

題しらず　坂上これのり

我戀はくらぶの山の櫻花まなくちるとも數はまさらじ

○喧部山ノ櫻花ノサイチウトヒマモナシニチル數ハオビタ、シイ丁デアラウケレモ。ワシガシケウ思フ數ニクラベタナラマサリハスマイ。

冬川のうへはこほれる我なれや下にながれて戀わたるら、ん　ひねをかのおほより

○ワシハ。ウハッラノ氷ッテアル冬ノ川デヤヤラシテ。其氷リノ下ヲ水ノ流ルヤウニ。外ヘハアラハサズニ。心ノ内デ。長日月ヲ戀シウ思フテタチル。

濁　たぎつせにねざしとゞめぬうき草の浮たる戀も我はするかな　たゝみね

○後撰にかから衣かけてたのまぬ時ぞなきなき人のつまとは思ふものから中〻におもひかけてはかからころも身になれぬをぞうらむべきかな

○しきたへは冠辭なり

○早イ川ノ瀬ニアル浮草ノ根モトノ。底ヘツカズニウイテアルヤウニ。ワシハウイタ戀ヲマアスルヿカナ。

よひ〳〵ゐぬぎて我ぬるかり衣かげて思はぬ時のまもなし　とものり

○(上)心ニカヽッテカタ時ノマモ思ハヌヿハナイ。

(千秋云。ぬぎてわがぬるは。ぬるとてわがぬぐといふ意なり)

東路のさやの中山なか〳〵に何しか人をおもひそめけん

○アハレモセヌ人ヲ(一二)ナマナカニ。ナゼニ此ノヤウニワシハ思ヒメソタヿヤラ。

しきたへの枕の下に海ゝあれど人を見るめはおひずぞありける

○(一)枕ノ下ニ涙ノ海ハアルケレド。戀シイ人ヲ見ルメハサ。ハエヌヿヤウイ。

○家集には三の句あらねども六帖には下の句などかゝるのまとひけぬべきとあり

年をへてきえぬ思ひとありながらよるの袂はなほこほりけり

○何ン年カキエズニモユル思ヒノ火ハアリナガラモ。夜ル〳〵ソレデモヤツパリ袖ハナミダガ氷ルワイ。思ヒノ火デトケサウナモノヂヤニ。

つらゆき

我戀ゝしらぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

○シラヌ山道コンマヨウモノナレ。ワシガ戀ハシラヌ山道デモナイニ。此ヤウニマヨウ心ハサ。ツライナンギナコヂヤワイ。

くれなゐのふり出つゝなく涙には袂のみこそ色まさりけれ

○聲ヲアゲテ泣ク血ノ涙ノ紅ハ。ソメルタビニ。袖バツカリガサ。色ガマスワイツ子ニ紅デ衣ヲ染ルノハドコモカモ同ジヤウニコン染メルモノナレ。此ヤウニ袖バカリ染メルモノデハナイニサ。

○五十二

○家集には末の句なりぬべらなりとあり

○上は序にいひて絶てつれなきと云なり

初二句。夏の部に。からくれなゐのふり出てゝなく。とあるとは意異なり。この歌にては。紅といふに用ゐう。ふり出は紅をふり出て染るさまを。聲をわげてなく事にかねたり。餘材四の句の説わろし

白玉と見えし涙も年ふればからくれなゐにうつろひにけり

○始メノホドハ白イ玉ノヤウニ見エタ涙モダン〳〵ト年ガヘレバマツカイニ。色ガカハツタワイ。

みつね

夏虫を何かいひけん心からわれも思ひにもえぬべらあり

○夏虫ノ火ノ中ヘハイツテ心カラ身ヲモヤシテシマウコヲ。エヽハカナイオロカナ「ヂヤトハナゼニ云タコヤラ。夏虫バカリデハナイ。オレモ其通リニ心カラ思ヒニ身ヲシテノケルデアラウヤウニ思ハルヽ。

たゞみね

風ふけば峯にわかるゝしら雲のたえてつれなき君がこゝ

○今の歌拾遺にふたたび入てはぬ人もとあり

○六帖には相思はぬと云題に入る

ろか

○(上)サテ〳〵ル井モナイ。ケシカラヌキツヨイ。君ガ心カナ。

月かげに我身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見ん

○月チヤ。惣体。人ガアハレト思フテ見ルモノヂヤガ。ワシガ身ヲ月ニカヘラルヽモノナラ。カハツテ月ニナツテ見タイ。ソシタラツレナイ人モ見テ。アハレカアイヤト思フテクレルデモアウカイ。

餘材。影といふに心をつけたる説わろし。月かげは。たゞ月なり。

こひしなばたが名はたゝじよの中のつねなき物といひはなすとも　ふかやぶ

○ワシガモシ此通デ戀死ンダナラバ。ワレナイ人ハ。深蓉父ハカワイヤ。ワシユエニ死ンダトハイハズニ。タゞ一通リニ世ノ中ガ無常ナ物デ死ンダヤウニ云ヒナシテオクデカナアラウガ。タトヒサウハイヒナストモ。

○弓におきふしと云ことはいにしへの弓射るさまは今とたがへり左のわきまで引ふせてひきはなちおてしオとせしよりゆみ

間ノ人ハヨウ知テ居レバ。外ノヿデ死ダトハ云フマイ。君ユエニ死ダト云ヒブラシテ君ガ名ハ立ツデアラウ。

津の國の難波のあしのめもはるにしげき我戀人しるらめや　貫之

○難波ノ蘆ノハルカニ見エル所マデ。ヒツシリトシゲウハエテアル如クニシケイ此ワシガ戀ヲ思フ人ハカウトハ知ウカイ。コレホドニアラウトハ知ルマイ。

めもはるにといへるは。たゞ見渡しのはるかなる意のみなり。蘆の芽又張ル春などの意はなし。

手もふれで月日へにけるしらを月おきふしよるはいこそねられね

○弓ヲ久シウ手モサヘズニオクヤウニ。思フ人ニ久シウアハズバ。其人ノコトバカリ思フテ。夜ルハ子タリオキタリシテ。日ノメモサヘラレヌ。

におきふしのことをよめるが古歌に多し

ワイノ。

人しれぬ思のみこそわびしけれわが歎きをば我のみぞしる

○思フ人ニ知ラレヌ戀ホドサ。ナンギナコマツタモノハナイ。此ワシガ歎クノチカ。ワシハツカリガサ知テ井テ。ソノ思フ人ハ子カラシラヌヂヤ

とものり

とに出ていはぬばかりぞみなせ河したに通ひて戀しき物を

○ワシガ戀ハテリド。水無瀬川ノウハベハ水ノナイヤウニ見エテ。下ノ方ヲ水ガドホテ流レルヤウナモノデ。詞ニダシテイハヌト云バカリヂヤゾイ。心ハジヤウヂウ思フ人ノトコロヘ通ウテ戀シイモノヲ。

みつね

君をのみ思ひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり

○五十六

○家集にかむし物なといひし女のなくなりしかばわかれの時がたの夢に見はて侍らでさめ待りにしかばとありて今の歌あり

○是は弓を引は我方に本末のよるものなれば夜をよるに云ひかけて上は序なり

○オマヘノ「パッカリヲ思ウテ寝テ見タ夢ナモノ。逢ウト見タノモオマヘノナサケデハナイ。ワシガ心カラ見タノヂヤワイ。

たゞみね

命にもまさりてをしくある物と見てぬ夢のさむるなりけり

○イノチホド惜イ物ハナイヂヤガ。ソレヨリマダ惜ウ思ハレルモノハ戀シイ人ニ逢ウト見ル夢ノマダトクト見テシマハヌウチニ早ウサメルノヂヤワイ。

とるみちのつらさ

あづさ弓ひけば本末わがゝたによるこそまされ戀の心を

○遊ルヨリモ「上」夜ルガサカクベツニ戀シウ思フ心ハマサルワイ。

みつね

我戀はもくへもしらずはてもなしあふをかぎりと思ふばかりぞ

○五十七

○新撰万葉にこひわびぬ天の河原へゆきしかわたる彦星もあはで過せる年しなけりといふなり

○ワシガ戀ハタトヘテイハヾ道ナイクニ。ドコヘイクヿヤラサキモシレズドコマデト云カギリモナイヤウナモノデドウナルヿヤラ子カラサキノシレヌヿテ。タヾアウソチイキドマリト思フバカリヂヤ。

われのみぞかなしかりける彦星もあはで過せる年しなければ

○世ノ中ニオレホドサ。カナシイモノハナイワイノ。彦星ノ戀ガ一年ニタツタ一度ヅトナラデハアハレデバカナシイヤリナモノナレド。ソレモ年ニ一度ヅトハチガヒナシニ逢ウヿガアツテ。一年モアハズニスギタ年ハナケレバ。ワシホドニカナシイ戀デハナイハサテ。

ふかやぶ

今は〜や戀しなましをあい見んと頼めしとぞ命なりける

○モウハサ今ゴロハ。戀死ンデシマウデアラウニイツゾヤ逢ハウト。アチラカラ約束シテオイタヿガアルヿ頼ミニシテサ。ソレバッカリガ命デマダカウ生テ居ルワイノ。

○この歌後鬪にひさしくいひわたりにけるにつれなくのみむなしくなりぬれば侍りけるに侍りける朝臣とて伊勢が返しあり左太臣仲平公の官位ひくき時のおほいまうちぎみの歌にてなかひの朝臣からの書たらんにかなしらせしなりひらの業平とも伊勢と時代かはすこの贈答も伊せが集に入て枇杷殿なりさて枇杷殿は躬恒と時を同じうするをこの集に躬恒が歌として入しといとも不審なりこれにいせが返し歌もあればかへすがへすいぶかしきことなり

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん

みつね

○イクヿカ〜。逢ハウト約束シテ頼ミニサセテオイテハ。アハズニ何ン年カタツ。ダマシゴトニコリズニヤツパリタノミニ思フワシガ心底ノ深イトコロヲ推量シテクレカシ。

命やは何ぞと露のあだ物をあふにしかへば惜からなくに

ともより

○合ガサ何ンデヤゾイ。ホンノツユノヤウナアダナモノデヤモノ。逢フニカヘテナラ。コノイノチシマウノハチシイヿハナイ。

○戀歌三

○物ちのらせなどいふに同じく助けながら他をもかねね又はこのあとをさだかにいはぬにも用ふ詞なり

やよひのついたちよりしのびに人にものらいひて後に雨のそぼふりけるによみてつかはしける　在原ノ業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしてはたるの物とてながめくらしつ

○オキルデモナシ子ルデモナシニ。ウツラ〳〵トシテ夜ヲアカシテハ。又雲ニナレバ。此ゴロノ空ノヤウニ。長雨ハ春ノモノデ一日ナガメテ。シンキニ思フテクラスヂヤ。

なりひらの朝臣の家に侍ける女のもとによみてつかはしける　とし行ノ朝臣

つれ〳〵のあがめにまさる涙川そでのみぬれてあふよしもなし

○ツレ〳〵ナガメ（なぶめ）イデ日ヨリハワルシ。日ハ長シヒマデサビシイニツケテハ。イヨイヨシンキデナガメチシテ。涙ノ川ノ水ガマシテ。袖ガヌレルバカリデシテ川ノホガマセバ渡ラレヌヤウニ。逢ハレサウナモヨウモナイ。

かの女にかはりてかへしによめる　なりひらの朝臣

浅みこそ袖はひづらめなみだ河身さへ流ると聞くたのまん

○袖ガヌレルトオツシヤルガ。ソレヤオマヘノ涙川ガ浅サニササウデアラウンデバツカリ。ヌレルグラ井ノ浅イ〻デハ。頼ミニナリマセヌ。身マデガ流レルトオツシヤルグラ井涙川ノ深サナラ。ソレデハ頼ミニ致シマセウ。

餘材打聞。四の句の既わろし。身さへながるとは。たゞ袖のみひづるにひかへて。深きをいへるのみなり。たとへたる意はなし。

題しらず　よみ人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心と君が影となりにき

○よるべは寄方なりなみはなくしてなり

○物故には物ながらになり此歌いせ物がたりにてい例のつくりゑなれば離なし六帖に人まろの歌とせしはいふかし

○近ウヨルテスヂガナサニ。身コソカウシテ遠ウヘダテ、居レ。心ハジヤウヂウガマヘノソウテ居ル。

餘材に。古はよるといふを。よるべといへり。といへるはひがゑなりさるゑなし。引たる万葉の歌のべい。可の意なるを。心得あやまれるなり。

いたづらに行てと來ぬる物ゆゑに見まくはしさにいざなはれつ、

○行テハムダニカヘツテクルモノトクセニ。アヒタイト思ウ心ニサソハレテハ又シテモイキ〳〵スルワイ。ドウ云テモトカクアヒタサニサ。

あはぬ夜のふるしら雪と積りなば我さへともにけぬべき物を

○雪ノツモルヤウニアハヌ夜ガイク夜モ〳〵ツモツタラ。ソノ雪ノキエルヤウニワシマデガトモニ消ルデアラウト思ハレルモノヲ。サテモアハレ

○是もとるべからず詞づかひしらべのさま人まろにはにる似もつかぬものぞ

○上の句露といはで有下はなみだをいはで涙をしらせたり

○かれなでは別なでの上畧なうきにてはは絶ずといふほどのゑに聞べし

メヲカナ。

此ノ歌はある人のいはく柿本ノ人まろが歌なり。

なりひらの朝臣

秋の野に篠分しあさの袖よりもあはでこしよぞひぢまさりける

○秋ノ野デ篠ノ中ヲ分テトホツテキタ朝ノ袖ハキツウ露デヌレルモノヂヤガソレヨリモ思フ人ノ所ヘイテ。エアハズニモドツテキタ夜ガサ。ナホキツウ涙デ袖ガヌレルワイ。

小野ノ小町

見るめなき我身をうらとしらねべやかれなであまのあしたゆくゝる

○海松メノ無イ浦ヂヤト云フ一チシラズニ海士ガミルメラ苅ウト思フテ。ヒタモノ來ルヤウニ。アノ御人ハワシガ身ヲ。ドウモアハレヌ身ヂヤト知ラシヤラヌカンテ。一夜モカヽサズニ足ノダルイニ。毎夜〳〵アウ

ト思フテ見エル。トテモアハレハセヌノニサ。

初二句の意。むかしより說得たる人なし。是は春かけてなれどもいまた雪はふりつゝといへる類にて。詞を下上に打かへして心得べき格なり。我身を見るめなき浦としらねばやといふことなり。見るめなき浦とい。逢かたき身といふ意なり。浦はたゞ見るめによれる詞のみなり。されば我身をうらむとも。うしともいひかけたるにはあらず。さて後にわが身のうらとよめる歌多きい。この歌の詞によれるものなり。

あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はん　源ノ宗于朝臣

○今夜ハゼヒトモドウアツテモト思フタニ。又トウ〳〵エアハズニアカスデヤウナ。今夜アハイデハモウアウベキ時節ハナイニ。此トホリデエアハズニ夜ガアケタナラ。春ノ此ノ日ノ長イノニシンキニ思ヒクラシテイツマデモツライ人ヤ〳〵ト思フテ一生ヲタテルデガナアラウ。

○古は渚に無きをかけてみな波の緣もてつゞけたり且

有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし　みぶのたゞみね

○マヘカタ女ト曉ニ別レタキニ。有明ノ月ヲ見タレバ。ジキリニアハレヲモヨホシテ。アヽアノ月ハ夜ノ明モシラヌ顏デ。アノヤウニヂツトユルリトシテアルニオレハ夜ガアケレバ。カヘラネバナラヌコトトテ。ノコリ多イトコロヲ別レル「カヤト。身ニシミ〳〵ト思ハレタガ。其ノ時カラシテ。ヨニ曉ホドウイツライモノハナイヤウニ思フ。

餘材に上句を。あはずしてかへる意とせるは。歌の入りどころになづめるひがことなり。顯注の如く。逢ひてわかれたるなり。然るをてゝに入れたるは。ふととところをあやまれるなり。六帖もこの集によりてあやまれり。

あふとのなぎさにしよる波なれやうらみてのみぞ立かへりける　ありとらのもとかた

つ波いわれによそへていふなり

○浦ノ磯バタヘヨワテタル涙ノ。ヂキニ引テ沖ノ方ヘカヘルヤウニ。逢ヿモナイ人ノ所ヘイクワシナレバ。イツデモソノ人ヲ恨シデバツカリサカヘルワイ。

かねてより風にさきたつ波なれやあふとなきにまだき立つらん

よみ人しらず

○マダ逢フタヿモナイサキカラ。早ウ名ノタツハ。云テ見ヤウナラ涙ハ風ガ吹クニヨツテタツモノヂヤニ。マダ風ノフカヌサキニマヘカタカラナギニ涙ノ立ツヤウナ物カシラヌ。ナゼコノヤウニマダ早ウカラ名ノタツコトヤラ。

○これは風に先だつ名とつゞくるに涙といへり

みちのくにありといふなる名取川なき名とりてもくるしかりけり

たゝみね

○(上)ナイヿヲ云ヒ立テテ。名ヲタテラレテハ。メイワクナコトヂヤワイ

○上は名をとりてといへんは我におゝ心也日本紀に負の字をとるとよめり名を負ハ名をとるといふに同じきをおもへ

あやあくてまだき名の立田河渡らでやまん物ならなくに

みむらのありすけ

○マダ早ウカラ此ノヤウニ名ノタツハ。ワケノタヽヌヿヂヤトテモカウ名ガタツタカラニハ。ドウシテナリトモ。逢ズニオカウモノデハナイ。

人はいさ我はなき名のをしければむかしも今もしらずとをいはん

清もとかた

○人ハドウアルカ。ワシハナイヿヲ云タテラレル名ガ惜ケレバ。マヘ方モ今モソンナコトハシリマセヌトハ云ハウ。

○後撰集には大つぶねに物のたうびつかはしけるを更に聞入れざりければ つかハしける元良親王大かたいなぞやわが名の惜からんむかしのつまと人にかたらん返し大つぶね左原棟梁の女とありて今の歌あり元方も大つぶねもとも棟梁の子なれば此集にハ元方の姉とか妹とかありつらんを文字の落たるをうつしつたへしならん

○おりずまはこりずまひといふ詞なるべし一度おりたるおとはすま

こりずまに又もなき名は立ぬべし人にくからぬよにしす

よみ人しらず

とき事なるを又もすまひてするといふとすべしまふはかたに人にまけし心してすまふなり

○人しれぬは人にしらせぬの約めなるべし又知られぬともいふべし

まへば

○マヘカタモナイフチ。云ヒ立ラレテ。メイワクシタフナアツタナ。ソレニコリモセズニ又ドウヤラ。名チヌテラレウヤウニ思ハレル。世ノ中ノナラヒデニクウナイ人ガアルデサ。

ひむかしの五條わたりに人をしりおきてまかりかよひけりしのびなるところなりければかどよりもえいらでかきのくづれよりかよひけるをたびかさなりければある宵ばかりつけてかの道によごとに人をふせてまもらすればいきけれどえあはでのみかへりてよみてやりける　なりひらの朝臣

人しれぬわが通ひぢの關守はよひ〳〵ごとにうちもねなん

○人ニシラサヌオレガ通ヒミチノ關所ノ番ハドウゾ毎夜〳〵ヨヒ〳〵ニチヨツトナリ左子ムツテクレカシ。ソシタランノ間ニハイラウニ。

題しらず　つらゆき

しのぶれど戀しき時はあし引の山より月のいでゝこそくれ

○ズイブンカクシシノブケレドモ。キッウ戀シイ井ニハ。エコラズニ月ガ出テヨウ見エルノニ。此ノヤウニ出テサクルワイ。

又三四ノ句は。たゞ出てもの序のみとすべし。

よみ人しらず

こひ〳〵てまれにとよひてあふ坂の夕つげ鳥は鳴ずもあらなん

○バラ一パイ戀〳〵テタマ〳〵コヨヒ始メデサ逢フタニ。ドウゾ今夜ハ庭鳥ハマアナイテクレ子パヨイガ。鳥ガナケバオキテ別レ子パナラヌニ。

秋の夜も名のみなりけりあふといへばとぞともなく明ぬるものを　をの〳〵こまち

といへべのつゆめなり

○しのゝめはいなのめと同言にて明行そらのけしきなり

○秋ノ夜ヲ長イモノヂヤト云モ名バカリヂヤワイ。タマ〳〵戀シイ人ニアウ夜トイヘバ。コレガカウト云フモナシニ。ツイ早ウ明タモノサナンノ秋ノ夜ガ長カラウゾ。

長くとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば

凡河内ノみつね

○秋ノ夜ハ一ツタイ長イモノヂヤケレドモ。アウ人ニヨツテ。秋ノ夜デモミジカウオボエル物ヂヤト。昔カラモ云トホリデ。此ノ節ハ秋テ夜ノ長イ時節ナレドモ。スイタ人ニアフタ夜ヂヤニヨツテ。長イ夜サドウモ思ヒキハメラレヌ。

しの〳〵めのはがら〳〵とあけゆけばおのがきぬ〴〵なるぞかなしき

よみ人しらず

○目ガサメテ。夜ガクワラリツト明テクレバ。一ツニナツテ子テ居タ二人ノキルモノガ。別々ニナツテ。ワカレルガサカナシイ。

餘材。きぬ〴〵の説。いさゝかたがへり。面〻とりきるを。きぬぎぬとはいはず。

（千秋云。結句。顯注本に。きるぞかなしきとあるぞ。よろしかるべき。なるぞは。おだやかならず聞ゆ。密勘に。又書寫のあやまりにやとのたまへるか。きるぞのとあるべし。なるぞのとあるべし）

あけぬとて今とぞ心つくからになどいひしらぬ思ひそふらん

藤原ノ國經ノ朝臣

○夜ガアケタト云テ。サアモウ別レルヂヤト思フ心ガツクカラシテ。ナゼニ此ノヤウニイフニイハレヌ思ヒガソフコトヂヤヤラ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

あけぬとてかへる道にはこきたれてあめも涙もふりそはぢつゝ

とし行ノ朝臣

○六帖には閑院の大臣の歌とす閑院大臣は時平公なり

○いひしらぬは調ゝなきはとの思ひがそふなり

○こきたれはおほろすがでとき事に云花ときちらし稻

ふきたれなどいたれおろすといふ心なり

○六帖にはにわらぬねにても聞なんわけぬるををれ鳴しかは

○此ノヤウニ雨ガツヨウフルノニ。夜ガ明タト云テ。別レテ歸ル道デハ。涙モ雨ト同ジヤウニモノヲコキオロスヤウニヒタ〳〵ト落テ。イヨ〳〵ヒツタリトヌレテ。サテモ〳〵ガナシイナンギナコカナ。

題しらず　寵

しの〳〵めの別れを〳〵しみわれぞまづ鳥よりさきに鳴はじめつ〳〵

○目ガサメテ別レルガナゴリヲシサニ。鶯ヨリサキヘワシガサマヅ泣キハジメタ。

よみ人しらず

時鳥夢かうつ〳〵かあざ露のおきてわかれしあかつきのこゑ

○(三)オキテ別レタ曉ニ今鳴イタ郭公ノ聲ハ。聞テモ夢ヂヤカウツ〳〵ヂヤカナホエヌ。心ガ乱レテアルニヨッテサ。打聞よろし。よざいわろし。

○玉くしげあくるといふ冠辞なり

○けさは助語なるにしもは朝霜の置さにいひかけておき來ざりけん方も知ざりつるがかへりては消ひづるに思ひかへるばかり悲しきと云て思ひのひを日に取なして影に霜のきゆるをかねたり

玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜深くこしを人見けんかも

○(一)夜ガ明デカラカヘッタナラ。人ガ見テ君ガ名ガタヽウト思フテマダ夜ノ深イウチニ別レテキタガ。ソレデモモシ人ガ見ハセナンダカシラヌ

大江ノ千里

けさしもおきけんかたもしらざりつ思ひいづるぞ消てかなしき

○ケサハマア別レニ心ガ乱レテ。ドウシテ起テキタヤラ。子カラオボエナンダガ其ノ事ヲ思ヒダシテ。今サキエルヤウニカナシイ。打聞日影の說われどさまではわじ。

人に逢て朝によみてつかはしける　なりひらの朝臣

ねぬる夜の夢をしかなみまどろめばいやとかなにも成まさるかな

○ユフベ逢テ寐タノハ。ドウデアツタヤラ。夢ノヤウデアマリハカナサニセメテハホンノ夢ニナリ度。マイチド見ヤウト存ジテ。眠ツテミレド子ラレモ致サ子ヤ。夢ニサヘエ見イデ。サテモ〳〵イヨ〳〵ハカナイコニナリマサルコカナ。

○七十四

業平の朝臣いせの國にまかりたりける時齋宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに女のもとよりかこせたりける　よみ人しらず

君やこし我や行けんおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

○夕ベノ事ハオマヘガワシガ方ヘ御出ナサツタデアツタヤラ。ワシガオマヘノ方ヘ參ツタデアツタヤラ。又夢デアツタカ。ホンマノコトデアツタカ眠ツタ内デアツタカ。目ガサメテ居ルウチノコトデアツタカ。ドウデアツタヤラワシヤ子カラ覺エマセヌ。オマエハドウデヤイナ。

○業平の伊勢下向の事たしかなるものに見ねばいせ物がたりに使ひ狩の由にいへどそれもたしかなるよりどころを見ず

○をさなく世人といへるぞかざりなくめでたし

○六帖に「あし引の山下とほる月かげにあかずも人にあひ見つるかもなたく同歌

かへし　なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

○サイナユウベノコハ。イツソ心ガクラカツテ。闇ノ夜ニ道ヲイクヤウデドウデアツタヤラ。ワシモサ一向オボエマセヌ。夢デアツタホンマデアツタト云コハ。世間ノ人定メテクレイ。

題しらず　よみ人しらず

うば玉のやみのうつゝとさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

○間イノニ。チヨツト逢タノハ。ホンマノコトデモ。タシカナ夢ニ何ホドモマサツタコトハナイワイ。夢ニ見タト同ジクラ井ノコデアツタ。

さよふけてあまのと渡る月かげにあかずも君を逢見つるかな

○(上)君ニアフテサテモ〳〵マア〳〵ノコリオホカツタコカナ。

なるを詞のかはりたるなり

○難波のみつを見つにかけたる序なり

○名取川陸奥の名所なり

もれ木は久しくうつもれたる木なり谷のうもれ木などいへり

○水の心とハ水中と云がでとくさてたゞ云かけしのみなり

三の句には。のゝあやまりにて。上句はあかずの序なるべし。萬葉に例多し。

君が名もわが名もたてじ難波なるみつともいふなあひさともいはじ

○トウゾオマヘノ名モワシガ名モタヽヌヤウニセウ。ワシニ逢タトオマヘモイハシヤルナ。ワシモオマヘニ逢タト云マイホドニ。

あひきは難波の縁に。網引にいひよせたるなり。

名取川せゝのうもれ木あらはればいかにせんとか逢見そめけん

○(二)世間ヘシレテ名ガタツタラ。ドウセウト思フテ。アヒソメタヿヤラ

よし野川水の心ははやくとも瀧の音にはたてじとぞおもふ

○吉野川ノ水ノ早イヤウニ心ニハヤルセナウ思フ共。瀧ノヤウニ音ニハタテマイトサワシヤ思フ。

○ゆめはいましめいさめなと云詞をつゞめたるなり

○これは下に心のむすぼふれるさて花すゝきは穂にいでゝあふといひて下ゆふ紐といひて結ふれいふとも冠辞なり古歌にての体多し

○おもひあまりてのうたなり

戀しくばしたにを思へむらさきの根ずりの衣色にいづゆめ

○戀シウ思フナラ心ノ内デ思フテ居タガヨイゾ。(三四)色ニダスデハナイゾ。カナラズ〳〵。

をのゝはるかせ

花すゝきほに出てこひは名を惜み下ゆふ紐のむすぼゝれつゝ

○アラハシテ思フタナラ。名ガタツデアラウトソレガチシサニ。四心ノ内デバッカリ思フテ。ムシヤクシヤトシテ。サテモ〳〵苦シイ戀ヲスルヿヂヤ。

打聞。下ゆふ紐の説俗たり。

たちばなのきよきがしのびにあひしれりける女のもとよりおこせたりける　よみ人しらず

思ふどちひとり〳〵が戀しなばたれによそへて藤衣さん

○カウ思ヒアフタドウシソ内ニオマヘカワシカドチラゾ。一人カ若シヒヨツト戀死ンダ九ラ。服ヲ着ヤウナレド。表ハレタ夫婦デナケレバ。服ハキニクイギャカ。親類ノ内ニ内ニ誰カ死ンダニヨツテキルト云テ。服ハキタモノデアラウゾ。

餘材。ひとり〳〵を我事にとれるはわろし。打聞よろし。すべてひとり〳〵といふは。みな俗言(さとびこと)にどちらぞひとりといふ意なり。

かへし　たちばなのきよき

なきこふる涙の袖のそはぢなばぬぎかへがてらよるこそはきめ

○ナルホドソンナ物ヂヤ。モシワシデモソナタデモドチラゾ戀死ンダ時ニハカナシウテナイテ戀シタウ涙テ。定メテ袖カキツカヌレルデアラウ。ソシタラヌレタチヌギカヘカテラニ。夜ルサ服ヲバ着ヤウハサテ。夜ルナライカウタレモシルマイホドニ。

題しらず　こまち

○人めを守るは人目をはゞかりつゝしむを云

○後撰に思ひねのよな〳〵夢に見しことをたゞかたゝ時のうつゝとも

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見るがわびしさ

○ホンマニハサウモアリソナモノヂヤカ。夢ニマデ人目ヲハヾカルヤウニ見ルヿノナンギサリイノ。

かぎりなき思ひのまゝによるもこん夢路をさへに人はとがめ玄

○カギリモナイホド思フコノ心ニマカセテ。セメテ夢ニナリトモセイダシテ行テ逢ハウ。ホンマニ通フハカクベツノヿ。夢ニ通フ道マデヲ。人ハ見トガメハスマイホトニ。

よるもい夢になりともの意なり下に夢路といへる故に。詞をかへてよるといいへり。こんはゆかんの意なり。さの例つねにおはし。

夢路にもあわしもやすめず通へどもうつゝに一めみしでと濁もあらず

○夢ニハ足モヤスメズニ。毎夜セイダシテ通フテ。タビ〳〵アフト見ルケ

レドモ。ソレデモイツシヤ。チヨツトホンマニ逢タヤウニハナイアト夢ハヤクニタトヘモノヂヤ。

よみ人しらず

思へども人めつゝみの高ければ川と見ながらえこそわたらね

清

○戀シウ思フ人ヲ見テハ。アヽアレハト思ヒナガラモ。人目ヲツヽム心ガイツパイヂヤニヨツテドウモヨウサアハヌワイ。四の句。かれハといふことを。川にいひよせたり。五

瀧つ瀬の早き心をなにしにも人めつゝみのせきといむらん。

○早イ川瀬ノヤウニヤルセモナフ思フ心ヂヤモノヤドウ云フデマア。堤デ川ノ水ヲセキトメルヤウニ。人目ヲツヽンデ。此ヤウニコラヘ忍ンデクルシイメヲスルヿヤラ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

きのとものり

○八十

○後撰に故郷をかはとはつゝもわたるかな淵せゝりとはむべもいひけん久枕の草子にくづれよるいもせの山の中なればさらにはしのゝめにはとだに見しかはとも云もかれも見しの心なり

○かくれぬは隱沼にて草なと生しげりたる沼なり

○後撰にふたゝび入て四の句下にかよハんとあり

くれなゐの色にぞいでしかくれぬのしたにかよひて戀はしぬとも

○(三)此ノヤウニ心ノ内デバツカリ思フテ居テ。タトヒ戀死スルト云テモ

(一)色ニハダスマイ。

餘材。打聞ともに。下に通ひてを。たがひの心といへるは。わろしかよひとは。たゝ沼水の絲の詞にていへるのみにて。歌の意はたゞ下に思ふとなり。

題しらず

みつね

冬の池に住には鳥のつれもなくそこに通ふと人にしらすな

○(上)其所ノ家ヘワシガ通フト云フヿヲ人ニシラスデハナイゾ。

餘材つれもなくの注わろし。上の句は序にて。四の句のそこハ。序よりは。底とつゞきたり。つれもなくは。氷の下をかよふ。故に。上へはさも見えぬよしなり。此詞は序のうへのことのみにて。歌の意にハあづからず

○八十一

○六帖にはおきゐる霜の葉ければとあり
○しみつくとも染つくなり

○音にだにいかに如しだにといふ詞をかろく意得べし

ず。

さゝの葉におく初霜の夜を寒みしみばつくとも色に出めや

○篠ノ葉ヘフツタ霜ガ。夜ノ寒サニ。シミツクヤウニ。ワシガ戀心モ。シミツクヤウニハ思フト云テモ。色ニダサウカイ。ドノヤウニアツテモ色ニハダスコトデハナイ。

山しなの音羽の山のおとにだにひとのしるべくわがこひめかも　よみ人しらず

○ナンボ戀シウ思ウトテモ(一二)音ニモ人ノシルヤウナフリヲセカカ。マアソノキヅカヒガイゾイナ。

此歌ある人ゐふみのうねへのとなん申す。

みつしほの流れひる間を逢がたみみるめの浦によるをこそまて

○(一)ながれ　蹟ノ間タカ逢ガタサニ(四)夜ルヲサワシハ待ツワイ。

平貞文

白川のしらずともいはじ底きよみ流てよゝにすまんと思へば

○人ガ問フタラ(一)シラヌトモイハウナレドサウハ云マイ。オレヤ眞實ナ心底デヤカラハ。イツマデモ末長ツレンハウト思フ料簡ナレバサ。スレヤソノヤウニナニモ人ニカクスコトデハナイワサテ。

したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれん人なとがめそ　ものり

○ナイセウデバカリ思フテ居レバキフウジュツナイニモウワシモイツソウチダシテ(三)たわて　ミダレウ。ソシタラ人ノ目ニカヽルデアラウカ。

○しら川はいにしへは鴨川の上をいへり

○万葉にいきのをに思へばくるしたまのたわてみだれなしらばしるとも

○山たちばなは髪そぎの時山すげにそふる草なり今はやぶかうしとよぶものなり

必ズタレモトガメテ。下サルナヤ。

我戀を忍びかねてばあし引の山たちばなの色に出ぬべし

○ワシガ此思ヒヲ。今マデハマアドウヤラカウヤラ。忍ビカクシテ居ルガ。コレカラモウドウモコタヘラレヌヤウニナッタナラバ。(三四)色ニデ、人ノ目ニモカヽルヤウニナルデアラウト思ハレル。

よみ人しらず

大かたは我名もみなとこぎ出なんよをうみべたに見るめすくなし

○磯バタハ海松メガスクナサニ。舟ヲ湊カラ沖ヘズツトコギ出シテ。存分ニミルメヲ苅ルヤウニ。ワシガ中モ。大ガイナコトナラ。モウ名ノ立ツ丁ニカマハズニ。世間ヘハツトウチ出シテシマハウ。隠シ忍ブ中ハ。思フヤウニ度々モアハレヌガ。イカニシテモウイコトデヤホドニ。

餘材打聞。よをうみの説わろし。世は男女の中をいへるにて。忍ぶ中をうく思ふよしなり。又餘材船の名のさだ用なし。

○枕は耳ちかきものゆゑに聞といふ三に聞といふ歟ともいはれいづれにもあれ大方戀をすれば枕はもはら知るべきものといふべし

○ねにあらはれてと言へる上は序なり

○古の注例のとらず六帖に入て松の歌に入て涙てす磯のそ

平ノ貞文

枕より又しる人もあさき戀を涙せきあへずもらしつるかな

○ワシガ戀チヲ。枕ハトウカラモシツテ井タ丁モアラウガ。枕ヨリ外ニハマタトシル人モナカツタニ。涙ヲドウモエセキトメイデ。ツイトリハヅシテ。モラシテノケタワイ。サテモ〳〵ウライ丁チシタ丁カナ。

よみ人しらず

風ふけば涙うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり

○風ガ吹テ涙ノウチヨセル岸ノ松ハ根ガアラハレルモノヂヤガ。ワシガ戀モソンナモノカシテ。ドウヤラ子ニアラハレテ。泣キサウニ思ハルヽ。ドウモコタヘラレ子バサ。カウ云フタバカリデハ。聞エマイガ。聲ヲアゲテ泣ク丁チ歌デハ子ニ顯レルト云ニヨツテサ。

此歌はある人のいはくかきのもとの人まろなり。

池にすむ名ををしとりの水を淺みかくるとすれど顯れにけ

なれ松とありて作者人まろとしるせりともにあやまれり

り

○池ニ住デアル鶯ノ。底ヘカクレルト思ヘド。水ガ淺サニ。アラハレテ見エルヤウニワシガ戀モ。ウキ名ノタツヲ惜ウ思フテ。隨分トカクシ忍アヤウニスルケレド。ゼヒモナイコトハ人ガ知タワイ。

あふとは玉のをばかり名のたつによし野の川の瀧つせのごと

○玉チツナグ緒ハズント細イヒヨワイワヅカナ物ヂヤガ。ワシガ中モ逢フコトハテウドソノ玉ノ緒グラ井ノワヅカナコデ。ソシテ名ノタツコハ吉ノ川ノ瀧ノ音ノ高イグラ井デ。ソレハ〳〵ヤカマシイコヂヤワイノ。

むら鳥のたちにし我名今さらにとなしふとともしるしわらめや

○ふとなしふとはふとなしふりにて事も無けにいひなすなり

○(二)一トタビ立ツ名ハ。モウモゼヒガナイ。今サラワシヤソンナコハナイト云ヒワケシタトテモ。ヤクニタヽウカイ。ナンノヤクニタヽヌコヂヤ。

○六帖に君が名もわが名もおなしとて霞の歌に入たり

○野にも山にもとは世にわたるとぬくたつとも云こゝろにてかすみよりつゞけたり

○空にたつらんはなき名のたつにはあらずもとよりそのあるのたかくて名のたかくなりをいへりなき名と云説はあしゝ此篇次なき名にあらず

ことなしふの注。打聞よろし。餘材わろし。

君により我名も花にはる霞野にも山にも立みちにけり

○君ユエニワシガウキ名ハテウド野ヤ山ノ花ニ霞ガイチメンニタツヤウニドコカラドコマデ。シラヌ人モナイヤウニナツタワイ。花ニ霞ノタツハツライモノヂヤガ。ウキ名ノ立ツタモ同ジコヂデ。サテモツライコヂヤ。花にといへる意の説。餘材打聞ともにわろし。

伊勢

しるといへば枕だにせでねし物をちりあらぬ名の空に立らん

○ナンボカクス戀デモ。枕ハヨツ知ルト云コヂヤニヨツテ。ワシヤ枕サヘセズニ。寢タモノヲ。誰ガマア知テ。ウキ名ガパツト高ウ立ツタコヂヤラ。塵コソ空ヘパツトタツモノナレ。塵デモナイウキ名カサマア。

○戀歌四

○かつ見るといはんかつ見るとはかつがつわひ見る人なり
○あさかの沼は安積郡にあるあさか山も同所なりといへり

○上はなかなかにといいん序なり
○いそのかみふるは大和の山邊郡なり中道はその中にある道なり

題しらず　よみ人しらず

みちのくの淺積の沼の花がつみかつ見る人に戀やわたらん

○〔上〕カツ〳〵ニチヨツトカウ逢タバカリノ人チ。コレカライツマデモ戀シウ思ウテ月日ヲタテルコデアラウカイ。清

逢見ずは戀しきことも慣らまし音にぞ人を聞べかりける

○一度モ逢タコトガナクバ此ノヤウニ戀シイコトモアルマイ。アフタコトガナクバタヽヨソノコトニ聞テ居ルバカリデサアラウニト思ハルヽ。清

つらゆき

いそのかみふるの中道なか〳〵に見ずも戀しとおもはましやは

○〔一二〕ナマナカニ一度モ逢タコトガナクバ此ノヤウニ戀シイトハオモハウカイコノヤウニハ思フマイニ。

○この歌友則集に見えたり

君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしけなくも　藤原のたゝゆき

もる我戀

○富士ノ山ノモエルノハジヤウヂウノコデ。珍シイコモナイガ。ワシモオマヘノコトサヘイヘバ。逢テモアハイデモ。イツデモフジノ山ノヤウニ戀ノ思ヒガモエマス。

夢にだに見ゆとはみえじ朝なゝわがおもかげにはづる身なれば　伊勢

○ワシヤモウ思フ人ノ夢ニモ見エルトハミラレマイソ。朝々鏡ヲミルニモキツウヤツレタオモカゲデ。ハツカシイ身デヤニヨツテサ。

石間ゆく水のしら波立かへりかくこそは見めわかずもわるかな　よみ人しらず

○女の歌にはいと用意あり てやさしきなり朝とにいふにて鏡といはでもとわりつくせり

○石間とよびべからずいはまとよむが古語なり

○上は序なり見るめにわがあひ思ふ人にあひ見るをよせてわくまでにもがなと願ふなり

○わりなきは道わりなきものにおもふとなり

○(一二)ドウゾ又ヒツカヘシテ來テ此通リニサアハウワイ。サテモ〳〵マアノコリオホイコカナ。

いせのあまの朝な夕なにかづくてふ見るめに人をあくよしも哉

○(上)ドウゾ〳〵思フ人ニ存分ニハラ一ツパイ。アハレルヤウニシタイ。朝な夕なは。朝食の菜。夕食の菜なり。魚類をもなといふ。菜と同言なり。此の歌などの朝な夕なを。たゞ朝夕のことゝみるはひがごと。

春霞たゝる引山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

○カスミノタナビイテアル山ノ櫻花ヲミルヤウデ。ミテモ〳〵逢テモ〳〵サテモマアアカヌ君ヂヤコトカナ。

心をぞわりなきものとおもひぬる見るものからや戀しかるべき

ふかやぶ

○九十

○心ト云モノハ。ムリナコトヲ思フモノヂヤトサ思ハレル。カウシテ逢テ居ナガラモヤツパリ戀シイワイ。逢テ居ナガラ戀シカラウハズカイ。逢テ居テハ。戀シカラウハズハナイニ。

かれてゝ後をばしらで夏草のふかくも人のおもはゆるかな

凡河内ノみつね

○夏シケル草モ。冬ハノコラズ枯レルモノヂヤガ。ワシガ思フ人モ。今コソアレ。後ニハカレテ。遠ノイテシマウデアラウニ。サウ云フコトヲバガテンセズニサテモ〳〵。夏草ノヤウニ深フ思ハレルコカナ。

飛鳥川ふちゝ瀬になる世なりとおもひそめてん人はわすれじ

よみ人しらず

○アスカ川ハ淵瀬ガヨウカハルト云フデ。世間ノ人ノ心モソンナ物ヂヤト云フコトヂヤガ。タトヒソノヤウナ世ノ中ヂヤトテモ。ワシハ一トタビ思

○ある人のいはく下にあるきのふのふちはけふの瀬になると云をとれるなりと

○そめてんはそめたらんのつゞめなり

○さむしろは延喜式にも見えて狭席はせまくみしかきむしろなりされどもかくよむはそれまでもなくさは發語にてたゞむ

ヒンメテアラウ人チバイツマデモ。忘レハスマイ。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらん

○ソウタイ木デモ草デモ。秋ハ色ガカハルモノデヤガ。秋ヲコシテモ。色ノカハラヌモノハ。ワシガオマヘヲ思ウト云此ノ詞バカリデカナアラウ

何ハカハルト云テモ。此フシガ詞バツカリハカハリハセヌソエ。

打聞わろし。

題しらず

さむしろ衣にかたしきこよひもや我をまつらん宇治のはし姫

○今夜モ帶ヲトイテ。フトンノ上ヘキルモノヽ片一方ヲシキテ。我ヲ待テ居ルデガナアラウ。宇治ノ橋姫ガサ。

打聞はし姫の詞いかゞ。

しろのとに心得べし

○あり明月ハ十五夜より後をいへどもかやうに待わびたらんは廿日よりの後の月なるべし

又はうちのたまひめ　清

君やこん我やもかんのいさよひに眞木の板戸もさゝずねにけり

○君ガヽルデアラウカ。ワシガ行ウカト。暫ラク見合セテ居タデ。戸モサヽズニヲタワイ。

そせいはうし

今こんといひしばかりに長月のあり明の月を待いでつる哉

○オツヽケソレヘ參ラウト云テオコシタバカリニ。此ノ九月ノ末ノ夜ノ長イニサテマツホドニ〳〵。オソウ有明ノ月ガハヤモウ出タワイ。約束モセナンダ有明ノ月サヘ待ナゲシタニ。ソレニサ待ツ人ハサテモサテモ來ヌヿカナ。コレハマアドウシタヿソ。

よみ人しらず

○万葉にわが宿に梅さきたりとつげやればあちふに似たりちりぬともよし

○一説にてむらさきは濃紫なり

○和名抄に髻を毛度由比といへれば即髪をもて元を結をもいひ又糸もてゆふをもいふなり

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに〳〵たり待ずしもわらず

○今夜ハキツツ月ガヨウゴザル月ガヨウゴザルト人ノ所ヘシラセテヤツタラ。ソレデハチドゴザルト云テヤルモ同ジヤウナモノヂヤ。ドレヤシラセテヤラウ。オレモアマリヨイ月ヂヤニヨツテ。モシヤセモセウカトマタヌデモナイニ。

月夜よしよゝしい。月夜よし月夜よしと重ねたる詞なるを。いふきたるものなり東屋のまやのと云るも。同じ格にて。東屋の東屋のとかさねたり。おてふはおよといふなり。おんといふにわらず。こよをこといふは當なり。おんをことのみいへる例なし。すべて此の歌。諸注みな訛り得ず

清

君こずむねやへもいら茂こむらさきわが本ゆひに霜しおくとも

○君ガコズハイツマデモ閨ヘモハイルマイ。カウシテ外ニ立ツテ、髪ヘ霜ガオクト云テモイトヒハセヌ。ヤツハリコトデ待テ居ヤウ

宮城野の本あらの小萩露をおもみ風を待ど君をこそまて

○宮城野ノ本アラノ小萩ノ露ガ重サニ風ノフイデクルノヲ待ツヤウニサ。ワシハ君ヲマツワイノ。

本あらハ。本だちのしげからず。あら〳〵生たるなり。さる故になびきすやくて。こに露のおもきよしなり。こ萩のこは。小菅小柴などの類の小なり。木萩にいわらず。又小はつけていふ詞のみにて。ちひさきをいふにもわらず。

あなてひし今も見てしが山がつのかきほに咲るやまとなでしこ

○アヽ戀シイ。ドウゾ今モ逢タイモノヂヤ。山中ノ家ノ垣ニヨウ咲テアルアノヤマトナデシコノヤウナカアイラシイソノコニサ。

○とは、ゝもしなへの略にて常といふこゝろなり

津の國のなには思はず山しろのとばに逢見んとをのみこそ

清

○上は序にて しきしまハ大和の地名なり しきしまの大和といひて日本の惣名にいひなして唐とはつゞけたり ○しき島の大和とつゞくるよしくはしく石上松淑言に見えたり

○(一)何ヲモホカノヲハ思ハセヌ。タヾアヒタイ〳〵ト。ソレバッカリヲサ(三)ジヤウヂウワシヤ思フテ居ルワイ。

とはには。あひみんへかゝれるにはあらず。とはに思ふといふ意なり。上の思はずといふを下へひゞかせて。思ふといふことをしらせたり

つらゆき

しきしまのやまとにはあらぬから衣ころもへずして逢よしもがな

○(上)ドウゾアヒナシニ又アウヤウニシタイヲヂヤ。

ふかやぶ

戀しとは誰なづけんことならんしぬとぞたゞにいふべかりける

○上は序なり 大河の邊は地名にあらずいづこにても大河のはとりをいふなり

○こゝろのうらとは心のうちのうらなり

○戀シイナドト云名ハ。タレガツケタヲヂヤヤラ。ソンナマハリドホイ。名ヂイハウヨリハ。ナニカナシニ。死ヌルトサスガニ云タカヨイワイ。キッウ戀シウ思フトキニハ實ニ死ヌルヤウナワサテ。

よみ人しらず

みよし野の大川のべの藤なみのなみに思はゞわがこひめやも

○(上)一トトウリニ思フヲナラ。ワシガ此ノヤウニコヒシタハウカイ。一トトウリノヲデハナイワイナ。

かくこひん物とはわれも思ひにきこゝろのうらぞまさしかりける

○サイショカラサ。後ニハコノヤウニ戀シカラウモノヂヤトハ。ワシモ思フタコトヂヤ。サイショノワシガ心ノウラナヒカヨウ合タワイナ。

天の原ふみとゝろかしなる神もおもふあかをばさくるも

○ひき野ハ河内國日置と書て今の俗にへきといふにわりあれなるへし梓弓はひくと云かけし冠辞なりつゞらはかづらなり

かは

○神ナリト云フモノハ。ヨニオソロシイ。何ンデモタマラヌ。ケシカラヌイキホヒナモノヂヤケレド。ソレデモ人ノ思ヒアウタ中ヲバトホノケルモノカイ。ソンナカミナリサヘトホノケハセヌ〻ナレバ。タトヒ何〻カアツタトテモ。ノクコトデハナイワシヤ。

梓弓ひきの〻つゝら末つひにわがおもふ人にとのしげ〻ん

○〔一二〇〕末テハドウゾ。ミガ此ノヤウニ思フ人ニ。名ガ立テ。イロ〻トウハサガシケウナルデアラウ

此うたはある人わめのみかどのわふみのうねへに給ひけるとなん申す

夏引の手びきの糸をくりかへしことしげくとも絶んと思ふな

○あの注とらず

○夏野の草のごとくしげく人のいひさわぐといふなり

○タトヒ世間ノウハサハドノヤウニシケウゴザリマセウトモ。〔一二一〕イツマデモワタシヲ絶ウトハ。思召テ下サリマスナ。

くりかへしとは長くつゞきてたゆまれざる意にいへるなり。

此の歌はかへしによみて奉りけるとなん

里人のとゝ夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやは

○人ノウハサヲハヾカツテ。君ハトホノイヲイクカ。在所デノウワサハ。タトヒ夏ノ野ノ草ホドシケクトモ。オレガ逢ズニ居ヤウカ。コレカラトテモアハズニハオクマイ。

餘材の説くだ〻し打聞きおぼえず

藤原敏行朝臣のなりひらの家なりける女をあひしりてふみつかはせりけるとばにいまゝうでく雨のふりけるをなん見わづらひ侍るといへりけるをき

（カッヽケ参リ候カ　アメフリ候ヲデカケニクク候故シバシ見合セ居申候）

いて女にかはりてよめける　　在原業平朝臣

かず〳〵に思ひおもはずとひかたみ身をしる雨とふりぞまされる

○ワシガ一チシンセヲニ思召テ下サルヤラサウモナイヤラ。ソコノホドハドウモキニ（たゝし）紙シガタサニコヨヒノ雨デソレヲ考ヘテ見テ。ソレデワシガ身ノ仕合セ不仕合セモシレルヂヤガ。ソノ雨ハサ。此ノヤウニ段々ト大ブリニナリマスコレデワシガ不仕合セモシレタヂヤワイナ。コノ雨デワシガ身ノ仕合不仕合ヲ知ルト申スワケハ。マアタヽ今ノ御文ノ通リナレバ此ノ雨ガ止ンダナラ御出ガアラウシ。ヤワハリフツタラ御出ハアルマイヂヤ。スレヤコノ雨ハワシガ身ノ仕合不仕合ノシレル雨ヂヤワサテ。かず〳〵にと云詞。諸説みなあたらず。これは俗言に深切にといふにあたれり。そはまづ数〳〵とは物の多きをいふ言なり。さて古歌に。「わが戀、

○能宣集にみそぎする川の淵せにひくわみを大ぬさなりと人や見るらん

によひともつきと云々なと。戀の歌おはきよしをつねによみ。又思ひのしげきよしをいふ。多きしげきは戀る心の深く切（せつ）なるをいへり。されにてかず〳〵にをもさとるべし。こゝの外にも。此の詞をよめる古歌ともみなこの意なり。考へあはせて知るべし。

ある女のなりひらの朝臣をところさだめずありきすと思ひてよみてつかはしける　　よみ人しらず

大ぬさのひくてあまたにありぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

○秡ノ時ニ大麻ヲアマタノ人ガ手ン手ニ引クヤウニ。オマヘハ近イコロハ方方（ハヤ）カラヒツハル所ガ多ウナツタナレバ。思ヒハスルケレドモ。ワシハドウモオマヘヲ頼ミニハサエイタサヌワイナ。

かへし　　なりひらの朝臣

○万葉にしがのあまの塩やくけふり風をいたみたちハのはらで山にたな引くなれをまたくなれをとりたるなり又躬恒集にもしはやくわまのたく火のけ

おはぬさと名にこそたてれ流れてもつひによるせはありてふ物を

○サアワシハソノヤウニ引ク人カ多イ大ヌサヂヤト。名ニコソ立ラレタレ。ソノ大ヌサハ川ヘ流レテハユクケレド。ドコソデハ流レテヨル所ノ瀬ハアルト云フノニ。アンマリソノヤウニ大ヌサヂヤ〳〵ト云テ下サルナワシヂヤトテ末デハトウデヨル所ガナウテハサ。ソノヨル所ハオマヘヨリ外ニアロカイノ。

題しらず

須磨のあまの塩やくけふり風をいたみ思はぬ方にたな引にけり

○スマノ浦ノアマノ塩ヤク烟ガ風ノツヨサニワキノ方ヘナビイテイクヤウニ。ワシガ思フ人モ。思ヒモヨラヌ人ノ方ヘナビイテイタワイノ。

玉かづらはふ木あまたなりぬればたゆ心のうれしげもなし

○オ前ハテウド。カヅラノアノ木ヘモ此ノ木ヘモハヒカヽルヤウニ。アチコチト御通ヒナサル所ガ方〳〵ニデケタレバ。ワシガ方ヲタエハナサライデモソノタエヌ御心ガナンノウレシイ〻モナイ。

ぬ方に立のぼるらし是はその歌の下をとうたるなり心もまたく同し

○夜がれ新万葉に夜避撰もかけり

ふりはえそ思はぬ方に立のぼるらし是はその歌の下をとうたるなり心もまたく同し

○つき草を俗につゆ草とは花ともいふ

雛里に夜がれをしてかはと〻ぎすたゞこ〻もとにねたるこゑする

○夜中ニアレ時鳥ガツイコトデサ鳴ク聲ガスル。イツモトマル里ハドコノ里カシラヌカソノ里ヲバ今夜ハトマルノヲ一夜闕シテ。メヅラシイコヲノ。庭デ寝タトミエル。アソコデ子テ井テナク聲ヂヤ。

されはたゞ時鳥の歌なるをなしとは。ねたる聲するといへるを聞ねがたし。然るを戀の意に注したるは。しひごとなり。菅家萬葉には夏の歌とし。六帖にもほと〻ぎすの歌とせり。

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして

もて紙にそめ又それをうつしてものを染れどうつし花といふなり

○イヤモウ人ト云モノハ。口ベツカリナモノヂヤ。(三)ウツリヤスイ心ハ。

口トハキヅイチガヒデサ

いつそろのなさよなりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

○誰デモ口デハ嬉シイ〻ヲ云テクレルケレド。皆ウンデ。子カラ頼ミニハナラヌカ。ウソ云フコトノ無イ世ノ中デアラウモフ。人ノ云テクレル〻カ。ドレホドウレシイコトデアラウゾ。

いつはりと思ふ物から今さらに誰まことをか我とたのまん

○ウンヂヤガドハ思ヒナガラモコレマデ。頼ミニ思フテ居ル人ノ云フ〻ナレヤワシヤヤツハリソレヲ頼ミニ思フテ居ルワイノ。タトヒ外ニマコトナ人ガアツタトテモ。今サラ心ヲウツシテ。誰ヲタノミニハセウゾイノワシヤトツトサウ云心ハナイ。

素性法師

○ちるをもかはるをもうつろふと云うちに秋風とあるにはちる方なるべし然れば心のわれによらずうつろふにたとへたり

○六帖にはならんとすらんとあり

秋風に山のこのはのうつろへば人のこゝろもいかゞとぞおもふ

○此ノゴロノ秋ノ風ニ山ノ木ノ葉ノ色ガカハツテチツテイクヲ見レバ。人ノ心モドウアラウゾカハリハスマイカトサキヅカヒニ思ハル。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　とものり

蟬のこゑ聞てかなしなつころもうすくや人のならんとおもへば

○蟬ノナク聲ヲキケバ。モウオツツケ秋ガ近イト思ヘバ頼ミニ思フ人ノ心モ秋風ガタツテ。心ザシガ。此ノ節ノ夏衣ノヤウニウスウナルデアラウカト。思フノデカナシイワイノ。

餘材あまりくだ〳〵し。夏衣といへるは。蟬の羽衣の緣をかねてたゝうすくといいん料の枕詞のみなり。打聞説二の句にかなはず。

題しらず　よみ人しらず

○うつせみは（ウツ、ノミ）現身なり世の人といふ冠辭なり

○そをだにはそれをだになり

うつせみのよの人ごとのしげ〳〵ればわすれぬものゝかれぬべらなり

○（一）世間ノ人ノウワサガシゲ〻レバ。ワシヲ忘レハセヌナガラ。オノヅカラトホノタノデアラウト思ハル〻。又人ヲワスレハセヌナガラ。オノヅカラトホノクノデアラウト思ハル〻

あかでこそ思ひそめしかたみに思ふ中はむなしなめそをだに後のわすれがたみに

○思フ中ナラ。タガヒニアキノコヌウチニサ。ハナレテシマハウ〻ヂヤ。ドウシテモ久シウナレバ。アキノクルナラヒナレバ。セメテ今此タガヒニアカヌトコロチナリ左後〻ノ思ヒダシグサニシテサ。ハヤアキガキテカラハナレテハ。何ンニモ思ヒダシグサモナイワサテ。

餘材わすれがたみの歌わろし

わすれなんと思ふ心のつくからにありしよりけにまつぞかなしき

○コチノ思フヤウニモナイ人ヲ思フテ此ヤウニ心ヲ苦シメウヨリハ。ワスレテシマハウゾト思ベバ。又ドウヤラ心ガソウナツテ。四今マデヨリハナホキツウカナシイサウ思フ心ガツクカラシテハヤマア。此ヤウニカナシウテハ。トテモワスレテシマハル〻デハナイ。千秋云。ともしは。二の句へつくべし

○この歌兼輔集に入て女の歌なりかへしは「わすれなばたれかは人をうらむべきうきにおくれてしるはわれかは」

わすれなん我をうらむなほと〻ぎす人の秋にもあもとも思せず

○ワスレテシマウト思フカ必ズオレヲ恨ムナヨ。時鳥ノ秋ニナラヌサキニ早ウドコヘカ。インデシマウヤウニ。オレモ人ノ秋風ニハアハウトハ思ハヌ。千秋云。二の句にてよみ切て。三の句へつゞけてよむべし。

○万葉に「人ごとをしげみこちたみわはざりきこゝろあるごとおもふあわが夫」

たえずゆく飛鳥の川のよどみなば心ありとや人のおもはん

○タヘズ流レテツヒニヨドンダ〻ナイ。此ノ飛鳥川ノヨドンダヤウニ。オ

○そこひは海のそこ川の底なと下のかぎりをのみ云にあらず上下四方いづれにも遠くふかきをいへり

○紅の初花ぞめさいばりに衣はすらんとも云ふにくすべて初花を專らとする中に紅は房のあなたある中にその最中なるがはやくさきてよき色なるゆゑにはつ花ぞめの色ふかくと云なり

レガモシタマ〳〵サシツカヘテモアツテ。通ハヌ一ガアツタラ。ナンゾ心ニシナノアルヤウニカノ人ガ思フデカナアウ。

○百八

四の旬。一本に心あるとやとあるにつきて。田中道まろが心あるでとやの。でもしのおちたるならんといへる。まことにさることなり。此の歌ふるきすがたなれば必しかるべし萬葉の歌の例みなしかなり。あるとやたては。語ヒヽのはず

此の歌ある人のいはくなかとみのわつま人が歌なり

淀川のよどむと人の見るらめどあがれてふかき心あるものを

○此間ワシガエイカヌチ。川ノヨドンダヤウニ。ナンゾトヤコホリガアルト思フテアラウケレドモ。ワシヤ末長ウイツマデモト思フ深イ心ヂヤモノナンゾトヤコホリガアロウイ

素性法師

夏蔦の絶ぬつかひのかよはねぢもとしもあるでとおもひつるかも

○ふかきは淀のよせなり

そこなきひ淵やむさわぐ山川のわさきせにこそわだ涙はたて

○山ノ川ノ淺イ瀬コソザワ〳〵ト涙ハタツモノナレ。底ノナイヤウナ深イ淵ガサワグモノカ。深イ淵ハケツクサワギハセヌ。テウドソンナモノデシンジツニ深ウ思フ人ハ口ヘダシテ何ントモイヒハセヌ。シンジツラシウナンノカノト云フハンレヤケツク心ノ淺イアダ涙ヂヤ。

よみ人しらず

くれなゐのはつ花ぞめの色ふかく思ひし心われわすれめや

○(一二)サイショカラ深ウ思ヒソメタ心チ。ドンナ一ガアツタトテワスレサカワシヤ。イツマデモ忘レルコトデハナイ

かはらの左大臣

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑにみだれんと思ふ我な

○色ヒニなるは次のうたに見るに色のことにかはり行なり秋風になびくを我になびくまでそへしと云はわろし色の異なるといはんに爲に三四の句はよめりと見るべし

らなくに

○(一二)タレユエニ外ヘ心ヲチラサウゾ。オマヘヨリ外ニ心ヲチラスヲシヂャナイゾエ。

しのぶもじずりの説。顯注よろし。打聞わろし

よみ人しらず

思ふよりいかにせよとか秋かぜになびく淺茅の色とになる

○ワシハコレ程ニ深ウ思フニマダ此ウヘチドウセイト云フテ(三四)人ハ心ガハリノシタフゾ。コレホドニ思フ此ノウヘハモウドウモ。シヤウガナイ

濁

ちゝのいろにうつろふらめどしらなくに心し秋の紅葉ならねば

○人ノ心ハアチヤコチヤイロ〳〵ニウツルデアラウケレド。心ハ紅葉ノヤウニ色ノ見エルモノデハナケレバ。ウツロウノカシレヌ。

餘材はしめの説わろし。打聞よろし。

小野ノ小町

あまのすむ里のしるべにおらなくにうらみんとのみ人のいふらん

○海邊ノアマノスム里ノ案内者ニコソ浦ヲ見ヤウトハ云ハウハズノフナレワシハソンナ。浦ノ案内者デモナイニドウ云フテ。ウラミヲ云ハウ。ウラミヲ。云ハウバカリ。ヒタモノ人ノイフヲヤラ。

しもつけのをむねくもり日の影としなれる我なれやめにこそ見えぬ身をばはなれず

○ソラノクモツタ日ニハ。人ノ影ノアツテモ。見エヌヤウナモノデソレト目ニ見エコソセヲ。ワシハ戀ニヤセホソツテ。此ヤウニ影ノヤウニナルホド思フヲナレバ人ノ影ノ身ヲハナレヌヤリニ。心ハジヤウヂウ。思フ

○此歌は人の我をうらみんといふことをいひおおせしかは又人づてに聞てよめるなるべし

人ノ身ヲハナレハセヌ。

○この歌は人の方よりわがまゝろのかはれるやうにいひおこせし時のたへなるべし

つらゆき

色もあさき心を人にそめしよりうつろはんとはおもはえなくに

○色ノアルモノナレバコソ。ウツロウテカハリモセウケレ。人ノ心ハ色ハナイモノナレバソノ色モナイワシガ心ガ。カノ人ニシミコンダカラハ。イツマデモカハラウトハ思ハレヌ。

よみ人しらず

めづらしき人を見んとやしかもせぬ我下しものとけわたるらん

○しかもせねはさもせぬなり

○これより下五首は立かへりて戀る心なり

○久シウアハヌメヅラシイ人ニアハウトテヤラ。サウシモセヌノニ。ワシガ下紐ガコノゴロハ度〻ヨウトケル。

（千秋云。譯にサウシモセヌノニとあるハ。卽チ下紐をときもせぬにといふことなり）

かげろふのそれかあらぬかはる雨のふる人なれば袖ぞぬれける

○かげろふはそれかあらぬかといはん冠なり

○〔一〕サウカサウデハナイカ。モウ見ワスレタクライヂヤ。サテモ〻〔二〕久シウアハナンダ人ヲ見レバ。イゼンノコトガ思ヒダサレテ。涙ガサコボレル

四の句。六帖また顯昭本に。ふる人見ればとあるぞよろしき。

（千秋云。此ノ集のなればゝ。みぞなにうつし誤れるなり。みとなと似たり）

ほりえこぐたなゝしを舟こぎかへり同じ人にや戀渡りなん

○大船にふなだなうちてなとあり小舟にはその棚無きなり

○堀江ヲ往來スル小船ノ。イク度モ同ジ川筋ヲノボリ下リスルヤウニ。ワシハマヘ方ノ同ジ人ヲ。又タヲモドリ〻。此ヤウニイツマデコヒシタウ〻ヤラ。

○この歌後撰にみやづかへし侍りける女ほどひさしくありて物いハんといひ侍りけるにおそくまかりければ枇杷の左大臣「よひのまにやなぐさめよいそのかみふるのかへしとてのかりにしに床も打はらふべくそ今のうたあり」せの集も同じ

清同

わたつみとあれにしとこを今さらにはらえ袖や沫とうきなん

○ワシガ床ハ。久シウウチタエテ思フ人ト逢テ寐タコトモナイユエ。カナシサニ涙ハ海ノヤウデ。ソノ海ノアレルヤウニアレテシマウタ床ジヤニ。久シブリデ又今サラ。ソノ人ニアフヂヤトテ。ソノ床ノツモツタ塵ヲ。袖デハラウタナラ海ヘ沫ノウクヤウニワシガ袖ガ涙ニウタデアラウ。

清

つらゆき

いにしへに猶立かへる心かなこひしきことにものわすれせで

○今デモヤツハリ昔ニ立カヘツテ。マヘ方ノ人ガ戀シイ。サテモ〳〵物ワスレセヌ心カナ。ドウゾ此ノヤウニ戀シイコニ物ヲスレチシテ。マヘ方ノ人ヲバドウソ忘レテシマハイデ。

人をしのびにあひしりてあひがたくありけれどその家のあたりをまかりありきけるをりに雁のなく

○ある人云鳴てわたるは詞書に見えてその家のあたりまへわたりする心なり

○住ずなりにけるとはいにしへは女の方へむこたるものゝいきて住しなり

をきゝてよみてつかはしける　大とものくろぬし

思ひいで〳〵戀しきときは初かりの鳴てわたると人しるらめや

○思ヒダシテ戀シイ片ハ。アノ雁ノ鳴テワタルヤウニ。我モ此ノトホリニ此門ヲ泣テトホルト云フコトヲ。コノ家ノ内ノ思フ人ハ知ウカヤ。カウヂヤトハシリハスマイ。

右のおほいまうち君（モウカヨハヌヤウニナツタレバ）すまずなりにければかのむかしおこせたりける ふみどもをとりあつめてかへすとてよみておくりける　典侍藤原（ないしのすけ）よるかの朝臣

たのめこし言の葉今はかへしてん我身ふるればおきどころなし

○近院は春日の北烏丸東號松殿右大臣能有家也の右大臣は文德天皇の御子にて源朝臣なり

○おのがものかはおのがものならはらなり仁德記に諺曰有海人耶因物以泣云々

○コレマデイロ〳〵ト末タノモシサウニ。オツシヤツテ下サレタ御祈ヒモ（レユヘ）モウ御モドシ申シマセウゾ。ワタシガ身ガコノヤウニアカレテシマウタレバ。今デハモウ此ヤウナ御祈ナドハ。此ノ方ニオキドコガゴザリマセヌ。

ふるれども。ふるさるればなり。ふりぬればとは異なり。

かへし　近院ノ右のおほいまうち君

今もとてかへすとのはひろひおきておのがものから形見とやみん

○モウハト云テカヘシオコサレタ此ノ祈ヲ。ヒロウテトツテオイテ。モト自分ノ物ナガラモンナタノ形見ヂヤト。思フテ見マセウカイ。

題しらず　よるかの朝臣

玉ぼこの道は常にもまどもなん人がとふとも我かと思はん

○オマヘハ今デハ。毎夜御通ヒナサル所ガ外ニアルヂヤガ。タマ〳〵今夜

○欄橋は人の家の前の小川などに板にて欄のかたちにたてわたし柱立てしる小むしなり

○昇（のぼる）の朝臣は河原ノ左大臣

コレヘ御出下サレタハ。定メテ道ヲトリチガヘナサツタデアラウヂヤケレドコノウヘトデモ。（つねにも）イツデモコヨヒノヤウニドウゾ道ヲトリチガヘテ御出下サレベヨゴザリマスソシタラ余ノ人ノ所ヘ御出ナサルノデモ。實ニワタシガ所ヘ御出下サレタノカト思ヒマセウワサヲ。

よみ人しらず

またといはゝねてもゆかなんしひてもく駒の足をれまへのたな橋

○マアシバラクト申スカワニハコヨヒハ。トマツテモインデ下サレカシ。ソレニナンゾヤトリイソイデ。トツカハトイナシヤルハサテモ〳〵キコエマセヌ。カウシテフリモギツテイナシヤルヘアノオ人ノ馬ノ足ヲツマツカシテコケサシテクレイ門ノ前ナ溝ノ橋ヨコリヤ。

（千秋云。譯のはてに。コリヤといふ詞をそへられたるをもしろし。さる勢ある歌なり。さて此の歌俳諧の類なり）

中納言源ノのぼるの朝臣のあふみのすけに侍ける

の男湛の弟り閑院は源宗子朝臣の女なり

ときによみてやれりける　　閑院

相坂のもふつげ鳥にあらばこそ君がゆきゝをなくゝもみめ

○ワシガ身モ。相阪ノ関ニハナシテアル。庭鳥ナラバ。ナキ〳〵モセメテハオマヘノ近江ヘ御通ヒナサルノチナリ所見ヤウケレ。ワシハサウシテ御往來ナサルノヲ見ルヿサヘナラヌガカナシイワイノ。

題しらず　　伊勢

故郷にあらぬものからわがために人の心のあれて見ゆらん

○故郷コソアレテ見ユルモノナレ。ワシガ思フ人ノ心ハ。故郷デナケレドモワシガタメニ此ノヤウニアレテウト〳〵シウナッタハドウ云フヤラ。餘材打聞わろし。見ゆといへるは古里のあれて見ゆるかたにいへる詞なり人のこゝろの方へかけていい見べからず。

龍

○和名鈔に防已一名驛離和名あをつゞらと見ゆ延喜式にも青づゝらと見ゆたり六帖にはたねつくれどもあふよしもなしと作者なしと○六帖に大ぞらにわがよぶ人もきてねぬおもものをもふでとになぞといはるゝ

山がつのかきはにとへる青つゞら人はくれどもとゞてもあし

○「上」思フ人ノ所カラ此ノアタリヘ。人ハ度々來ルケレドモ。ワレガ方ヘトヽテハ子カラコトヅテモナイ。

上句はたゞ。くるの序なり。

大ぞらに戀しき人のかたみかとものの思ふでとにながめらるらん　　さかゐのひとざね

○空ハ。戀シイ人ノ形見カイ。カタミデモナンデモナイニ。ドウ云コトデ戀シフ思フタビゴトニコノヤウニ。ナガメラルヽヤラ。

あふまでのかたみも我は何せんに見ても心のなぐさまなくに　　よみ人しらず

○又アフマデノ形見ノモノモ。ナニトセウゾ。ヤクニタヽヌ物デヤ。コレ

チ見テモオレハ。戀シウ思フ心ガ。子エカラヤスマルコモナイ。

おやのまもりける人のむすめにいとしのびにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひければいそぎかへるとてもをなんぬぎおきていりにける

その後もをかへすとてよめる　おきかせ

あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかぶもくづなりけり

○コノ裳チノコシテオカシヤツタハ。定メテマタ逢フマデノ形見ニ見ヨトイフ御心デコンゴザラウガ。コレヲ見レバ。オマヘノコトガ思ヒダサレテ涙ガナガレテサ。海ノ涙ニウク藻屑ノヤウニ涙ニウク裳デヤワイノ。

題しらず　清　よみ人しらず

かたみこそ今はあたなれこれなくは忘るゝ時もあらましものを

○形見ハサ。ケツク今デハモウ。ニクイカタキデヤワイノ。コレガナクハチリニハ又ワスレテ非ルトキモアラウ物ヲ。コノ形見ガアルユエ。見テハ思ヒダシ〳〵シバシノマモワスレラレヌ。

○流布のいせ物がたりにはいにはあらでとあり。わが定れる妻には故に本意にはあらぬ義にみなへれ眞名伊勢物語には穂閑者と書り今もしかあり

○戀歌五

五條のきさいの宮のにしのたいに住ける人にはいにはあらでものいひわたりけるをむ月のとをかあまりにおんはかへかくれにけるあり所はさゝけれどもえものもいはで又のとしの春梅の花ざかりに月のおもしろかりける夜こぞをこひてかの西のたいにいきて月のかたふくまであばらなるいたじき

けんを流布のいせ物かたりにより後なほせしものか本意とてはこゝの詞にふさがはず

にふせりてよめる　在原ノ業平ノ朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつともとの身にして

○今夜コヽヘ來テ居テ見レバ。月ガモトノ去年ノ月デハナイカサア。月ハヤツハリ去年ノトホリノ月ヂヤ。春ノケシキガモトノ去年ノ春ノケシキデハナイカサア。春ノケシキモ梅ノ花サイタヤウスナドモ。ヤツハリモトノ去年ノトホリデ。ソウタイナンニモ。去年トチガウタコハナイニ。タヾオレガ身一ツバッカリハ。去年ノマヽノ身デアリナガラ。去年逢タ人ニアハレイデ。其ノ時トハ大キニチガウタコワイノ。サテモ〳〵去年ノ春ガ戀シイ。

二つのやはやはの意なりさて結句の下へもとのやうにもあらぬとかなといふ意をふくめたり。怨ふくめたることは。月やはあらぬ春やはあらぬ。月も春も。もとのまゝなるにといへる。上の句にて聞ゐたり。すべてこの朝臣の歌は心あまりて詞たらずといふは。かゝるところなり。餘

○人と指は兄の時平公なり

○川をわたるは人に逢にたとへて云ふこと多くわり

材打聞ともにわろしかの説とものごとくにては。してとゝぢめたる語のいきはひにかなはず。よく〳〵語のいきはひをわぢはひて心得べき歌ぞかし。

題しらず　清

花すゝきさ我こそ下に思ひしがほに出て人にむすばれにけり　藤原ノなかひら朝臣

○内〻我コソ逢ハウト思フテ其心デ居タニ。ソレデマア。我ガオモイレハムダヿニナッテ。此ノ花薄ノ穂ニデタノチ。結ンダヤウニ。オモテハレテ外ノ人ガトリクンデ逢テシマウタワイ。ハレ殘念ナコヤ。花すゝきをむすぶと。伊勢家集此の歌のはしの詞に見ゐて。餘材抄に引り。

よそにのみ聞まし物を音羽川わたるとなしにみなれそめけん　藤原ノかねすけ朝臣